
星屑たちの祈り

はりがねん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑たちの祈り

【NZコード】

N4773W

【作者名】

はりがねん

【あらすじ】

スノウが目を覚ますと、そこは見慣れない世界だった。違和感を覚えるも、それが何かを認識することができない。なぜなら、スノウには名前以外の記憶がなかったから。白い虎と緑の龍に拾われ、スノウは徐々に世界を知っていく。しかし募つていく焦燥感に駆られ、スノウは見知らぬ世界を歩き始める事にした。それが一体、何を意味しているのかも知らずに。

物語の都合上、残酷な表現・不明瞭な部分が見られます。不明瞭な部分は進んでいくと分かります。気長にお待ちください。

世界観紹介（前書き）

世界の部分のみでも支障はありません。
種族（型）や属性は出るたびに物語の中で軽く紹介するつもりで
はいます。

世界観紹介

「」のお話はハイファンタジーに近いです。なのでいわゆる常識が通用しません。なので、世界観紹介を付ける事にしました。この要点が分かっていないと、非常に読みにくかたりします。すみません。

思いつく限りでしか上げられないで、良く分からない、「」はどうなってるの？などと気になつた所があれば指摘してください。内容によっては物語上、回答できない事もあります。「」了承ください。

・世界

この世界は常に夜の状態です。星も多いです。
いわゆる「時間」の概念が存在しません。それぞれ好きな時に、好きなように過ごします。

住人達は、基本的に睡眠や食事を必要としていません。ですが、気絶する事はあります。意識して眠る事も可能です。食事も摂れない訳ではないので、嗜好品として人によつては摂取しています。果物などは町の外の木になつていたりします。植物の生態系は変わりません。ただし、日光を必要としてなかつたりと、様々な不明点は見られます。

・種族（「型」とも。この世界では同義語として扱われます）

この世界には大きく五つの種族が存在します。なお、それぞれの種族に身体能力の差はありません。ただし、獣型は例外扱いとしています。

人型：限りなく純粋な人に近い姿をした種族。色など人と異なる部分が必ず存在します。獣型と同じくらい、珍しいです。そのため、他の種族からは羨望と強い嫉妬を受けます。この世界では一番危険の多い種族です。

獣人型：人と獣の姿が混在した種族です。個体差が強く出るため、獣に近い獣人型（顔が獣など）や人に近い（耳や尻尾があるだけなど）獣人型がいます。もつとも多い種族と言えます。

竜人型：人と竜の姿が混在した種族です。こちらも獣人型と同じ個体差があります。作中では「竜」と「龍」の字が混在しますが、これは西洋に近い型を「竜」、東洋に近い（蛇っぽいの）を「龍」としています。

機械型：人と機械の姿が混在した種族です。こちらもやはり個体差が出来ます。ちなみに動きは機械っぽくありません。言葉も普通に発します。機械型というだけあって面白い姿をした者もいますが、話の都合上、出ない可能性があります。「機械だからすごいんじやないの？」と先入観にとらわれるかも知れませんが、運動能力は他の種族と変わりません。

獣型：文字通り、獣の姿をした種族です。この世界で唯一、獣の姿をしています。そのため、出来そこないとして扱われる事が多く、嫌われ者です。人型と同じくらいか、それ以上に少ないです。この種族は例外として、運動能力が他の種族と比べて抜きんでる事が多いです。運動能力は獣の種類に依存します。

- 属性

種族以上に重要な要素です。基本的にこれによって得意なもの、

苦手なものが分かれます。種類が豊富で、住人ですら知らない属性も存在する時があります。物語の中で出た場合のみ、隨時付け足していきます。

ワタ属：この世界では特に多い属性。弱点も一番多く、とても弱い属性です。他の種族より遙かに部位の切断が容易で、その上燃えやすい性質を持っています。ただし、打撃と水には強いです。切り傷の修復も一番容易で、異物を身体の中に入れる事も、取りだす事も容易に行えます。もつとも、その分身体が大きくなったり太くなったりします。他の属性に比べると、非常に柔軟な身体です。

弱点も多いですが、利点もかなり多いです。ちなみに汚れや塵など埃は落ちにくいため、そういう環境をかなり嫌っています。

鉄属：^{くろがね}この世界ではそこそこ多い属性です。打撃、斬撃に強いです。ただし、強い衝撃を受けると身体が凹む事もあります。ですが、凹むことは滅多にありません。

火に強いですが、熱はかなり持ちます。水に非常に弱く、長時間使っていると身体に不具合が生じます。おまけに、生じた不具合はなかなか治りません。とても打たれ強いけれど、弱点にはとことん弱いのが難点です。ちなみに汚れは非常に落ちやすいので、一部のワタ属からは羨望を受けていたりします。

・その他

『パートについて』

この世界に存在する人々は、同じ属性であれば身体のパート交換が可能です。ただし属性が違う場合は交換できません。

なので、身体のパートを取り扱う仕事もあります。ただし、それは他人のパートを交換、というより奪う行為となります。警察は存在しませんが、非合法の組織としての位置付けで問題ありません。

ちなみにパー^ツの一一番人気は人型です。

『砂時計について』

この世界に存在する人は必ず持っています。この砂時計が何を計つているのかは、物語上、明かせません。

世界観紹介（後書き）

ここまで読んでくださった方はお疲れ様でした。ちなみに隨時追加されます。
それでは、本編へどうぞ。

プロローグ（前書き）

少し悲しい話になります。シリアスです。

プロローグ

サラサラと、何かが流れしていく音がする。

その音を聞くと、言い知れない不安を覚える。
急がなくてはならない。立ち止まつてはならない。
理由は分からなかつた。
けれど、ひとつだけ言える事がある。

私は、急がなくてはならない。
すべてが手遅れになる前に。

* * *

古びた本に囲まれて、その人物は椅子に深く腰をおろしていた。
どことなく優雅さを感じられる物腰。ただ、奇妙な事に、その人物
は羊の姿をしていた。ローブに包まれているため、服の下はどのよ
うになつていてるかは不明だが、顔はまぎれもなく羊。

ふわふわの毛に埋もれずに頼りなく垂れる耳。くるん、と可愛ら
しく巻いている角。不思議な事にその羊は眼鏡をかけている。その
せいか、どこか知的な印象を醸し出していた。

何かに気付いたかのように、羊はふむ、と読んでいた本から顔を
上げる。

「また誰かが来たようですね」

羊はこの町のあるじだ。この町の事ならば自分の体の事のように分か
る。実際、町で何が起こったのか手に取るように理解していた。

羊は目を閉じ、その人物がどこに落ちたのか探る。

古びた路地。ゴミ置き場。羊と同じように一足で立っている、
白い虎と緑の龍の姿が見えた。一人はそれぞれの腰に大きく反りの

ある剣を帶びている。湾曲刀だ。それ自体は珍しい事ではない。問題は持つている人物たちにこそある。

「おやおや、これは……。運がよいですね」

羊はかすかに笑みを浮かべる。

二人は羊の顔見知りだ。それどころか、この町にいる人で知らない人はいないほどの有名人だ。

彼女にとつては、運が良いだろう。しかし、彼にとつては悪かつたと言うべきか。彼の残り時間は、もうない。しかしお人好しな彼は、そんなことなど気にせずに彼女を救うだろう。その様は見なくとも想像する事ができた。

羊は椅子から立ち上がり、持つていた本を書棚にしまう。

「さて、彼女は願いを叶えることができるのでしょうか」

近い内にやつて来るだろう来訪者のために、羊は準備をする事にした。

1 - 1 白い虎と緑の龍（前書き）

読みにくい言葉の振り仮名を追加しました。内容は変わっていません。

せん。

1・1 白い虎と緑の籠

真っ暗だった。頭がぐらぐらする。まだ馴染んでいないんだ、とほんやり思う。何が馴染んでいないのかは全く分からないが、不思議と不安はない。

「おーい、起きろ。こんな所で寝てると色々持つてかれるぞー」

張りの良い声が耳に入る。それに呆れるように几帳面そうな声が続いた。

「クラウド。そんなやる気のない方法で起きると思つていいのか。それに色々では、はつきりとしない。もつと具体的な言葉で説明した方がいいだろ?」

豪快な笑い声が響く。

「アクセル、お前は細かすぎる。俺ぐらいでーんと威張つてバーンと適当で良いんだ!」

「意味が分からん。分かる言葉で説明してくれ」

再び呆れたような言葉が耳に入つていた時に、視界が暗い理由をよひやく理解する。

そうだ。目を開けないと、なにも見えない。

ゆづくづくと、目を開く。建物で切り取られた空が見える。建物の隙間から見える空には、多くの星が瞬いていた。続いて身体が動くかどうか、確認しながら上半身を起こす。手をついた場所が不安定だ。手元を見ると、何かがたくさん詰められている黒いビニール袋が目に付く。横になつている身体も不安定なのに気付き、周囲を見回すと同じようなビニール袋が大量にあった。ビニール袋の上に落ちたらしい、と働かない頭で理解する。

「おい、アクセル。お前がつむさくしている所為で起きちまつたじやないか!」

「どう考えたら、そつこつ結論になる。オレよりもお前の方がずつと、うるさい」

そこには白い虎と緑の龍が服を着て一足で立っていた。その事に違和感を覚えるが、すぐに霧散する。逆に、なぜ違和感を覚えたのかが分からなかつた。

「それにも、珍しいな。ここまで人型に近い奴は久しぶりに見る。俺はクラウド。お前さん、名前は？」

クラウドと名乗った白い虎は、にやりと鋭い歯を見せて笑う。恐怖よりも愛嬌を覚えるのが不思議だつた。姿に反して、警戒心を抱かせない雰囲気を持つているからだろうか。

「…………」

「喋れないのか？ その口は飾りなのか」

答えないでいると、緑の龍は睨みつけるように目を細めた。するとクラウドは緑の龍の頭を思い切り叩く。

「ばつかやろ！ お前が睨むから怯えちまつてるんだろ。少しば自分の顔を自覚したらどうだ。あと、手前も名乗れ」

「アクセルだ」

クラウドに言われ、渋々といつた具合にアクセルは名乗つた。

「…………」

「おい、クラウド。こいつの口は飾りのようだ。もしかしたら、本当に別の場所から発声するのかもしれない」

「落ち着け、馬鹿モン。どう考へても、この子の口は俺たちと同じ位置だろ？ もしかしたら、生まれたばかりなのかもしれない」

クラウドの言葉にアクセルは沈黙する。アクセルは目を細めてクラウドを見た。

「捨てよう。厄介事は『免だ』

クラウドは声を上げて笑う。アクセルは何が面白いのか分からない、と目を細めている。クラウドは視線を気にせず、アクセルの背を思い切り叩きながら田尻の涙を拭つた。そして歯を出してにやりと笑う。

「いいや、こんな面白いモンを拾わずにいられるか！ せつかぐだ。

拾つてここに慣れるまで面倒を見れば良い」

「本気で言つているのか」

ぼんやりと二人のやり取りを眺めていると、白い虎に腰を掴まれ、軽々と持ち上げられた。正面から見ている時は気が付かなかつたが、クラウドは背に大きな両刃の剣を背負つていて、アクセルの方を見ると、腰に大きく反りの入つた湾曲刀を差していた。

「とりあえず、場所を移動しよう。ここじゃあ、妙なのに目を付けられんとも限らんからな」

アクセルは顔を逸らすが、反対はしなかつた。

三人は噴水のある開けた広場にやつてきた。クラウドはゆっくりと腕から噴水の縁に下ろし、腰かけさせてくれる。

「さて、お前さんはここがどこか分かるか」

首を傾げると、アクセルが目を細める。

「口で答える。それとも、まだ使い方が分からぬのか」

「そう焦らせんな。言葉を出そつと意識してみろ」

意識。あの人は、どうやってたつけ？

「……こと、ば」

口から掠れたような声が出た。しかし発声方法が分かれれば、後は簡単だつた。淀みなく言葉が出てくる。

「ここは、どこ？」

アクセルは鼻を鳴らして顔を背ける。それに對し、クラウドは大口を開けて笑つた。

「ほらな、喋れただろう。ようこそ、俺たちの世界へ」

意味が分からず首を傾げる。

「……？」

「理解できていない様だぞ。それに何だ、俺たちの世界とは。傍か
ら見て痛々しい言動はやめる」

アクセルは呆れたような溜息を吐いた。

「かつかつかつ、そう言つた。これが俺の最大の利点だ」

「汚点の間違いだ。話が逸れている。ここは始まりの町だ。お

前、名前は何だ」

問われて首を傾げる。

名前。

唐突なイメージが脳裏をかすめる。

白い何か。空から落ちてくる。寒い。冷たい。触りたくても触れない。消える。儂い。

「スノウ」

気が付いたら無意識の内に答えていた。クラウドはにやり、と笑う。

「そうか、スノウか。似合あつごいの名だ。生憎と雪なんぞ、お目にかかる事がないがな」

「……雪？ 雪とはなんだ」

クラウドは目を丸める。

「お前、知らないのか。雪と言えばほら……なんだ？ まあ、とりあえず、こいつにぴったりって事だ」

「……聞いたオレが馬鹿だつた」

アクセルは諦めたように息を吐く。

「しろいもの」

二人はスノウに視線を向けた。アクセルは怪訝けげんそうな視線を向けているが、クラウドは面白おもしろそうに笑っていた。

「こいつは知ってるみたいだぞ。なるほど、白いものか。そう言わればそうだった気がする」

「気がするつて……。確かに、こいつの髪は真っ白だな。目は蒼いが」

スノウは肩に落ちている白らの長い髪を掴んで、目の前に引き寄せた。確かに白い。真っ白だ。その際見えた手に違和感を覚える。スノウは自らの手と、クラウドの手を見比べた。

「……ちがう」

「おう？ そりゃあな。種族が違えば違つだろ」

「しゅぞく？」

「おうよ。俺は獣人型だ。アクセルは竜人型だな。んで、お前は純粹な人型に近いな。見てみれば分かる」

クラウドに促され、スノウは噴水の水を覗きこむ。

そこには人がいた。長い白い髪を無造作に流し、今も一部が水面に落ちて濡れている。目は蒼く、青空を彷彿させた。細い身体をしている。女、と呼ばれる身体だ。その女は水面に手を伸ばし、自分に触れた。水面に映る姿が歪む。

「この辺りでは珍しいからな。気付けた方が良い。パーツの素材も良く出来ているから盗られる可能性も捨てきれん。しばらくは俺たちと一緒にいた方がいいだろ?」

「?」

言葉が難し過ぎて理解できなかつた。

「とりあえず、ここにいても仕方ない。まず、リブランの所に行くのが先決ではないか? 奴なら必要な知識を詰め込んでくれるだろから」

アクセルの言葉にクラウドは頷く。

「それもそうだな。よし、だったら羊さんの所に行くとするか」

1・2 勤勉な羊

スノウはクラウドの言葉に首を傾げながらも、一人の後ろをついて歩く。スノウの様子に気付いてか、アクセルが説明し始める。「この町の町長をしている奴だ。羊の姿をしている。名前はリブラン。世話好きなんだが、お節介が過ぎる所もある」

「ひつじ……」

スノウは羊を想像してみる。羊はふわふわの毛並みをしていて、丸い角を生やしている印象だ。実物は一度も見た事はないが、おおむねそんな所だろう。

そこまで思い至り、不思議に思つ。

（見た事がない？なら、どうして私は知つているのだろう……）

そもそもスノウは生まれたばかりだ。なのに、なぜ自身ですら知らなのはずの事を知つているのか。

「あと、あの羊さんはこの世界で一番物知りだ。知りたい事があるなら聞くといい。ある程度の事なら答えてくれるさ」

「時々、妙な言葉で返されるがな」

クラウドは苦笑いを浮かべる。

「まだ早い、いざれ分かるつてやつか？」

「ああ。俺は何回かそれで追い返された事がある」

アクセルの淡々とした物言いに対し、クラウドはぱつぱつが悪そうに顔を背けた。

「そりゃあ、そのまんまだからな……」

アクセルは眉根を寄せた。

「クラウドに言わると、馬鹿にされた氣がする。むしろ馬鹿にしている。オレはお前よりも頭が良いつもりだ」

クラウドはその言葉に大笑いした。

「かつかつか。それは俺を馬鹿にしているのか？」一応、俺はお前

よりも長くこの世界にいるんだが

「それは関係ないだろ。普通、この世界に生まれたのならば最低限の知識はある。知識と経験と頭の出来は全くの別物だ。オレはお前の様な、行き当たりばったりな思考はしていない」

「お前が俺をそういう日が来るとはな、アクセル」クラウドはにやり、と笑う。分が悪いのを悟り、アクセルは鼻を鳴らした。

「…………」

スノウは一人のやり取りを無言で眺めている。話についていく事が出来ないため、理解するために一人の会話に耳を澄ませていた。「おお、そうだ。スノウ、お前は外を出歩く時は気を付けた方が良いぞ」

クラウドの唐突な言葉にスノウは首を傾げる。

「注目されている事に気付いていないのか」

アクセルに促され、スノウは周囲を見回す。

いくつかの視線と目があつた。その視線はあまり歓迎できるものではない、と雰囲気で理解する。中には、あからさまにスノウを値踏みしている様なものまであった。

「さっき言ったように、純粹な人型は珍しい。スノウは純粹な人型に近いからな。それだけでも狙われる。近寄ってくる奴は無暗に信頼しない方が良い」

「わかった」

スノウは頷く。

「オレ達が一緒にいるって事も関係しているがな」

アクセルの咳きにスノウは首を傾げたが、答えるつもりは無いようだった。

煉瓦れんがで造られた建物の中に入ると、古い本の臭いが鼻をついた。

スノウは中に入り、目を丸める。

「…………ほん？」

天井近くまである本棚にスノウは驚く。その本棚には隙間なく、

本の背が並んでいた。クラウドはスノウの様子に驚いた様に振り返る。

「よく分かつたな、これが本だつて。俺は羊さんに聞いて初めて知つたぞ」

アクセルは近くに置かれていた本を持ち上げ、本の中を眺めた。
「……本？ なんだ？ このミミズがのたくつた様な黒いモノは生き物か？」

本のページを捲り目を細めている。クラウドもアクセルの手元を覗き込み、首を傾げた。

「さあ？」

「もじ」

スノウは呟くように答える。一人が反応するよりも早く、近くから靴音が響いた。

「よく」存じですね」

そこには羊がいた。ふわふわの毛に埋もれずに頬りなく垂れる耳。くるん、と巻かれている角。それに加え、その羊は眼鏡をかけていた。

「…………」

紛れもなく羊だ。それが一本足で立ち、本を抱えて立っている。

「見ない顔ですね。生まれたばかりでしょうか」

尋ねているというよりは、確認している様だった。

「そうだ」

クラウドは肯定してにやり、と笑う。

「ここまで純粋な人に近いのは珍しいだろ。お前さんでも、やつぱり羨ましいと思うのか？」

羊 リブランは眼鏡の奥で目を細めた。

「いいえ、羨ましいとは思いません。……むしろ、憐れです」

リブランは抱えていた本を棚に仕舞う。

「さて、どういったご用件でしょうか」

「こいつの面倒をしばらく見てほしい。必要な知識が抜けている様

だから、それも教えてやつてほしいんだ

リブランはほつゝとスノウを観察した。全身を隈なく観察したかと思えば息を吐き、首を振る。

「無理ですね」

「なぜだ」

アクセルは短く問い合わせる。リブランは微笑を浮かべた。

「彼女は少々特殊な存在でしてね。私も、本来でしたら喜んでお引き受けいたしますが、彼女は無理です。なにより、彼女は一つの所に留まる事は不可能でしょうね」

「…………？」

スノウは首を傾げる。クラウドは腕を組みながらリブランを睨みつけた。

「どういう事だ」

「彼女に残された時間は少ない。クラウド、あなたにはその言葉の意味が分かるはずです」

先程までの快活さは鳴りをひそめ、クラウドは目を細める。

「彼女はおそらく、あなた方の半分の時間しかない。そして、それを補うために通常とは異なる知識を持つて生まれた。その代償がその姿なんです」

「さつきから何の話をしている。オレにも分かるように説明しろ」
アクセルは眉を顰め、一人を見た。しかし一人はアクセルを無視する。

「さて、お嬢さん。こちらに来てください。あなたに見せなければならぬ物があります」

スノウはアクセルを見て、クラウドを見つめた。クラウドは行って来い、とスノウの背を押す。スノウは頷き、リブランの後をついていった。

1 - 3 砂時計（前書き）

残酷な描写あり。設定上、血は出ません。

本棚に埋もれるように隠れていた扉を開き、二人は中に入つていく。こちらは先程の部屋と違い、壁側に一つだけしか本棚がなかつた。その本棚にしても本が所狭しと並んでいる。正面には立派な木の机。その背には窓があり、星が瞬またたいているのがよく見えた。

リブランは応接用と思われるソファにスノウを座らせる。リブランは棚から食器を出し、紅茶を淹れた。机の上に出された紅茶をスノウは凝視する。

「これは完全に私の趣味です。知つての通り、我々は食事や睡眠は必要としませんから」

「……そうなの？」

スノウは反射的に聞いてしまつたが、よく考えてみると常識だつた。なぜ聞いてしまつたのだろう。

リブランはカップを取り、香りを楽しんだ。

「そうです。本当にあなたはこちらの知識が欠けていりようですね。それではこれから苦労するでしょう。最低限の知識は教えます。けれど、それ以上は自身でなんとかしてください」

スノウは頷く。リブランは目を細めた。

「まず、この世界は三つに分かれています。ここ、煉瓦の町。水の溢れる水の都。森に囲まれた緑の村。そしてそれらに囲まれるようにして中央に存在している砂漠地帯。ここまでよろしいですか？」

リブランはスノウの様子をうかがう。理解できていると判断し、説明を続ける。

「もう一つは型かたの事。クラウドのように獣を姿を模した、獣人型。アクセルのような竜を模している者が、竜人型。そして機械に包まれている、機械型。あなたのような、限りなく人に近い姿をした存在を人型と総称して言います。そこで大きく問題になるのが、人型の存在です」

リブランは紅茶を一口飲む。

「人型は珍しい。それ故に狙われます。知らないかもしぬませんが、多くの人々は人型に対して強いコンプレックスを持ちます。それも無意識の内に。それこそ自らのパーソンをあなたの物に置き換えるようとするほどなのです。あなたは何属性ですか？」

「……ワタ」

「一番多い属性ですね。それこそ注意しないと本当に盗られますよ。しかも、ワタ属性は部位の切断も容易に行えます。捕まつたら最後、全部持つてかれますよ」

スノウは首を傾げる。

「クラウドも アクセルも ヒツジさんも、なんで とらないの？」
「我々は興味がありませんから。私はこの身体で満足していますし、クラウドとアクセルはそもそも属性が違います。仮にそうだとしても、あなたから盗る事は不可能です」

自分の身体は珍しいから危険が多い、とスノウは理解することにした。危ない、と教えられても実感が沸かないというのが本音である。

「まあ、これが最低限ですかね。これ以上は教えても仕方ありませんし ああ、そうだ。見せたい物があつたのでした」

リブランはソファから立ち上がり、机の引き出しを探り出す。目的の物はすぐに見つかってらしく、スノウの手を持ち上げ、その上に置いた。

小さな砂時計だった。しかし砂の流れは異様に遅く、なかなか下に落ちない。それどころか逆向きにしてみても、砂の流れる方向は変わらない。常に一定方向に流れ続けている。砂時計としては欠陥品だ。一体、なにを測っているのだろうか。

「差し上げましょう」

「すなどけい？」

意図が分からず、スノウはリブランを見上げた。

「ええ、砂時計です。なにを測っているのかは、その内に分かりま

すよ。特に大切に扱う必要はありません。壊そうと思つて壊せる物ではありませんから。床に落としても、叩きつけても、割れないくらい頑丈です」「…………」「…………

スノウは砂時計を凝視する。砂時計はそんなに頑丈だつただろつか。

「見たくなれば身体の中に入れる事をお勧めします。動く事に支障は出ませんから。なんでしたら、お入れしましょうか？」

スノウは何かを収納するための道具を持つていない。砂時計は手の平で包み込める大きさではあるものの、常に手で持ち運ぶとなると不便だつた。

スノウは左腕を差し出す。リブランは微笑んだ。

「決断が早くて何よりです」

リブランはスノウから砂時計を受け取る。引き出しからナイフを取り出し、スノウの左腕を軽く切り裂く。その中に包み込むように砂時計を埋め、懐から裁縫道具を出して裂いた部分を手際よく縫い合わせていく。リブランは糸の処理を済ませ、スノウは確認のために腕を動かしてみた。違和感は感じられない。

「すごい」

「右と比べると若干、腕が太く見えるでしうが、それだけです」「ありがとうございます」

「いえいえ。私の用事はこれだけです。さて、戻りましうか」

スノウは立ち上がり、アクセルたちの元へと歩き出した。

*

スノウがリブランと話している頃、アクセルは落ち着きなく部屋を歩き回つていた。その様子を見て、クラウドは呆れたように声を出す。

「おこおい、もう少し落ち着いたらどうなんだ?」

「……オレはいつも落ち着いている
「どうだか」

クラウドは苦笑いを浮かべ、懐からある物を取り出した。それは受け取ったその時から、止まる事なく常に一定方向へと流れ続けている。アクセルには一度も見せた事がない。見せたとしても、意味を理解できない事をクラウドは知っていた。

スノウよりも倍近くある大きな砂時計は、あと少しで全てが流れ落ちる。

それの意味する所は

クラウドはそこまで考えて頭を搔く。

「らしくねえな」

泥沼に嵌まるであるつ思考を振り払つために、クラウドは目を閉じ、背負つてゐる剣を意識した。その剣の形を、別の形にイメージしていく。ここしばらく、暇を見つけては何度もしている行動だつた。しばらくして、剣から微かに手応えを覚える。

クラウドは笑つた。

1・4 流れ者

「スノウがクラウドたちの元に戻った時、アクセルはいなかつた。

「おや、アクセルはどうしましたか？」

「あいつなら鬱陶しいから外に出してきた。龍のくせに熊みたいにうろうろして、こっちがイライラしてくるつてもんだ」

近くで見ている身にもなれよ、とクラウドは肩をすくめる。

「彼の落ち着かなさは相変わらずのようですね」

「おう。あれでもマシになつたんだがな」

クラウドはもたれていた壁から離れ、スノウの元に近付いた。

「スノウ、悪いがアクセルを呼んできてくれ。俺は羊さんにちよいと用があるから」

スノウは頷くと、外へと駆け出す。クラウドはそれを見送った。リブランは目を細める。

「あなたが私に用事とは……一体、どんな厄介事なのですか？」

クラウドはにやり、と笑う。

「別に厄介事じゃねえよ。ちょっと確認するだけだ」

スノウが外に出ると、空には変わらず星が瞬いていた。

「……………きれい……………」

スノウは空を見上げて目を細める。

星なんて、久しぶりに見る…………？

再び違和感。胸に小さな棘が刺さっているような感じだ。

(気持ち悪い)

なぜ、こんな気持ちになるのだろうか。それさえ分かれば少しはこの気持ちは和らぐのだろうか。

スノウは考える。だが、いくら考えても答えなど見えはしない。

当然だ。スノウは生まれたばかりだから、知らないのが当然の事だった。

(なんで?)

知らないはずなのに知っている。だからこそ違和感が増し、頻繁に出る既視感を煩わしく思う。しかし、それと同時に安堵もしていた。スノウ自身、そうした矛盾した思いに振り回されている。(わたしは……一体、なに?)

不意に首元に強い衝撃が襲い、スノウは気を失った。

アクセルが扉を開くと、そこにはクラウドとリブランしかいなかつた。

「おい、スノウはどうした」

アクセルは一人に近寄りながら尋ねる。

「会わなかつたのか? スノウはお前を探しに行つたはずだが

「いや、会つていない。行き違つたか?」

クラウドは眉を顰める。リブランは変わらず微笑を浮かべていた。「さて、そういえば最近、妙なのが町に出入りしていましたね。なんでも様々なパートを取り扱っている流れ者だとか」「なんだと!?」

その事が何を差しているかに思い当たり、アクセルはリブランを問い合わせようとする。しかしすぐに思い留まり、踵を返して走つて行つた。クラウドは呆れたようにそれを見ている。リブランはそれを意外そうに見た。

「おや、あなたは行かないのですか?」

「お前さんは見た目に反して相当、性質すがが悪い」

クラウドは目を眇める。

「分かつていて、伏せていたんだろう? ついでに、スノウの居場所も知つていいはずだ。俺は、あいつからそう聞いている」

「あいつ? 一体、誰の事ですか。そのような人はもう、この世界には痕跡こんせきすら残つていなければ」

クラウドは剣をリブランの喉元に突きつけた。しかし剣を突き付

けられているにも関わらず、リブランは気にしているのかのように笑った。

「あなたは昔から短気でしたね。いつ頃からでしょう、あなたが笑う事で誤魔化すようになったのは」

「話を逸らすな。腹立たしいが、この町でスノウの場所が分かるのはお前しかいない。違うか」

アクセルはその事を知らなかつた。だから時間を惜しみ、手掛かりなしで探しに出たのだ。

「その通りです。よくご存じですね。誰から教わつたのです」

「居眠りな猿ばくだよ」

リブランは呆れたように溜息を吐く。

「あの人にも困つた事です。機密事項にも関わらず不用意に漏らすとは」

「お前らの事情なんか知つたこっちゃないし、知りたくもない」

クラウドは目を細めた。

「さつさとスノウの居所を吐け」

走り去るクラウドを見送り、リブランは先程の部屋へ戻る。

「……これは、職務違反でしょうか？ 規定に抵触していないと良いのですが」

「問題ないですよ」

いつの間にか部屋には男がいた。男は純粹な人型の姿をしている。人と全く同じと表現しても、間違ひではない。黒い紳士服に身を包み、顎には髭をたくわえ、頭にはシルクハットを被つてゐる。気取つた姿が妙に様になつていた。

「ジルでしたか。驚かさないでください」

ジルは優雅に腰を折る。

「これはこれは、失礼いたしました」

リブランはこの男が苦手だった。初めて会つた時から受け付けないのだ。

表には心情を欠片も出さず、リブランは微笑む。

「それで、どんな用事でしようか。あなたが使い走りをされるとは、余程の事なのでしょう」

「そう大した事でもありませんよ。先程までここにいた、白い娘の事です」

*

アクセルはあてもなく町を走り続ける。

アクセルは舌打ちを禁じ得ない。
外道が。

なぜ人の身体をここまでして欲しがる。

アクセルには他人のパートを欲しがる人の気が知れなかつた。アクセルのような龍の姿も人気はある。しかしアクセルは属性から、狙われる頻度は異様に低かつたのだ。

「アクセル」

「クラウドか。どこで油を売つていた」

横に並んだクラウドは苦笑いを浮かべる。

「スノウの居場所を突き止めてたんだよ。……しかし、お前の勘は相変わらず鋭いな」

「こっちの方角なんだな」

「おうよ。さつさとスノウを救い出しちまおつぜ」

「当たり前だ」

二人は目的地に向け、走つた。

目を開けると、スノウは薄暗い部屋の中で蹲つていた。身体を起こして周囲を見回すが、見覚えがない。部屋全体が埃っぽく、壁に触れば砂のような塵ちりが手に付いた。

(まだ、よく見えない)

スノウは膝を抱いて身を縮める。しばらくして、ようやく目が闇に慣れた。光りがあるのと同程度に見える様になり、スノウは歩き始める。

スノウのいる場所は、先程の町では見慣れない造りをしていた。部屋と部屋の境目に扉はなく、吹き抜けになっている。なおかつ床も壁も、天井までもが同じ素材　泥で固めてブロック状にした物で造られていた。手間がかかる上、スノウのようなワタ属性には最悪の環境だ。そうでなくとも長期間いれば、身体に不調をきたすだろう。ここを造った人物は、余程の変わり者だ。

スノウは立ち上がり、部屋を出る。今度は先程よりも大きな広間のような部屋に出た。高い位置で壁が何ヵ所か割り抜かれているため、星の明かりでぼんやりと部屋の中が照らされる。高すぎるため、そこからは脱出は出来ないようだ。横を見れば外に向けて、先程よりも大きく壁が割り抜かれている。そこから外に出る事は出来そうだ。

それにしても、ここは何の用途で造られた建物なのだろう。

「あれ、起きちゃったよ」

割り抜かれて星明かりで影になつていてる部分に何かがいた。それは伏せていた身体を起こし、スノウを見つめている。

「……オオカミ?」

黒い狼だつた。何かで身体を覆つていてるのか、毛は撫でつけられている。ゆっくりとした足取りで、狼はスノウの元へ向かった。

「大人しくあの部屋で寝てくれないかな?　ボクは君みたいな人

型が、大嫌いなんだ。ボクの自慢の牙と爪でぐりやぐりやにされた
くなかつたら、早く戻つてよ」

「あなたは？」

狼はスノウを睨みつけ、鼻を鳴らす。

「見て分かる通り、獣型の人間。笑う？ 好きなだけ笑えばいいさ。
そうしたら君をやつ裂きにしても、ドーリルは怒らない。大丈夫だ
よ。商品としては駄目にならないようになちゃんと加減はするし、捌さば
く手間も省はぶけて一石二鳥」

「……けものがた？」

スノウは意味を理解できず、首をかしげる。狼は牙を見せて唸つ

た。

「さつさと戻れ。ボクを怒らせたいのか」

「……ここは、どこ？」

「質問できる立場だと思ってる？」

スノウは威嚇する狼に構わず、続ける。

「……」は、わたしにもよくないけど、あなたにもよくないばしょ。
いどりしたほうが、いい」

狼は鼻で笑つた。

「そんなのは分かつてるよ。だからここにしたんだ。ここなら誰も
寄つて来ないからね。ドーリルも冴えてる」

「……からだを、わるぐするかも しれないのに？」

「大丈夫だよ。ボクたちはビニールで身体を覆つているから、そん
なの関係ないもんね。 普段は抜けてるけど、今回はずいぶん冴え
てると思わない？ これ考えたのボクの相棒なんだよ。すごいよね」

「……」

狼の毛が不自然なのは、ビニールで身体を覆つっている所為のよう
だ。狼は自身の身体を示し、誇らしげに笑う。

「それでね、ドーリルはすうごい良い奴なんだよ。機械型で人の形
をしてるけど、人の形をしていないボクの事を変な目で見ないんだ。
そんな人、ボク、初めて見たんだよ。それでね、こういう商売して

るんだけどね、他の奴等みたいに乱暴したりしないんだよ? “危なくなつたら速攻、逃げる! これ常識!”って、すごい堂々としてるんだ。憧れちゃうよね

「…………」

「なんだよ、さつきから黙つて。……そりが、ボクのドーリルに恐れをなしたんだな! それは仕方ないよ。ドーリルはすぐからね再び狼の自慢が始まる。

「でね、ドーリルはね

「…………」

「それでね、その時のドーリルは本当に痺れたね。^{しび} こいつ、顔をキリッと決めてさ“命あつての商売なんだ。いざといつ時には切り捨てるのも大切なんだ”って。カー! 痺れるー!」

そこで狼は不意に言葉を止める。

「なんで笑つてるの?」

「?」

スノウは口元を手で触ると、わずかに口の端が上がつていた。

「……そうか、分かつたぞ! ドーリルのカツ^{「よさこ」}、お前も憧れたんだな! ?」

「ちがう」

スノウは即座に否定すると、狼は硬直した。

「あなたも ドーリルも、おたがいが大切なんだね」

スノウは笑みを浮かべる。狼は誇らしげに胸を張った。

「そうだよ! 獣型は成りそこないだつて言われるけど、ドーリルは全く気にしないんだ。だからボクもドーリルのために頑張ってるんだよ」

「それで、なんで わたしは ここにいるの?」

スノウはようやく本題を切り出す事が出来て安堵する。狼はにやり、と笑う。

「当然、売るためなんだよ! ちなみに、ばら売りだから覚悟して

ね。痛くはないけど、気分的に嫌なものだから

「.....」

スノウが沈黙していると、どこからか間の抜けた声が外から聞こえた。

「おーい、カルー。売り手がついたぞー。しばらくしたら、すぐ来るだろーから今の内に退却するぞー」

「はーい」

狼は無邪気に返事をすると、スノウに背を向けて歩き出す。

「ボクたちの商売はここまで。買い取り手がすぐ来るだろーから、逃げるよりも隠れた方が懸命だよ。 それじゃ、命がけの鬼ごっこ、頑張ってねー」

狼は楽しそうに尻尾を振つて、スノウを置いていった。

スノウはしばらく呆然と狼を見送っていたが、聞こえてくる足音に状況を思い出す。

(とりあえず、逃げないと)

スノウは周囲を見回すが、今いる広間のよつた空間に隠れ場所となるような所はない。そもそも聞こえてくる足音は複数だ。ここを風漬しらおつぶしに探されてしまえば逃げ場はない。

そんな時、地下へと続く階段を発見した。スノウは駆け出し、急いで階段を下つていく。再び視界が暗闇に染められるが、視界が馴染むのを待たずにそのまま進む。

初めはまっすぐに進んでいた。しかし、それではすぐに見つかる可能性がある。スノウは適当に割り抜かれた壁を曲がり、走つていく。足音が地下に反響するが、そんな事に構つていられなかつた。どれだけ曲がつても、似たような造りが延々と続いている。その事がスノウに更なる焦燥感を募らせた。

走つても走つても変わらない風景。その内、スノウはどこに向かつて走つているのか、全く分からなくなつてしまつた。

(まるで迷路みたい。迷路は苦手なのにな……)

スノウは適当に走りながら、そんな暢気な事を考える。

「いたぞ！ こっちだ！」

その怒声に、スノウは現実に戻つた。

振り返ると、見た事のない人がスノウを追いかけている。相手の顔は確認しなかつた。そんな事をしていはすぐに追いつかれてしまう。人型は他の種族よりも走るのが遅い訳ではないが、スノウの足はあまり早くない。

スノウは思考を振り払う。そこからは何も考えずに無我夢中で走つた。適当に曲がり、相手の視界から逃れる。しかし、すぐに見つかってしまう。それでもスノウは諦めずに走る。運の良い事に、こ

の身体は疲れ知らずだ。相手もそうだが、それだけは救いと考えるしかない。

スノウが曲がると、そこは行き止まりだった。運が悪いと思いつつも、これまで行き止まりに行き着かなかつただけでも十分運が良いと考える事にする。そう思つた所で状況は変わらないが、そう思つた方が精神的に楽だつた。

「…………？」

スノウは壁に違和感を覚えた。違和感のする壁に近付き、壁が平らではない事に気付く。この建物は泥を固めたブロック状の物を組み合わせて作られているが、それらは規則的に並べられ、材質こそは変わつてゐるが普通の建物なのだ。それなのに、この壁だけ不格好になつてゐる。衝撃を与えれば崩せそうだつた。

「見つけたぞ！」

スノウは覚悟を決め、その壁に体当たりをする。壁を成していくブロックがずれ、壁が崩落した。突如溢れた光りに反射的に目を瞑^{つむ}る。

「うわ、なんだ！？」

「なんだ、ここは！　目が潰れる！」

追いかけていた者たちが、反射的に来た道を引き返していく。スノウは体当たりをしたまま倒れ込んでしまつたので、同じように逃げる事は出来なかつた。

しばらく目を閉じていたが、なにも起こらない事を知り、スノウは恐る恐る目を開ける。

その空間は緑に溢れていた。木々は光りを燐々^{さんさん}と受け、緑の葉が生き生きと萌えている。中央には平たい台があり、そこから絶え間なく水が溢れ、スノウの所まで流れていった。台の上には大きな水晶。

一言で表すならば、そこは異様な光景だつた。

この世界は常に闇に包まれている。そこに星が常に輝き、地上を照らしているのだ。それ以外の光りとなれば、火か電灯かに限られている。火はそれこそ大災害になる可能性があるので禁止されてい

た。そのため、室内を照らすための手段は電灯に限られる。しかし、この空間の光りは電灯では決して有り得ない輝きをしていた。

「ここは……」

スノウは上に乗っていたブロックを落としながら立ち上がり、周囲を見回す。壁には薦が這っているためか、スノウが破壊した壁の部分が異彩を放っている。スノウが破壊した壁を見ると、これは現実なのだ、と実感できた。

「……たすかつた……のかな？」

しかし来た道を戻る気はしない。まだ戻るには危険な気がした。スノウは中央にある水晶に近寄る。周囲を確認しながらも、スノウの意識は先程からこの水晶に注がれていた。

（綺麗。だけど、なんだか怖い…………でも、触りたい）

スノウは恐る恐る手を伸ばす。手は震えていた。震える理由は、心当たりが多すぎて分からぬ。

スノウの手が水晶に触れようとしていた。

「駄目だ！ スノウ、そいつに触るな！」

突然呼ばれ、スノウは身体を震わせる。その拍子にスノウの手は水晶に触れてしまった。

仕上げが終わった時、クラウドの声が響いた。

「おい、一体どうしたってんだ？」

アクセルは湾曲刀の背で肩を叩きつつ、クラウドの元へと歩く。スノウの身体を狙っていた連中は、クラウドとアクセルがほとんど壊していた。誰かが来ない限り、彼らは動く事もままたないだろう。

クラウドの元へ来たアクセルは、その光景に目を奪われた。

「こ……ここは、一体……」

しかしクラウドは逆に顔を顰めている。

「最悪だ」

クラウドの言葉に、アクセルは我に返った。クラウドの視線の先

を追う。

「スノウ！」

アクセルは駆け出す。

水晶の置かれていたる台の傍で、スノウは倒れていた。身体は水に濡れ、濡れていない部分にしても埃まみれだった。

「そんな切羽詰まつたような声なんか出さなくて済む気だつての。ちよいと氣絶してただけだから」

「どういう事だ」

アクセルはクラウドを睨みつけた。クラウドはスノウの傍に身を屈め、スノウを肩に担ぐ。

「とりあえず、ここを出るのが先だ。違うか？」

アクセルは自身の属性を思い出し、舌打ちをする。クラウドは嘆息した。

「そんなに焦らなくとも、大丈夫だ。……本当に大変なのは、これからだしな」

アクセルがその言葉を実感するのは、ずっと先の事だった。

1・7 始まりの夢

急げ、急げ！

なにかに急き立つらるかのよつて、その小さな生き物は走る。

(……なんで、こんなに急いでるんだっけ?)

そんな事はどうでもいい！

私は、あの人を救わないと。助けないと！

(あの人って……誰?)

急き立てるような焦燥感とは逆に、妙に冷えた部分を持つ自分に驚いた。

急がないと！ 早く早く！
手遅れにならない内に！

(だから、なにをそんなに急いでいるの?)

*

「おかあさん、アレかつてよ」

四歳ほどの小さな子どもが母の手を引きながら指で示す。

「だめよ。私たちのマンションはペット禁止なの。諦めなさい」

母親は子どもと田線を合わせ、優しく諭す。しかし子どもはそれを拒絶するように首を振った。

「いやいやいや。ほしいよ、おかあさん かつてよ」

子どもは全身を使って駄々をこね始める。周囲にいた買い物客たちが何事か、とその親子に視線を向けた。母親は衆目の中を気にせ

ず、落ち着いて続ける。

「だめよ、ちゃん。」ればかりは、じつじつもないのよ。
我慢しなさい、ね？　ちゃんが、もっと大きくなつたら飼おう
ね。……そうだ

母親は何かを思いついたかのように子どもの手を引いて歩く。子どもは名残惜しそうに後ろを見ながらも、母親の後をついていった。

母親は一つの箱を持ち上げ、子どもに見せる。

「これなんか、どう？　あの子とそっくりでしょ。これなら買つてあげれるわ」

子どもは箱の中を凝視し、母親を見上げた。

「ぜんぜんちがうよ！　あの子の方がずっと、ずっとかわいいよ！
それにこれは、うごかないよ」

「そうかしら。確かに動かないけど、とってもとっても可愛いやよ
？」

「かわいいけど、ちがうの！」

子どもは背を向け、先程の動物がいた場所へと走つていいく。ガラスのケースにへばり付き、中にいる動物をキラキラした目で見つめていた。

「……あれくらいの子なら、これでも大丈夫だと思ったんだけど」
母親は軽く溜息をついて箱を元の場所へと戻す。子どもの背から、ガラスケースの中を覗き込んだ。

「おかあさん！　やつぱりこの子の方が、ずっとかわいいよ」「
はいはい。そんなに大きな声を出すと、その子が驚いてしまうわよ。
しー、ね」

母親は口元に指をあて、子どもを見た。すると、子どもの方も母親の真似をする。

「しー。うん、驚いちゃうもんね。驚かせてごめんね」

すると中の動物が何かしたのか、子どもが小さな声で歎声を上げていた。はしゃぐ子どもを母親は苦笑いを浮かべて見ていく。

今日は寒い日らしい。通る人々は皆、服を着込んでいつもよりも一回りほど大きく見えた。

「これ、ください」

先日の子どもの母親だった。店員は愛想のよい笑みを浮かべ、差し出された物を包装していく。今日は特別な日らしく、包装の紙が洒落しゃれた物だった。

「ありがとうございます」

母親は受け取り、家へと向かつ。

「喜んでくれるといいけど……」

母親の咳き声を聞く者はいない。母親は家の扉を開け、中へと入つて行つた。おかえり、と子どもが走つて母親を迎える。弾んだ声。子どもは何かを母親に期待している様だつた。

「ケーキ、かつてきた？」

「ええ、買つてきたわよ。ほら」

母親は袋を示す。子どもはケーキの袋を受け取ろうとするが、母親が不安そうに聞く。

「大丈夫？ 落としたり、ぶつけたりしたら大変な事になるからね。気を付けるのよ」

「だいじょうぶー」

子どもは走つて冷蔵庫へと向かつていつた。途中の角で袋を軽くぶつけていたが、子どもは喜びのあまり気付いていない。母親はそれを落ち着かない様子で見守つていた。

子どもは両親といつもより豪華な夕食を食べ、はしゃいでいた。

時折聞こえてくる言葉から推測するに、今日はクリスマスという日らしい。クリスマスにはサンタサンが来て、子どもが寝ている間にプレゼントを枕元に置くそうだ。会話の様子から、両親はサンタサンを知つている様だつた。会話の端はじ々からそんな印象を受ける。「良い子にしてないとサンタさんが来ないよ」や、「サンタさんは

の欲しい物をくれるんだうけど、サンタさんはちょっと歳だからお家を間違えちゃうかもね」がその筆頭だった。その度に子どもは反論するが、良じよにあしらわれている。

「さあ、そろそろ寝なさい」

母親が眠そうに眼を擦る子どもをベッドへと誘導していく。子どもは横になるとすぐに寝入った。母親は微笑みを浮かべ、子どもの頭を撫で、布団を被せて部屋を出ていく。

しばらくして、母親は先程の箱を持って現れた。それをそっと、子どもの枕元に置く。

いつもして夜は何事もなく過ぎて行つた。

朝になり、子どもは枕元に置かれている、包装された箱に気が付いた。子どもは包装紙を適当に剥がしていく。そうして現れた物に、子どもは目に見えて落胆した。

「……だから、ちがうのに」

スノウが目を覚ますと高い天井が見えた。起き上がり、周囲を見回すとスノウは本棚に囲まれている事に気が付く。見覚えのある場所だった。

「目が覚めたか」

アクセルは寄りかかっていた壁から離れ、スノウに近付く。「リブランに仮眠室を借りた。宿を借りても良かつたんだが、目立ち過ぎるからな」

「クラウドは？」

スノウはクラウドがいない事に首をかしげる。

「さあな。散歩でもしてるんじゃないか？ そんなことより、身体は大丈夫か？ 外傷がないことは一応確認したが、気分が悪かったり、何かに気付いたら言つと良い」

スノウは立ち上がって身体を動かし、確認した。

「……ふぐあいは　ないよ
「なら、いい」

「どこに行くの？」

背を向けて歩き出そうとするアクセルに、スノウは尋ねる。

「散歩だ。ついでにクラウドを探してスノウが起きた事を知らせてくる」

「わたしも行く」

「まだ安静にしていた方が良いと思うが……」

スノウは気にせず、アクセルの後ろをついて行く。アクセルはしばらくスノウを見ていたが、何かを諦めたように溜息をついた。

外に出ると変わらず空は暗く、星が瞬いている。時折、星が流れのをスノウは不思議そうに眺めた。

「ながれぼし」

スノウは空を指差す。

「珍しくもなんともないだ奴。」
「やなくとも、常に『』かで星
は流れている」

「そうなの？」

「ああ。常識だ」

スノウは再び空を見上げた。スノウはふと、奇妙な話を思い出す。
「ながれぼしが 流れているあいだに、三回おねがいをとなえると
それが叶うんだって」

「そんな話は初めて聞く。だが、だとしたら随分な大盤振る舞いだ
な」

「なんで？」

「どこかで必ず星は流れている。だとしたら、願い事は叶え放題だ」
スノウは微笑んだ。

「なら、みんな幸せになれるね」

「……さあな」

クラウドは広場にいた。噴水の縁^(へり)に座り、星空を見上げている。
「こんな所にいたのか」

アクセルが声をかけると、クラウドはアクセルに向かつてにやり、
と笑う。

「ちょうど良い所に来たな」

「なんだ？ 厄介事は『』免だぞ」

つれないねえ、とクラウドは立ち上がる。

「ほらよ」

クラウドは手に持っていた物をアクセルに投げ渡した。アクセル
は受け取ったものを訝しげに見る。スノウもアクセルの手元を覗き
込み、アクセルの腰に差してある湾曲刀と見比べた。

「アクセルのと おなじだね」

アクセルはクラウドを睨みつける。

「なぜお前が湾曲刀を持っている。それに、お前の得物はどうした

「そいつだよ」

クラウドの背に背負っているはずの剣はない。しかし同じ剣として渡されたのは全く種類の違う物だ。一体、どのように変形させたというのか。

「時間ギリギリだったからな。お前に届けられないんじゃないかと冷や冷やしてたぜ。大切に扱えよ。俺の愛剣だつたんだからよ」

「話が見えない」

アクセルは目を細める。クラウドは細かい事は気にするな、と笑つた。

「なあ、アクセル」

「なんだ」

「分かりにくい奴だ」

「この星が何なのか、気になつた事ないか？」

「気になるも何も、気が付いたらそこにあつた。それ以上でもそれ以下でもない」

「分かりにくい奴だ」

アクセルは星の事なんてどうでも良かつた。深く考えたことなどない。クラウドはぽつり、と呟いた。

「この星はな、願いの数だ」

「願い？」

先程のスノウのような話だろうか、とアクセルは考える。

「星が流れている間に三回、願い事を唱えると叶うというものか？」

それなら先程スノウから聞いたが

クラウドは目を丸め、次いで大きな声を上げて笑つた。スノウは首をかしげる。

「なんだそれは。随分と簡単な叶え方だな。 ほんと、そんな簡

單に叶えられたら良かつたのにな」

「どうしたんだ、クラウド。なんか常に増して、変だ。変な物でも拾い食いしたか？」

「お前は俺をなんだと思ってるんだ」

クラウドはアクセルに呆れたような視線を投げた。アクセルは心

外だ、とこう風に目を細める。

「まあ、いい。俺はここで終わりだからな」

「話が見えない」

「じゃあ、最後の大ヒントだ」

クラウドはにやり、と笑う。その笑みはどこか悲しげだった。

「この星たちは、願いの数であり 命の数だ」

スノウはクラウドの言葉に首をかしげている。アクセルは眉を顰めた。

「意味がわからない」

「今に分かる」

クラウドは苦笑いをする。クラウドはスノウに近寄り、頭を撫でた。

「お前さんにはもつと色々教えてやりたかったな。まあ、俺の事なんて忘れちまうだろ？ けどな」

「？ わすれないよ。わたしは、わすれない」

「そうか。だが、期待はしてない。アクセル、スノウが俺の事を覚えていても責めるなよ」

クラウドはスノウの頭から手を離した。

「スノウは忘れない、と言つているだろ？ なぜ、そんな事を言つ」

「それが、この世界のルールだからさ」

不意に、クラウドの身体から小さな光りが舞い上がる。粒子のような小さな光りは、クラウドの身体中から溢れていた。

スノウはきれい、と呟くが、クラウドは肩をすくめている。

「きれい、か。皮肉だな。まあ、良いけどよ」

「どうしたんだ？ 新手の芸か？」

アクセルは困惑して、訳の分からぬ事を口走っていた。

「そんな良いモンでもないぞ。まあ、俺も初めて見た時は驚いたし」

その間にも光りはクラウドの身体から、止まる事なく溢れ出る。

次第にクラウドの身体の輪郭が曖昧になってきた。

「“スターダスト現象”。そう呼ばれてるらしいな。まあ、俺らに

したら上等な最期だ

「何を言っている」

クラウドの身体から溢れる光りはどうまる事を知らない。スノウはそれと同時に、自分の中から何かが消えていくを感じていた。

「……クラウド」

スノウはクラウドに触ろうとしたが、その手はクラウドの身体をすり抜ける。スノウは不思議そうに自身の手を見つめた。

クラウドは苦笑する。

「こうなつたら、誰にも止める事はできないのさ。……しかし、最期を看取つてもらえるのは、なかなか気分がいいな。おまけに、一人は俺の事を忘れない。アクセルにしてみたら大迷惑だろうがな」

クラウドの身体はもはや存在しない。光りの塊がそこにあるだけ。

「クラウド、いい加減にしろ！ 話が見えない！」

アクセルがクラウドを掴もうとするが、やはりその手もすり抜け
る。

お前と一緒にいるのは、案外楽しかったぜ。

クラウドは光りに溶けた。その光りも、すぐに消えていく。まるで何もなかつたかのように。

アクセルは呆然と手を伸ばしたまま固まっていた。スノウはそんなアクセルは不思議そうに見つめてる。

空の星が、ひとつ流れた。

1・8 流れ星（後書き）

ここによつやく第一章は終わりです。次は幕間が入ります。
そしてこの話からよつやくスノウの言葉に漢字が混ざるよつにな
ります。……長かつた。

スノウの第一章での精神年齢は小学生低学年くらいです。漢字の
チョイスは適当です。低学年で習う漢字とか関係ありません。

幕間（前書き）

よつやくマー テイ 登場。 猫はわりと好きなキャラです。

その空間は暗闇の中に存在していた。

その空間には不自然にドーナツ状の円卓が存在している。その円卓は座席が四つしかなく、なおかつ、その一つは埋まっていた。

「すーすー……」

その座席の主は心地よさそうに、机に突っ伏して惰眠を貪っていた。空間に穴を開けてやつて来たリブランは、その様子を見て呆れた。

「…………いつものように、ほとんど集まっていないのはいいとして。なぜあなたはこんな所で眠っているのですか、猿」

リブランは猿に近寄り、身体を揺する。猿は後もつ少し、と寝言を唱えた。

「…………まともな人が欲しいですよ、本当に」

「おやおや、リブランさん。猿さん。お集まりですか？」

紳士服に身を包んだ男 ジルがどこからともなく現れる。リブランは嫌な奴が来た、と内心眉を顰めつつ、にこやかに答えた。

「ええ。あちらは時間という概念がありませんから、遅刻しないようにならんですよ」

ジルは納得したようだ。足りない人員を探して首を巡らす。

「まだマークは来ていないうえですね」

「あの人には時間を守れ、というのが難しい事です。違いますか？」

ジルは苦笑いを浮かべた。

「そうかもしだせんね」

リブランは自身の座席へと着く。猿を横目で見るが、まだ眠っていた。

「猿さん。そろそろ時間になります。お目覚めください」

ジルの言葉に猿は、目を閉じたまま起き上がる。

「むー……もう、そんな時間なんだなー」

やたらと間延びした声。かとすれば、未だに夢の中にいるのではないかと邪推してしまつようだ。しかし、僕は普段からこの状態である。これが起きている状態なのだ。

「ええ、時間です。マークは遅刻ですね」

「はいはいはーい。遅刻じやないよー！ギリギリセーフ！」

空席近くの空間が歪み、元気よく小柄な人物が現れる。

「ういーっす」

片手を上げて笑顔を振りまく人物こそ、マークである。マークは勢いよく座席に座った。そしてジルを睨みつける。

「セーフ、でしょ？」

ジルは苦笑いする。

「そうしておきますか。次からは許しませんよ」

「はーい」

このやりとりも何度もなるか分からぬ。それほど頻繁にマークは遅刻するのだ。

「では、会議を始めます」

「で、なにすんの？」

ジルの言葉を遮るようにマークが声を上げる。リブランは相変わらずの破天荒な様子に呆れた。

「マーク、少しほ人の話を聞いた方が良いですよ

「人じやないけどね」

ジルは軽く咳払いをする。二人は口を噤つぐみ、僕は漕いでいた船を止めた。

「さて、今回皆さんをお呼びしたのは他でもなく、あの娘に関してでござります」

「あの娘……スノウの事ですね」

ジルは頷く。

「誰、それ」

マークは目を細める。

「彼女の存在は、少々イレギュラーでしてね。難易度を上げる必要

があるのですよ」

その言葉にマーティは目を丸めた。

「珍しい。ちゃんと参加してるんだ。最近ではそういう奴等、ぐつと減っちゃったからね。久しぶりにはつちゃけたいし、いいんじゃないの？」

「…………」

リブランはマーティを無言で眺める。ジルは知つてか知らずかいや、知つているだろう。ジルはマーティに爆弾を落とす。

「彼女、限りなく人に近い姿をしているのですよ」

マーティの肩がびく、と震えた。へえ、とマーティは顔を歪める。

「限りなく人に近い、ね。愛されてたんだ？」

「そのようですね。愛情の深さに比例しますから」

「嫌い」

マーティは呟く。

「そんな奴、大嫌い。大嫌い大嫌い大嫌い。ねえ、そいつ。ぐちやぐちやにしてもいいよね？ いいんでしょ？」

マーティは子供が面白い悪戯を思いついたかのよつな、笑みを浮かべていた。だが、そこにあるのは深い憎悪。

「あなたが直接、手を下す事は禁止されています。ご存知ですか？」

「知ってるよー。だから、そうするように、周りを誘導するだけ。

難易度も自然に上がるし、良い事ずくじじゃん？」

「…………」

リブランは無言を貫く。猿は眉を擦つていた。

「好きにしても良いとのお達しです。マーティ、あなたの権限を超えない範囲で好きになさい」

マーティはにやり、と笑う。

「りょーかい。じゃあ、早速仕込みをしなきゃね。それじゃねー、
ばいばい」

マーティは暗闇に溶けて消えた。

リブランはしばらくその闇を凝視し、大きな溜息をつく。

「なぜ彼女を走らせるのです。あれではスノウが壊れてしまいますよ」

「構いません。彼女は通過地点を通り過ぎれば、確実に叶える事が出来るのですから」

「スノウにとつて、最期の問題は簡単すぎるのだ。」

「記憶、ですね。それは分かりますが、マーティが異様に張り切っています。越権行為に及ぶやもしません」

「構いませんよ。そうなれば処分するだけですから」

リブランはジルの言葉に眉を顰める。

彼にとつてはリブランも、マーティも、猿もただの駒。箱庭を運営するために必要なただの駒なのだ。

「マーティ自身も忘れていいでしょうが、マーティも十分この世界にとつては異分子なのです。排除できる理由が出来ればそれもよしと考えています」

「それは、上からのお達しですか？」

「いいえ、ワタシの独断ですよ。我を忘れて暴走するような駒はありません。マーティも十分知っているはずですから、問題はありませんよ」

リブランは居心地の悪さを覚え、闇に溶けてその場を去った。

2 - 1 忘却（前書き）

第一章スタート

2・1 忘却

アクセルは呆然と、正面を見つめていた。アクセルの背はスノウよりも頭ひとつ分ほど大きい。なので、スノウは自然とアクセルを見上げる形となる。

スノウはアクセルが動かないのを不思議そうに見つめていた。

「どうしたの」

スノウはアクセルの視線の先に目を向ける。しかしアクセルの視線の先に何もない。スノウには、なぜアクセルが呆然としているのか分からなかつた。

「……なぜ、クラウドは消えたんだ」

独白のような言葉にスノウは首をかしげる。

「クラウド？」

「ああ。光りになつて、消えちまつた……」

「？」

不思議そうに首をかしげるスノウの様子を見て、アクセルはクラウドの言葉を思い出した。

『スノウが俺の事を覚えていなくとも責めるなよ』

アクセルはまさか、と思う。そんなはずがない、と即座に否定する。しかし疑念は消えない。アクセルはスノウを見た。
「なあ、スノウ。クラウドって覚えているか？」

「だあれ」

スノウは首を横に振つた。

「大柄な、白い虎だ。やたらと声がでかくて、勝手に人の頭を叩いて、よく笑つてた。……本当に覚えていないのか？」

「わかんない」

スノウは首を横に振つた。
「お前を見つけたのも、クラウドだ。オレは最初、放つておこうと思つていたんだ。けれど、クラウドがスノウを拾つた。オレは厄介

事はご免だと言つたのに

スノウの反応は変わらない。

「なあ、本当に覚えていないのか、スノウ」

アクセルはスノウと視線を合わせる。しかし、スノウは首を振つた。

「知らない。わたしは、アクセルに拾われた。その時、ほかにはダレもないなかつた」

アクセルは信じられなかつた。いや、信じたくなかった。
スノウをリブランに預け、アクセルは町の人々に訪ねまわる。しかし、結果は全員同じ。クラウドの事を誰も覚えていなかつた。かつて、クラウドと共に呼ばれ続けた異名も、今やアクセル一人だけの物になつてゐる。

(どういう事だ)

アクセルの心に焦りが積もつていく。

(なぜ、誰もクラウドの事を覚えていない!)

『それが、この世界のルールだからさ』

クラウドの言葉が頭の中をぐるぐると回つていた。

リブランの元へ戻つた時、クラウドの存在が見えない何かによつて痕跡すら消された事を、アクセルは納得せざる負えなかつた。

「ようやくお帰りですか」

「ああ……なあ、お前も本当にクラウドの事を覚えていないのか?」
アクセルは駄目元でリブランに尋ねる。希望は持つていなかつた。ただの確認作業だ。

「さて、それは一体どなたの事でしょうか?」

「……いや、いい

少なくとも、この町でクラウドの事を覚えているのは、アクセルしかいなかつた。

アクセルは本の敷き詰められた棚の奥へと進み、スノウを見つける。スノウは机に本を広げ、椅子に座つた状態で眠つていた。

「彼女はお休み中のようですね。あなたも疲れが溜まっているので
はありませんか？」

「冗談はいらん。オレたちは疲れない。スノウは規格外だ」

リブランは微笑みを浮かべる。

「……あなたは時折、本当の姿を見破る。本当に恐ろしい方です」

アクセルは怪訝そうにリブランを見た。

「何を言つてている。分かりやすい言葉で話せ」

「それは出来ませんね」

リブランは微笑みを浮かべる。アクセルはその笑みを信用できなかつた。

「アクセル、帰つてきたの？」

スノウは目を擦りながら、アクセルを見上げる。アクセルはリブランを睨んだ後、溜息をついた。

「ああ。　スノウ、お前はリブランの世話になるといい」

リブランは目を丸める。アクセルはリブランが何かを言つ前に押し留めた。

「スノウが自立できるまで良い。そんなに時間は掛からないはずだ」

「なんで？」

スノウは首をかしげる。

「オレは、この町を出るからだ」

町の外ならば、クラウドの事を覚えている人がいるかもしれない。だが同時に、それが有り得ない事だと理解していた。アクセルは悪足搔きだと自覺している。そんな不毛な旅の為に、スノウを連れ歩くわけにはいかなかつた。

「それなら大丈夫」

スノウは椅子から立ち上がり、アクセルの目の前まで歩く。

「わたしも、行かないといけない」

「……なにを言つてている」

「行かないといけないの。行かないと、わたしはきっと、後悔する。

だから、行く」

アクセルはこの時になつて、ようやくスノウの様子が変わった事に気付いた。今までどこか稚拙な所があつたが、今は明確な目的を持つて進もうとしている。

「行くつて、どこにいくつもりだ？」

スノウは肩を落とす。

「わからない」

「わからないって……」

アクセルは脱力した。スノウが成長したように思えたが、やはり変わつていないうだ。

「でも、行かないといけない。行かないと」

スノウは熱に浮かされたように眩き続ける。

「まだ、まだ大丈夫、……でも、行かないと。急がないと……わたし、なにをこんなに焦つているの……？」

アクセルはスノウに声をかけようとしたが、それはリプランの言葉に遮られた。

「まあまあ、このままスノウを私の元に置いておいても遅からず、飛び出してしまうでしょ。そうなると、外は彼女にとつて危険がいっぱいです。ただでさえ珍しい人型をしているのに、常識も知らないと知られれば、恰好の獲物になつてしまいしますよ。

それくらいでしたら、アクセル。あなたが連れていいくと良い。あなたも安心、スノウも安全。完璧です」

「お前も厄介者を受け入れなくて済む」

「分かつていただければ、結構です」

アクセルはスノウを見つめた。スノウもアクセルを真っ直ぐ見返す。しばらくして、アクセルは肩を落とした。

「好きにしろ」

スノウは無邪気な笑みを浮かべる。

「ありがとう」

2・2 砂漠越え（前書き）

本当は一時間前には書き終えたはずなのに、なぜか半分しか保存されていなかつたため、書き直しました。思い出しながら書こうとしましたが、後半は少し内容が変わってしまいました。なるべく最初に近づけようとしたのですが、無理でした。すみません。

2・2 砂漠越え

二人はすぐに煉瓦の町を出た。

この世界では街道というものが存在しない。その代わりに列車が通っている。時間の概念のないため、この世界には時刻表などは存在しない。そのため、歩いて移動するのが普通である。気まぐれに現れる列車を利用する人は少ないのだ。

スノウは町の外に広がる一面の砂漠を見て、若干身を引いた。ワタ属であるスノウは、埃と砂を本能的に嫌う。一度、身体に砂が付くと、なかなか落ちないのである。

歩き出そうとしないスノウをアクセルは怪訝そうに見た。
「どうした。町に帰るのか」

「……列車、待たないの？」

縋るようなスノウの視線を受け、アクセルは事情を察する。だがアクセルは、いつ来るかも分からぬ列車を待つつもりはなかつた。「列車はいつも来るかは分からん。そんな物を待つてはいけ無駄だ。それくらいだつたら、自分で歩いた方がマシだ」

「アクセルは、何属？」

アクセルは眉を顰める。

「それを聞くのはマナー違反だ。隠すのが普通だ」

属性によつて特性が変わる為である。強みになる場合もあるが、弱点として突かれる事が多い。無暗に教えるのは危険な行為なのだ。

「……そうなの？」

「常識だ」

スノウは沈黙した。

「お前の場合は特に気付けた方がいい。人型の上にワタ属だつたりしたら、田も当たられない」

「…………」

「さつさと行くぞ」

アクセルは線路沿いに歩き始める。スノウも恐る恐るながらも砂の上を歩き始めた。

スノウには、どれくらい進んだのか全く分からなかつた。後ろを振り返つても、見えるのは一面の砂漠。そしてどこまでも続く線路だけである。空には変わらず満天の星が瞬いていた。

(星座があればいいのに)

そうしたら方角が分かる。

そこまで思つて、スノウは首を傾げた。

(星座って、なんだろう?)

「考え事をしながら歩いていると、転ぶぞ」

不意に声をかけられたスノウは、砂に足を取られて盛大に転んだ。アクセルはそれを呆れたように見ている。

「上ばかり見ながら歩いているからだ」

スノウは素早く立ち上がり、砂を急いで叩き落とす。しかし、何かが身体に纏わりついているような異物感は消えなかつた。スノウは顔を悲しげに歪める。

「……砂、きらい」

「好きな奴の方が珍しいだろ」

アクセルはスノウの様子に呆れながらも、スノウが変わった事を感じていた。

(成長、しているのか?)

スノウの使う語彙が増えている。今まではあまり喋らなかつた所為もあるが、感情を表す事も少なかつた。だが、今ではつきりと感情を表している。

思い返してみれば、クラウドを探しに行く時も、置いて行こうとしたにも関わらずついて来た。町を出る時にいたつては、強引にアクセルについて来たのだ。スノウは自己を主張するようになつてゐる。だが、それは必ずしも良い事ばかりではない。

「そんなに歩くのが嫌なら、ここで列車が来るまで待つていいと良

「い」

「いや」

「列車に乗るのはそれほど難しくない。もつとも、止まってくれないからコツが必要だが」

「いや」

スノウは首を振つて、拒絶する。アクセルはスノウを見て、大きく息を吐いた。

「スノウ。別に無理をしてまで、オレについて来る必要はない。嫌ならついて来なくても良いんだ。むしろ、なんでオレについて来る」

スノウは目を丸め、顔を逸らす。

「なんで……」

「？」

アクセルは首を傾げる。

しばらく俯いていたかと思えば、スノウは唐突にアクセルに背を向けて走り出した。アクセルは唖然とスノウの背中を見ていたが、スノウが線路から逸れているのに気付く。

「待て！ スノウ、線路から離れるな！ スノウ！」

アクセルは線路とスノウを見比べていたが、覚悟を決めて走り出した。

スノウは無我夢中で走った。

(なんで？ なんで、あんな事を言うの？)

スノウはアクセルの悲しげな表情を見てから、アクセルにずっとついて行くと決めたのだ。

しかし、スノウが「クラウド」を知らないと知った時から、アクセルの様子はおかしかった。アクセルはずつと悲しそうな顔をしているのに、アクセルはその事に気付いていない。

(私が「クラウド」の事を覚えていないから?)

スノウは「クラウド」という人物に会った事がない。そもそも、アクセルに拾われてから、ずっとアクセルと一緒にいるのだ。アク

セルもスノウが「クラウド」に会つた事がないのは知つていいはずである。

(クラウドって……だれ?)

スノウは走り出した時と同じように、唐突に立ち止まつた。周囲を見回したが、砂しか見えない。スノウはその事に恐怖を覚えた。足元にある自身の足跡を辿り、線路まで戻ろうとするが、足跡は途中で消えている。顔を上げて周囲を見回すが、やはり砂しか見えない。

「どうしよう」

スノウの声を聞く者は、いなかつた。

2・3 感傷

スノウは途方に暮れていた。とりあえず、足跡の先に真っ直ぐ進んでみようと思いつ。しかし、どれだけ歩いても見えるのは砂ばかり。スノウは自身が本当に前に進んでいるのか不安に駆られた。自分は本当に真っ直ぐに歩いているのだろうか。本当は逆方向に向かつていて、どんどん道から離れて行っているのではないか。

そう考えて、スノウは泣きたくなつた。けれど、涙なんて出るはずがない。仕方なく、スノウは空を見上げた。

多くの星が不規則に並んでいる空。理由は分からないが、スノウはそれが不自然に思える。何も考えずに空を見上げていると、星が一つ、流れた。そこでスノウは既視感きしがんを覚える。

(私は、星が流れるのを、前に見ている?)

スノウは初めて流れ星を見たと思ったのだが、そうではないようだ。だが、記憶はない。勘違いだろうと、自分を納得させた。

スノウは再び砂漠を当てもなく漂う事にする。適当に歩いていれば、その内線路が見つかるかも知れない、という樂観的な考えに基づいての行動だった。しかし、心の中ではその場に留まり続けるのが怖かったのだと、理解している。

しばらく歩いた頃だった。スノウは砂を踏む感触が変わった事に気付く。首をかしげて足元の砂を避けると、煉瓦のような石で道が舗装ほそうされている事に気付いた。このまま歩いて行けば、どこかに辿りつく事が出来るだろう、とスノウは考える。

その時だった。背後から砂を踏む音が聞こえ、スノウはそちらに視線を向ける。

そこには甲冑に身を包んだ騎士がいた。

その騎士は異様な姿だった。甲冑に身を包んでいるため、種族が分からぬ。
「汝、そこで何をしている」

鎧の中で反響した、くぐもった声が聞こえた。敵意は感じられない。スノウは正直に答える事にした。

「道に迷いました」

鎧騎士はそうか、と周囲を見回す。スノウもつられて周囲を見回すが、やはり砂しか見えない。

「汝は運が良い。よければ線路まで案内する。いかがなさるか」不思議な言い回しをする人だな、と思いながらもスノウは頷く。騎士はスノウに頷き返し、背を向けて歩き出した。スノウもその背に無言でついて行く。不思議と、鎧騎士に対して警戒心は持たなかつた。

アクセルはスノウが走った方角に向けて進む。スノウの足はそれ程早くはないにも関わらず、アクセルにはスノウの姿すら見つける事が出来なかつた。

「くそつ」

アクセルは諦めて、元来た道へと戻る。

この砂漠で迷つた者は、二度と帰つては来られない。アクセルは自分が迷う前に引き返す事にした。走つた所為で、身体の関節部分に砂が入つたようだ。身体を動かすたびに、身体が軋むような音が聞こえる。

アクセルは鉄族くるがねだ。例え、砂が身体の中に入つたとしても、すぐに洗い落とせる。その後に乾かさなければ、身体が錆びてしまうのが難点だが、他の種族に比べれば些細ささいな問題である。

アクセルは再び線路沿いに歩き始めた。スノウの事を考へないよう、前を見て歩く。

アクセルには、スノウの行動の意味が分からなかつた。そもそも、アクセル自体が人の感情の機微きびに疎い。はつきりと口に出してくれなければ、アクセルには理解のしようがないのである。要するに、思つている事をなかなか口に出さうとしないスノウとは相性が悪かつた。もっとも、アクセル自身はその事に気付いておらず、手のか

かる妹分のようになつてゐる。

アクセルは立ち止まり、周囲を見回す。何もい無い事に気付くと、息を吐いて再び歩き始める。しばらく歩いては立ち止まり、またその繰り返し。アクセルはスノウの事を見捨てたが、やはり氣にはなつてゐるのである。しかし、探しに行つても見つける事は不可能であり、逆にアクセルも砂漠の中で迷つてしまつ可能性があった。

(なにを気にしている)

アクセルは歩き続ける。

(あれは好きで走つて行つた。わざわざひらひらも、それに付き合つ必要はない)

だが、とアクセルは考えてしまう。

スノウはまだ、この世界の事を知らない。そんな人物を、放り出したままで良いのだろうか。アクセルはクラウドに、スノウの事を頼まれたような気がしている。だがクラウド自身、そんな事は口にしなかつた。アクセルの勝手な思い込みである。

(オレは、どうすればいいんだ)

アクセルはクラウドから貰つた湾曲刀の柄^えを握つた。反対側の腰には自身が初めから身に着けていた湾曲刀がある。

「クラウド。お前はオレに何を求めていたんだ」

空を見上げるが、そこにはただ無数の星があるだけだった。似合わない感傷に浸つっていた事に気付き、その感傷を振り払うように歩き出す。

しばらくして、アクセルは目を疑つた。

そこには甲冑に身を包んだ鎧の騎士と、それに並ぶよう立つているスノウがいたのである。

2・4 下準備

スノウはアクセルの姿を見つけると、アクセルの元へと駆け出した。

「アクセル」

「スノウ、一体なにをしていた」

アクセルの言葉に、スノウは足を止める。スノウの声はどこか不安そうに揺れていた。

「わ、わたしは……」

「この砂漠は、危険だと言ったはずだ。それとも、分かつていてやつたのか？」

「そんなこと、言つてない」

スノウは小さな声で反論する。アクセルはそれを耳聴く、聞いていた。

「だとしても、こんな目印の全くない場所で道を失う事が、どういう事かを理解出来なかつたとは言わせない」

スノウは口を噤つぐむ。

「それに、別にオレと一緒に行く必要はないにもない。そいつと一緒に行けばいいんじやないか」

スノウは俯いて、首を何度も横に振つた。

「いや」

「なぜだ」

アクセルはスノウを睨みつける。スノウは身体を竦めた。

「話は読めないが、我はどうやらこじら、この土地を離れる事は出来ぬ」

鎧の中でぐぐもつた声が一人に届く。

「私は道に迷つていた者を、気まぐれにここまで帰したまで。普段はそんな事はせぬ。よつて、用が終わつた私は、ここで失礼させていただく

鎧騎士は一人に背を向け、鎧を鳴らしながら去つて行つた。アクセルはその背に、納得していないような目を向ける。だが、鎧騎士を引き留めはしなかつた。

「アクセル……」

スノウは上田でアクセルの様子を窺う。^{うかが}アクセルは大きく息を吐いた。

「わかった。今回は連れて行く事にする。だが、もし次も同じような事があつたら、そのまま置いて行くからな」

「わかった」

スノウは神妙に頷く。アクセルは鼻を鳴らして先へと進んだ。スノウも置いて行かれないよう、横に並んで歩き出した。

*

鎧騎士は気配を感じて背後を振り返る。だが、そこには誰もいない。果てしなく続く砂と星空があるだけだった。

「……何者」

鎧騎士は低い声で相手を窺うように声を上げる。視線の先にある空間が割れ、勢いよく何かが飛び出した。

「ぱんぱかぱーん！ マーティさん、とうじょーうつー！」

「…………」

無言を貫く鎧騎士に、マーティは不服そうに声を上げる。

「なに睨んでんの。あたしの方があんたよりも位が上なんだから、もつと敬いなさいよ！」

「……位など、関係無かるう。我とて、重要な役目を担つてある。そこに貴賤の差は存在せぬ」

マーティは大袈裟に溜息を吐いた。

「あー、もうつ！ 固すぎるよ、あんた！ そんなんだから、こんな辺境に押しやられんのよつー！」

興奮しているマーティに比べ、鎧騎士は冷めている。

「私は構わぬ」

何を言つても大した反応を得られないためか、マーティは疲れた
よつて肩を落とした。

「……あんたと話していろると、疲れるわ

「軟弱な」

「だーっ！ もう、うひるさい！ 嘶るな、馬鹿騎士！」

マーティに言われ、鎧騎士は沈黙する。

マーティは荒れた息を整えた。

「そんなんあんたに朗報だよ。 新しい任務を『』えてあげる

碌な事ではないだろうな、と騎士は内心で思つ。しかし、位の高

いマーティに逆らう事は出来ない。

マーティは騎士の様子に気付いているのかは不明だが、上機嫌に宣告した。

「鎧騎士。あんたに神殿警護の任を一時解き、白い人型を追つてもらう」

「…………」

鎧騎士は口を挟まず、続きを聞く。

「そいつの名はスノウ。本来であれば、獣人型であつたはずの者。でも、人型になつたせいで、本来備えていたはずの能力は失つてる。それで、任務はそのスノウつて奴を壊しちゃえばいいの。どう？ とーつても簡単な任務でしょ」

マーティはにっこり、と微笑んだ。

「でも、それだとつまらないから、あたしなりに趣向を凝らしてみました！ 領主権限？ みたいな物のお陰で、とーつても楽しくなるよー！」

マーティは悪戯を仕掛けた子供のように無邪氣な笑みを浮かべる。だが、そこにあるのは深い憎悪。鎧騎士は寒気を感じた。

「簡単に言つなら、賞金首つてやつ？ 都中に指名手配をしちゃいました！」

「…………」

「大丈夫、大丈夫。職務に抵触してはいなって。でもね、ギリギリのラインまで頑張つたんだよ。凄くない？」

鎧騎士はマーティたち二領主と深い面識はなかつた。だが、マーティの様子は異常であると判断する。

「……それであるなら、私は必要ないはずだ」

鎧騎士の言葉に、マーティは「ブッブー！」と拍手する。

「あつまーこ！ そんなんじや、楽しくないでしょ。主にあたしが。

それに、この任務の反論は受け付けませーん」

マーティは鎧騎士に背を向けた。にやり、と口元に笑みを浮かべる。

「それじゃ、頼んだよ。召無しの騎士さん」

マーティは現れた時と同様、空間を裂いてどこかへ去つて行つた。
鎧騎士はそれを見送る。背後 神殿の方角を見つめ、振り切るよう歩き出す。

「すべては、我が主のため」

空っぽの鎧の中に響く声には、どこか強い決意が滲んでいた。

2・5 水の都

スノウとアクセルは砂漠を抜け、水に覆われた都市へとやつて来た。

水の都。

ここではそう呼ばれる場所だった。そして都の姿を見ると、みんなその名前に納得する。

水の都はガラス張りの地面である。ガラスの下には水が常に流れおり、下に敷き詰められた苔によつて、水は淡く発光しているのだ。建物の壁はガラス張りではないものの、水が止まる事なく流れている。その流れている水も地面と同様に発光していた。初めてその都を見る者は感嘆の溜息を吐く。それほどまでに、この都は幻想的で美しい。

だが、それと同時に恐怖を覚える者がいるのも、また事実。その筆頭が鉄属である。

彼らは水に対する苦手意識を持つ。その事もあり、水氣の多い所も同様に嫌うのだ。よつて、水の都は鉄族に対しては鬼門である。アクセルは都に着くと、いつもよりも若干早目に歩いていた。出来る事ならば、この街に留まる事などせずに、さつさと出て行きたいのである。スノウは早足で歩くアクセルの後を必死でついて行く。しかし、アクセルはスノウの事など気にも留めない。

「ま、待つて」

スノウは堪えかねてアクセルに声をかけた。

アクセルもスノウに呼ばれた事に気付き、足の速度を緩める。

「どうした」

振り返るアクセルは、足を止めようとはしない。しかし、先程よりもずっとよかつた。

「なんで、そんなに急ぐの？」

「オレは水が嫌いだ」

再び正面に向き直り、歩き始めるアクセルに縋りつく様にスノウは走る。

「な、なんで？」

アクセルの正面に立ち塞がり、スノウはアクセルの足を止めた。アクセルは怪訝そうに眉を寄せる。

「お前が砂を嫌うのと同じ理由だ」

「……アクセルは、くろがね属？」

「ああ」

アクセルは苦々しく頷いた。

「いやなら、なんでここに来たの？」

「通らなければ、目的の場所に行けんのだ」

この世界には三つの都市しかない。しかし、都市と都市の間は砂漠がある。そして、煉瓦の街から一番近いのは水の都であった。強引にもう一つの都市に行く事も、出来なくはないが、距離が倍ほど長い。おまけに砂漠から途中で沼地に変わる。ようは、悪路なのだ。それくらいなら、嫌でも水の都を経由した方がずっと安全である。

「そ、そうなの？」

「そうだ。この都に大して用事はない。だから、さっさと行くぞ」アクセルはスノウの横を通り過ぎ、都の奥へと進んでいく。スノウは急いでアクセルの後へとついて行つた。

アクセルは早く都から出る事を優先して注意を怠り、スノウは先へと進んでいくアクセルについて行くので必死だった。

だから、都の人々が二人を注目していた事に気がつかなかつた。人々のスノウを見る目が異常だった事に気がつかなかつた。

「はあい

二人の前に小柄な人物が現れる。

スノウの胸ほどまでしかない身長。動きやすそうな服に身を包み、その身のこなしは隙がない。どこか猫を彷彿とさせるような少女だ。頭の部分はバンダナで覆つており、その隙間から出ている髪は砂漠

のような砂色をしている。そして、スノウと同じ 人型であった。

「誰だ」

アクセルはあからさまに不機嫌な声を出し、腰に差している湾曲刀に手をかける。スノウはそれを慌てて止めた。

「ア、アクセル」

「物騒だな。でも、あたしの方が早いよ?」

鉄属は動きが鈍いからね、と少女は笑う。

アクセルは咄嗟にスノウの顔の前に腕を伸ばした。その腕に何かがぶつかり、金属音が鳴る。アクセルの腕で防がれたのは小さなナイフだった。

「え、え?」

スノウには何が起きたのか、わからない。

「ふざけているのか」

「まあ、今のは挨拶」

少女はアクセルの言葉に、にっこりと微笑んだ。

「ルールを説明するね」

少女は腰のポーチから水晶を取り出す。それは煉瓦の町で見た水晶と全く同じものだつた。

アクセルは不機嫌そうに睨みつけるだけだが、スノウは違つた。
(……なに?)

手に入れなくてはならない。いや、違う。取り返さないと。違う、私のじゃない。

スノウは自分でもよく分からぬ感情が渦巻くのを感じた。

「うん。やつぱり」

少女は水晶を再び戻し、スノウに向かって歯を向けて笑う。

「あたしを捕まえない限り、ずっとこのままだよ?」

言葉の意味は分からなかつた。だがスノウはそれではいけない、と思う。理由は分からないが、突き動かす様な感情がスノウを動かす。

「スノウ?」

アクセルはスノウの様子を訝しむ。

「……あれ、戻さないと」

どこか虚ろなスノウの目を見て、アクセルは目を細めた。

「ふうん。だつたら、頑張らないとね」

「なにをだ」

話の見えないアクセルは少女を睨みつける。

「簡単だよ。鬼ごっこをしよう!」

「鬼ごっこ、だと?」

スノウは言葉の意味をなんとなく理解しているが、少女の真意は見えないらしく、怪訝そうな表情をしてる。

「あたしにとつては、あんたたちが鬼。けれど、あんたたちにとつては、この都の人全部が鬼」

少女は暗い笑みを浮かべた。アクセルはその笑みに寒気を覚える。

「……?」

「鈍いなあ。わざわざ噛み砕いて言つてあげたのに。要は、あたしを捕まえれば水晶に触れるよ。けれど、あんたが他の人に捕まれば どうなると思う?」

アクセルは少女の言いたい事を理解した。

「なぜ、こんな事をする」

アクセルは湾曲刀に手をかける。

少女は声を上げて笑つた。

「そんなの決まってんじやん。 嫌いだからだよ、人型が」

「オマエも人型だろ?」

「そんな出来そこないと、一緒にするな!」

少女はスノウを睨みつける。

「あんたなんかと、あたしは違つ。あたしはあの方に選ばれたんだ!

「あの方に拾つていただけたんだ!

あんたと違つて、あたしは捨て駒なんかじゃない!」

「何の話だ。やっぱり人違いじゃないか?」

少女はクスクス、と笑う。

「人違ひじやないよ。人形如きが、あたしに意見するなよ」

「……とりあえず、オマエのその言い方はムカつくな」

「当然。怒らせたいんだもん。その方が張り合いが出るでしょ？」

スノウはとりあえず、水晶を奪えばいいんだと漠然と理解する。

実際は話の半分以上も理解しきれていない。

「さて、と。そつちのやる氣が出た所で、始めるとしますか」

少女は後ろに跳躍する。軽く地面を蹴つただけであるにも関わらず、一気に近くの建物の屋根の上へと登つっていた。

少女はにやり、と笑う。

「さあ、命がけの鬼」この始まりだよ」

2 - 6 鬼ノリ（前書き）

戦闘描写あり。設定上、ただ一人を除き流血はしません。

少女は身を翻し、どこかへと逃げて行く。その背は屋根に隠され、どこへ逃げたか分からぬ。アクセルはすぐに追いかけようとして、周囲を囲まれている事に気がついた。手に武器を持っている者もいれば、何も持っていない者もいる。しかし、隙間なく囲まれているため、持つていようが持つていなかろうが、厄介である事に変わりはない。

「……厄介な」

アクセルは腰にある一振りの湾曲刀を抜く。背後にスノウを庇おうにも、円形に囲まれているため逃げ場はない。

アクセルは覚悟を決めた。

「スノウ、走れ」

「？ わかった」

状況の理解は出来ていないうだが、スノウはアクセルの指示通りに走る。アクセルは呼氣と共に、スノウを一息で追い抜き、正面の人を切りつけた。相手はワタ属だったらしく、片手でいとも簡単に身体を切斷する事が出来た。反対に持つ湾曲刀を横に薙ぎつけるが、強い反動と共に不快な金属音が鳴る。切りつけた相手はアクセルと同じ鉄属だったようだ。しかし水気の多い場所にいた所為か、相手の湾曲刀を防いだ腕は嫌な音を立ててずれる。関節の接続が上手くいかないらしく、腕が力なく垂れ下がった。

アクセルの背後から切りつけようとしていた相手の剣を身体をずらす事で避け、腹部に思いつきり蹴りを入れる。相手の身体が軽く凹んだ手応えと共に、面白いほど飛んでいく。

「な、なんだ、こいつは！」

一瞬でアクセルとスノウの周囲から人が離れて行く。

「なるほど。オレが誰か分からずに挑んできたのか」

アクセルは一本の湾曲刀を構える。アクセルの持つ一本の武器を

見て、誰かが声を上げた。

「双刀そうとう……まさか、？双刀のアクセル？か！？」

その叫びを皮切りに、周囲の人々が更に離れて行く。

「？双刀のアクセル？だと……」

「なぜあいつがここにいる！　あいつは煉瓦の町にいるはずだ！」

クラウドがいなくなつてから、強く違和感を覚えるようになつた呼び名。しかし、今回はその呼び名に助けられる事となつた。

「いたら、悪いのか？」

アクセルはにやり、と笑う。

その笑みを見て、怖気づいて逃げ出す人も現れた。

「か、勝てる訳がない。たつた一人で百人近い集団を、一気に壊滅させた奴だぞ！」

「そんなヤバい奴なのか？」

「に、逃げる！」

散り散りに逃げだす人々を見て、アクセルはスノウを呼んだ。スノウは驚いた様子でアクセルを見る。

「今がチャンスだ。逃げるぞ」

スノウは頷いた。二人で少女の消えた方角へと走る。途中で進路の邪魔になる人々を切りつけ、アクセルが道を開く。二人は走った。途中で屋根の上に登れそうな踏み台を発見する。アクセルはスノウを先に登らせ、自身は追手を適当にさばく。スノウが登りきったのを確認すると、アクセルもあつという間に上がつた。

「走れ」

追いすがる人の腕を適当に切り捨て、スノウの背をアクセルは追いかける。

スノウはアクセルに言われるまま無我夢中で走つた。頭の中では違和感が渦巻いている。

(なんだろう……なにかが、変)

そんな事を考えている場合ではないと理解しているのだが、どう

しても考えてしまつ。

(でも……なにが変なの?)

アクセルが相手を切りつける度、その違和感は増す。

そんな事を考えながら走つていると、アクセルに踏み台を示した。その踏み台に乗り、水で滑る手元に苦労しながら屋根の上に登る。この都の建物の屋根は、緩やかな傾斜がついていた。どういう原理か、屋根にも水が絶え間なく流れている。壁に流れている水はここからきているらしい。アクセルは平気なのだろうか、と思い背後を振り返ると、アクセルは手を使う事なく跳躍だけで登りきつていた。しかし、水が付いてしまうのを防ぐ事は出来ていない。

鉄属であるアクセルには水は天敵といつても良いものだ。少しならば平氣だが、長時間放置すると錆が出てくる。一度錆が出来てしまえば、錆を取り除く事は出来ない。徐々に腐食していく、最終的に腕や足を失う鉄属は多いのだ。

「走れ」

アクセルに促され、スノウは走り出す。アクセルも登りつつする相手の腕を切りつけてから走つた。

「ど、どっちに行けばいい?」

「知るか」

スノウはアクセルに聞きつつも、足が目的を持つて勝手に走り出している事に気付いている。アクセルは何も言わずにスノウの後について来ているだけだ。

屋根と屋根の間を跳んで渡つていくと、一際高い建物の屋根の上に少女がいるのを発見した。

「ありやりや、もう見つかっちゃった」

その屋根は他の建物とは違い、屋根の斜面が急になつていて。少女は真ん中の境目の部分にしゃがみ、肘をついてこぢらを見ていた。

「いやー、やっぱ引き寄せられるんだねえ。可哀そう」

「水晶。返してください」

少女のいる建物の前には広場の様な広い空間が広がつていて。跳

んで建物に移るのは無理だつた。

「嫌だね」

少女は立ち上がり、水晶を取り出す。

「これが返してほしかつたら、ついて来てみなよ。鬼ごっこだつて、言つたでしょ？」

アクセルは湾曲刀を少女に投げつけた。湾曲刀が少女に当たる寸前、少女はナイフでそれを防ぐ。しかし、完全に防ぐ事は出来なかつたのか、腕に赤い筋が走つている。

(……あれ?)

そこでスノウは違和感が何であつたかを、よろしく掘んだ。

「……血?」

アクセルに切られた人々は血を一切流していない。スノウはその事に対して強い違和感を覚えたのだ。

(そうだ。みんな、血が流れていらないんだ……)

スノウの思考を破るように、少女が^{かんしゃく}癇癪^{かんしゃく}を起こす。

「ちょっと、ちょっと! なんて事してくれんのよ! このマーテイさんに傷を付けるなんて、さいつて一つ! 男の風上にも置けないねつ!」

少女の言葉にアクセルは眉を顰める。

「なにを言つている。そんのは怪我の内に入らないだろ」

アクセルの感覚ではそうだろう。実際、アクセルに腕や上半身を切断されている者もかなりいるのだ。それと比べれば、少女の傷は気にする程度でもないのだ。

けれど、スノウは少女のように、血を流す存在を知つてゐる。具体的にどういう存在かは覚えていなかつた。しかし、その存在は自分たちとは違い、簡単に傷が治らないことは知つていた。

「確かに、掠り傷だけさ! あんたたちと同じにすんなよ。あたしは、あんたたちとは違つんだから!」

「同じだろう」

アクセルの言葉に少女はバンダナで覆つた髪をぐしゃぐしゃに搔

き混ぜる。その拍子にバンダナがとれるが、少女は気にしていない。
「だあーっ！だからあたしは、あんたらが嫌いなんだよ。無頓着
で、無神経！マーティさんの纖細な心はズタズタだよ！」
顔を上げた少女の頭には猫のような耳が付いていた。
「もつとあたしを^{いたわ}労りやがれ！」

「無理だろ」

アクセルは即答で少女の言葉を切り捨てた。

「だー！ もう、うるさいつるせーーー！」

「オマエが一番うるさいだろ！」

アクセルは呆れたように呟いた。少女の耳がぴくり、と動く。

「あー、もう本当にムカつくな。マスターはどうしてこんな奴らにチャンスなんか与えるんだろ。……まあ、そこがマスターの良いどこもあるんだけどね」

少女は軽く息を吐いた。頭のバンダナが広場に落ちている事に気付き、予備のバンダナをポーチから取り出して頭に巻き付けた。その際、水晶をポーチに仕舞う。

「少し頭を冷やした方がいいかも……」

少女は赤い筋の入った腕を軽く撫でた。もつとも、そうした所で傷が治るわけではない。自らの失態を忘れなために撫でたのだ。

「さて、と。気を取り直すとして。早くしないと、追いつかれちゃうんじゃないかな？」

少女はスノウたちの背後を示す。スノウが振り返ると、そこには多くの人が集まっていた。

「そんな訳で、ばいばーい」

少女は背を向けて二人の視界から消えてしまう。しかしそれを追いかける事は出来ない。屋根を伝つて逃げようにも、近くに屋根はない。かといって下に降りてしまえば、下にいる人々の餌食になるのと同義である。八方ふさがりであった。

「剣を投げたのは間違いだつたか」

さらに、アクセルの湾曲刀は片方しかない。もう一方は広場に落ちている。それを誰も拾おうとしないのは不思議だった。

「どちらにしても、突破するしかない」

アクセルはスノウを荷物の様に片手で抱え上げる。そのまま下へ飛び降りた。突然の事に、スノウはされるがままになっている。

「え？」

後ろ向きで落下していくのは予想以上に恐怖を覚えるが、アクセルの腕の中にはいると思うとなぜか安心出来た。

アクセルは足元にいた人を踏みつけ、そこから一直線に突破していく。しかし相手も武装しているため、そう簡単に進む事は出来ない。結果、その場に踏みとどまる様に闘うしかなかつた。

アクセルが劣勢なのは、火を見るよりも明らかだ。片手でスノウを抱え、大勢に対し湾曲刀を振るう。どれだけアクセルが優れた使い手であつても、状況を奪回するには至らない。疲労はしないが、それは相手も同じ事である。切つても切つても、数は減らない。それどころか増えていく始末。

「アクセル」

「なんだ」

スノウは小さな声で呟いた。

「わたしをこのまま置いていくて」

スノウの考へていていた事を察したのだろう。アクセルの動きが一瞬止まる。それを好機と見た人々がアクセルに襲いかかるが、アクセルがその場を高く跳躍するとそれぞれが勝手に相撲ちとなつた。アクセルは近くにいた人の頭を踏みつけて着地し、近くの人々を横薙ぎする。予想外の行動に怯んだ人々をアクセルは強引に突破した。

「アクセル……？」

反応を返さないアクセルにスノウは首をかしげる。アクセルはスノウを睨みつけた。

「今度そんなふざけた事をぬかしたら、首を切るからな。 下ろすぞ。走れ」

スノウはアクセルの腕から降り、アクセルの横に並んで走る。アクセルは走りながら落ちていた自らの湾曲刀を拾う。後ろは気にせず、前の敵に集中していた。

「方向は」

「たぶん、あつてるよ」

少女の持つている水晶に惹かれているのが分かる。理由は分からぬが、スノウにとっては好都合だった。

しばらく走ると、急に追手がなくなった。

「急にいなくなつたな。楽でいいが、ここまであからさまだと怪しいな」

アクセルは最後の一人を適当にあしらい、腕を切り離して戦闘不能にする。片方の湾曲刀を鞘に納めるが、もう片方は剥き出しのままだつた。

「方向はこっちなのか？」

スノウは頷く。指で方角を示した。

「あっちだよ」

二人はどこか寂れた通りを進んでいく。

二人のいる場所は、先程の都とは全くかけ離れた場所だった。近くにある建物には水は流れず、苔はあるが光っていない。その苔にしても、ほとんど枯れ、はがれている。灰色の壁がやたらと目に着いた。光りが無い事もあり、重苦しい印象を受ける場所だった。

「この辺りは廃墟なのか」

「ハイキヨ？」

「こんな感じに荒れ果てた所の事だ。こういう場所には人も近寄らない。オレも普段なら頼まれたつて来ないな」

「…………」

スノウは俯き、自分の服の裾を握った。アクセルはその事に気が付かない。

「だから、用事を終わらしてさつと行くぞ」

「アクセル」

アクセルは動き出そとしないスノウを怪訝そうに見る。

「なんだ」

「いやなら、このままわたしを置いて」

「そんなに首を胴体から離したかつたのか？」

アクセルはスノウの言葉を遮った。スノウは顔を上げてアクセルを見る。

「だ、だつて、このままだと、アクセルも巻きこまれちゃう」「そんのは、とっくに承知だ。それにもう巻き込まれている」

スノウは口を噤む。

「それにオレの事をオマエが心配する必要はない」

「…………」

スノウは俯いて、アクセルの裾を掴んだ。アクセルは裾を掴む手を一瞥したが、何も言わなかつた。

田の前には暗い穴が口を開けていた。上に屋根があり、そこがどこかへの入り口である事を示している。入り口の先は緩やかな下り坂になつており、どれ程奥行きがあるのか見当もつかなかつた。

「この先か」

スノウは頷く。幸い、スノウたちは暗闇に慣れている。闇に目が慣れさえすれば、例え明かりがなくとも見通す事は出来るのだ。

「けつこう、遠いよ」

「問題ない」

二人は足場を確認しながら歩き出す。目が闇に慣れた所で、普段と同じように歩く。

中はトンネルというよりも、どこかの駅のような様相をしていた。通り道は整備されており、非常に通りやすい。しかし明かりがないためか、どこか不気味な印象を受けた。しばらく歩くと改札口が現れる。アクセルは眉を顰めてそれを見つめた。

「なんだ、これは」

「改札口だよ」

「なんだそれは」

「えつ……」

スノウは説明しようと思つて、言葉が出てこないのに気付く。改札口という名称は分かるのだが、具体的にどのような物なのかは分からなかつた。

「危険はないんだな」

アクセルの言葉にスノウは頷く。ならいい、とアクセルは改札を抜けて行く。スノウもアクセルに続いて改札を抜けた。

「…………」

違和感を覚えた。しかしそれは形として捉える事が出来ない。改札を一瞥し、考へても仕方ないと直す。スノウは先に行くアク

セルを追いかけた。

アクセルは変わらず進んでいく。しかし、すぐに行き止まりになつた。アクセルは周囲を見回し、段差がある事に気付く。段差は深いが、降りれない程ではない。下には線路があつた。アクセルは下へと飛び降りる。スノウも飛び降りようとして、アクセルに抱えられた。そのまま下にゆっくりと着地する。

「あいつがどっちに行つたか、分かるか」

スノウは頷き、方角を指で示した。アクセルはスノウの示した方角へと歩き始める。スノウもその後を追う。

「……ねえ。どうして、アクセルは一緒にいてくれるの？」

「ここまで来たんだ。いつその事、最後まで見届けた方がすつきりする」

「そつか」

再び沈黙が流れる。響くのは一人が歩く足音だけだった。

「スノウは」

スノウはアクセルを見上げる。

「なぜ、あの水晶に引き寄せられるんだ？」

「……わかんない」

スノウにとつても疑問であつた。水晶を見ると、スノウは強い強迫観念に襲われる。だが、なぜそんな思いに囚われるのかが全く分からぬ。スノウが聞きたいくらいだった。

「あの人に聞けばわかるかな？」

「あのうるさくて訳の分からんあいつにか？」

アクセルは目を細める。

「まともな答えが返つてくれるとは思えない」

「……そつかな」

「そうだろう。妙な言い掛けりをつけてきて、都中の人に襲わせるような奴だ」

スノウも改めて考えてみて、そうかもしれない、と思い直す。

スノウは不意に、足を止めた。突然立ち止まつたスノウを怪訝に

思い、アクセルも足を止める。

「どうした」

スノウは壁の一点を凝視している。スノウは壁に手を当てた。

「ここ、壊して」

アクセルはスノウを脇に追いやる。アクセルは湾曲刀を抜刀する。

「むつ」

硬い音と共に、湾曲刀は弾かれた。それから三回ほど刃を振り落とすが、いずれも弾かれるような硬い音が響くだけだった。

アクセルは湾曲刀を鞘に戻す。

「これ以上はこちらが駄目になるな。他の方法を探すしかない」

アクセルはスノウの方へ振り返り、勢いよく湾曲刀を抜刀する。スノウは突然の事に反応しきれず、顔の横を湾曲刀が通過したのを風で感じた。鋭い金属音が響き渡る。アクセルは舌打ちをした。

「厄介な身体だな」

「例えそうであつたとしても、今は汝の刃を防いでいる」

聞き覚えのある、ぐぐもつた声が近くで聞こえてきた。スノウが振り返ると、そこには甲冑に身を包んだ鎧騎士がいた。鎧騎士の腕には大きな大剣。その大剣はスノウの身長ほどの大きさがあり、幅はスノウよりも広かつた。

鎧騎士は甲冑の胸の部分を撫でている。そこは強い衝撃を受けたかのように、凹んでいた。

「ふむ。それはずいぶんと強い思いが込められているように感じる

「当然だ。形見だからな」「なるほど」

アクセルはもう片方の湾曲刀を抜刀する。鎧騎士はそれを大剣で受け止めた。アクセルは目を細める。スノウの服を引っ張り、アクセルは大きく飛び退いた。先程までスノウがいた場所に大剣が落ちる。衝撃を受けた地面にはヒビが入っていた。

「あ、あの……」

「ふむ。なにか」

鎧騎士は何事もなかつたかのように大剣を構える。アクセルは鎧騎士を油断なく見据えていた。

「なんで、おそつてくるんですか？」

鎧騎士はスノウを見つめる。鎧騎士は頭部も鎧で覆われているため、表情を読み取る事はできない。

「汝は、どこまで覚えてい」

「？」

スノウは首をかしげる。鎧騎士はふむ、と呟いてスノウの横を通り過ぎた。先程アクセルが切りつけていた壁の前に立ち、大剣を大きく振りかぶる。

「ぬん」

壁は周囲一帯に砂埃を上げながら崩壊した。スノウは咄嗟に口を手で覆い、目を閉じる。砂埃が落ち着いた所で、スノウは恐る恐る目を開けた。鎧騎士はスノウのその動きを観察している。

「……我是脅威とは思えぬが、上の命だ。仕方あるまい」

鎧騎士は大剣をスノウ目掛けて振り落とす。スノウは動く事が出来なかつた。

「馬鹿がつ」

鋭い金属音が響き渡る。スノウの目の前で一振りの湾曲刀が、鎧騎士の大剣を食い止めていた。

「なにをしている。さつさと行け」

アクセルに急かされ、スノウは鎧騎士が崩した壁の先へと足を踏み入れた。

2・8 地下（後書き）

ちなみに甲冑は頭部を含めた鎧の事です。鎧だけでは頭部がないのです。ここでは鎧は甲冑と同義だと思ってください。

2・9 鬼の終わりに

鎧騎士は走つていくスノウの背を見送っていた。アクセルはその事を怪訝に思う。元々、鎧騎士はスノウを狙つていたはずである。スノウを追わないのなら助かるが、鎧騎士が何をしたいのかが分からぬ。

「それで、何の用だつたんだ」

鎧騎士は視線をアクセルの方へと向ける。

「主からの命令である」

「主つてのは、水晶を持つてゐる奴の事か」

鎧騎士は首を振つた。

「否。我の主は、この世におらぬ」

「なら、どうやつて主とやらから命令を受けたんだ?」

「それを汝が知る必要はない」

鎧騎士は大剣を構える。アクセルも湾曲刀を構えた。今は考えても仕方ない、とアクセルは頭を切り替える。鎧騎士のぐぐもつた声が響いた。

「参る」

鎧騎士は一息でアクセルの懷に飛び込んだ。

(重そうな身体してゐるくせに)

アクセルは振り下ろされる大剣を、大きく横に飛び退いて回避する。着地した足で踏みこみ、鎧騎士に切りかかつた。鎧騎士はそれを籠手で受け止める。鋭い金属音が響き渡つた。アクセルは逆の手にある刃で鎧騎士の後頭部を狙つ。大きな音を立てて、鎧騎士の兜は吹き飛んだ。

アクセルは目を細める。

「……なんだと?」

鎧の中は空っぽだつた。別にその事に問題はない。問題は、頭を吹き飛ばされてなお、動き続ける鎧騎士にこそある。

アクセルは大きく後ろに飛び、鎧騎士から距離をとった。

「そういえば、汝は一刀流であつたな。油断しておつた」

鎧騎士は何事も無かつたかのように、吹き飛んだ兜を手に取り、頭につける。

「頭を吹き飛ばされて、なぜ動ける」

「ふむ？ そういえば、汝らは首が胴から離れると動けなくなるのであつたな」

鎧騎士は大剣を構えた。アクセルは下から振り上げられる大剣を避ける。鎧騎士の攻撃は大振りだが、足は速い。うつかりしていると切られる可能性があつた。

「まるで他人事のように言つな」

「それは当然である。我は、汝らとは違う」

似た様な言葉を聞いた覚えがある。

アクセルは鎧騎士に太刀を浴びせた。そのまま連続で切りつけていく。鎧騎士はアクセルの狙いに気付いたのか、むつゝと唸る。鎧騎士は大きく後ろに飛び退く。

「オマエたちは一体なんだ」

アクセルはそれに追従する。再び連續で切りつけていく。すると、鎧騎士の肩から先が抜け落ちた。鎧騎士は残つてている片手で大剣を振り回す。アクセルはそれを湾曲刀でいなしながら、距離をとつた。

「むう。強いな。腕を落とされるなど、初めての事だ」

「それは良かつたな」

「所で、汝は我の足を止めていると考えているのか」

唐突な言葉に、アクセルは眉を顰める。

「どういう意味だ」

「言葉通りの事よ。我がなぜ、あの娘を逃がしたと思う。必要ないと感じ取つたからにすぎない」

アクセルは鎧騎士に切りかかった。鎧騎士は大剣を振り回す事で、アクセルの動きを牽制する。アクセルは鎧騎士を睨みつけた。

「足止めをしているつもりで、オレの方が足止めされていた訳か」

「いかにも」

「だつたら、尚更オマエを壊す必要があるな」

鎧騎士は笑う。

「くつくつ、汝のような使い手に会えて、我は幸せ者だ」

「こつちはいい迷惑だ」

「つれない事を言つな」

鎧騎士は地面を蹴つた。上から大剣を振り下ろす。

「よく片手で振り回せるな」

だからこそ、狙いやすい。

アクセルは鎧騎士の無防備な懷へと踏み込み、大剣を持っている肩の関節部位を切りつける。一回では外れなかつたため、二回切りつけた。大剣を持つ腕はあらぬ方向へと勢いよく飛んでいく。アクセルは湾曲刀の柄で、鎧騎士の兜を再び吹き飛ばした。

「勝負あつたな」

アクセルはついでに鎧騎士の鳩尾みぞおちに蹴りを入れる。鎧騎士はそのまま後ろへと倒れ込んだ。

「我の負けだ」

アクセルは鎧騎士を無視して、奥へと足を進める。どこからか、くぐもつた声が響いた。

「一応、忠告してやる。あれにはもう関わるな
あれ、とはおそらくスノウの事だろう。

「オマエには関係ない」

「その通りだ。……念のために教えてやる。汝はあの水晶に触る
でない」

「言わぬくとも、触る気はない」

鎧騎士は微かに笑つた。

「ねえ。なんで水晶に触りたいわけ?」

少女は瓦礫の上で胡坐をかき、水晶を弄ぶ。スノウは弄ばれる水

晶を見つめていた。

「知らない」

スノウは水晶から目を離す事が出来ない。水晶がとても大切な物のように思えてならないのだ。水晶を粗末に扱う少女を、スノウはいつの間にか睨みつけていた。

「ふーん。そこは普通なんだ？ まあ、ペナルティは与えられているみたいだし？ あの竜人型の奴がいなければ、口クに闘う事も出来ないんだよね」

「ペナルティ？」

少女はにやり、と笑う。

「あれ、気付いてないの？」

少女は瓦礫から飛び降り、スノウの眼前に迫った。

「その姿。普通の人型にしては、ヒトに近過ぎる。しかも能力は普通の人型よりも下。その上、この世界の知識も少ない。それに加えて中途半端に残る記憶が邪魔をする。 ある意味、幸せなんだろうけど」

スノウは首をかしげる。スノウの様子を見て、少女は大きな溜息を吐いた。

「あー、なんか調子狂うなあ。もっと厚かましい奴なら良かつたんだけど、あんた健氣すぎる。お陰であたしが悪者みたいに見えてきたじゃん」

「？」

「……まあ、いいや。鬼ごっこ、飽きたから。さっさと触れば」

少女はスノウに水晶を差し出す。少女の突然の変わり身にスノウは首をかしげた。

「どうしたの？」

「まるであたしが親切にしちゃいけないみたいに言うね。気まぐれな自覚はあるけど、その言い方はけつこう傷付くなあ。謝れ」「ごめんなさい？」

スノウは頭を下げる謝る。少女はそれを呆れた様な目で見ていた。

「……ほんつと、調子狂うなあ」

スノウは頭を戻し、少女の持つ水晶を恐る恐る触れる。少女はそれを見て、にやりと笑った。

「一名様、ごしうたーい……つてね」

子どもは家のなかを当てもなく彷徨う。何かを探してこようとも思えるが、何を探しているのかは全く見当もつかない。

子どもは目的の物を見つけられなかつたらしい。落胆したように肩を落とした。リビングのソファに深く腰掛け、足をぶらぶらと揺らす。

「早く帰つてこないかな……」

以前よりもしつかりとした口調だつた。よく見ると、身体も以前よりも成長している。

子どもはソファの上でしばらく暇を持て余していた。急に視線が持ち上がる。子どもと正面から向き合つ形になつた。

「キミが本物だつたら良かつたのにね」

中空に身を投げ出されたのを感じる。そのまま綺麗な放物線を描き、フローリングの上へと落下した。天井ばかりが目に入る。そのまま放置され、子どもは軽く息を吐いた。

「早く帰つてこないかな……」

バタバタとソファを足で叩く音が聞こえる。しばらくすると飽きたのか、音が唐突に止んだ。子どもが近寄つてくる気配がする。再び視線が持ち上がつた。

「しようがないよね。いそがしいんだもん」

子どもは自身に言い聞かせるように呟く。子どもの腕に抱かれ、ぎゅっと身体を圧迫された。しかし腕力がそれ程強くないため、全く苦しくない。むしろ、心地よかつた。

視界が動く。奥の部屋へと進み、子どもの部屋へと入つた。

まず目につくのは、椅子に掛けられた赤いランドセル。そして機能的な学習机。その上には教科書がいくつか並んでいる。開いたまま放置されているノートが目に入るが、子どもはそれをない物として扱う。子どもはビデオ機に向かう事が苦手らしく、何度も親に

「勉強しなさい」と言われていた。言われて、じばらくは机に向かうものの、すぐに飽きてしまうようだ。

子どもは壁際のベッドに飛び乗った。視界が田まぐるしく動いている。どうやら、また投げ飛ばされたらしい。再び身体を掴まれ、何度も視界が上がつたり下がつたりする。いわゆる、高い高いの手を途中で放棄するバージョンだ。要するに、投げ飛ばしてキャッチするのを繰り返している。

「うーん……いつまでも、これで遊んでいると『子どもっぽい』って思われるちゃうよね」「

それはちょっと嫌だな、と子どもは呟く。その間も視界は何度も上下する。子どもは飽きもせず、それを繰り返す。じばらくして勢いよく壁に投げつけられた。痛くはないが、顔が少し壁と仲良しになる。すぐに力を失つて落下した。

子どもは再び掴む。そして自身の胸へと抱きしめた。じばらくすると、健やかな寝息が聞こえてくる。

私はいつ頃からか、子どもと一緒にいた。子どもと一緒に過ごす時間は心地よく、穏やかだった。子どもそれを感じていたのか、家にいる間は常に一緒に移動している。ご飯の時は母親に気付かないよう、膝の上に置いて懸命に隠していた。ご飯の時は持ち込んでやいけません、と言われているにもかかわらず。

子どもの私の扱いは、正直に表現すると乱暴の一言に尽きる。

だけど、それは嫌いではなかつた。素直に感情を出す事が出来ないからだと思つてゐる。いわゆる、愛情の裏返し。本当に嫌いだつたら、引き出しの奥に仕舞われるか、埃まみれにされたまま放置されるかのどちらかだつた。

子どもは私を手放さない。その事がすごく嬉しかつた。

いずれ捨てられていく運命であつたとしても、私はとても幸せだつた。

マー・ティは足元に倒れているスノウを見下ろした。呆れたようで大きな溜息を吐く。

「……ちよつとこの子、単純過ぎないかなあ。あの竜の人がいなかつたら、あつといつ間に切り刻まれて原型なくなつてそう。ちがう? ジル」

マー・ティが横を向くと、そこには紳士服に身を包んだ男がいた。男は一礼し、微笑みを浮かべる。

「どうでしょ? ワタシには存じ上げない事にござります」「煮え切らない答えに、マー・ティは舌打ちをした。
「あたし、あなたのそういう所が大つ嫌いだよ」「光榮にござります」

鴉の分際で、とマー・ティは吐き捨てるように咳く。ジルは微笑んだ。

「それでしたら、マー・ティは猫ですね」「そんなにナイフ投げの的になりたかったのか?」

ジルは滅相もない、と首を振る。マー・ティは大きな溜息を吐いた。

「あー、もうつ! この世界にまともな奴はいないのかなー……」

あなたがそれを言うのですか、ヒジルは心の中で咳く。

「そんな事はさておき。マー・ティ、水晶を勝手に持ち出しましたね。しかも都の人々を利用するとは、領主としての権限を越えています」マー・ティはジルに背を向ける。口笛を吹きながら、どうだつたかなー、と咳く。

「別にあたしは『人型が都にやつてくるよ。早い者勝ちでパーティ取り放題かな?』って言つただけだよ。そしたらなんか知らないけど、異様に大盛り上がりしちゃつただけだって」

「水晶を持ち出した件については?」

「地下に設置するなんて、大した嫌がらせだと思つよ。まあ、摸の

ト「よりはずっとマシだと思つけどね。配置を見直した方が良いんじゃない？」あ、折角だから戻しといて」

マーティはジルに水晶を手渡す。ジルは水晶を受け取り、これ見よがしに大きな溜息を吐いた。マーティはそれを見なかつた振りをする。

「あなたの入型嫌いは今に始まつた事ではありませんし、あなたの言い分に一理あるのも確かです」

ジルの言葉にマーティは胸を張つた。

「さつすが、あたし。ちゃんと分かつてゐる。つまり、お咎めなしつて事でしょ」

「そうなりますね」

ジルは非常に残念そうだ。

マーティはしゃがみ、スノウの顔を覗く。マーティはどこか哀れむようにスノウを見ていた。ジルもマーティの考えている事が分かつているため、その事を茶化しはしない。

マーティはいつもと違い、落ち着いた口調で呟く。

「……あたし、マスターの事は好きだけど、この制度だけは嫌いだよ」

「そんなにその娘が気に入りましたか」

マーティは不服そうにジルを見上げた。先程までの落ち着いた雰囲気はすでに消えている。

「なんで、あたしが、こんなのを、気に入るわけ？」

「おや、違いましたか？」

「違うに決まつてんじゃん」

マーティはスノウの額に触れ、スノウの記憶を読む。やつぱり、とマーティは思った。立ち上がり、近付いてくる足音に耳を澄ます。マーティはジルに向き直る。

「さつさとどつかに行けば？　あんたの用事はあたしだったんでしょ」

「それもそうですね。今、彼に面識を持つのは好ましくない

「これからもずっと、でしょ？ 監察官は大変だね。あんたの方が
あたしより位が高いってのは気に食わないけど」

「では変わりますか？」

「ぜつたい、ヤダ」

ジルは微笑み、霧のように音もなく姿を消した。マーティは足音
が聞こえてくる方角を見て、にやりと笑う。

「さて、と。あいつをイジメるとしますか」

アクセルは瓦礫を避けて走りながら、目的の人物をようやく発見
した。例の少女である。足元にはスノウが倒れていた。その事にア
クセルは焦りを覚えるが、相手を刺激しないためにも一先ず抑える。
「キサマ、スノウになにをした」

少女は頭に腕を組み、楽しそうに微笑む。

「べつにい。特になんにもしてないよ。こいつがこの水晶触つて、
勝手に眠り込んでただけだし？」

どこか人を馬鹿にするような口調だった。アクセルはその事にも
苛立ちを覚える。

「スノウから離れる」

少女はあっさりスノウの傍から離れた。にやにや、とアクセルを
面白そうに見ている。

アクセルはしゃがみ、スノウが怪我をしていないか確認する。怪
我がないと知り、安堵の溜息を吐く。再び立ち上がり、少女に湾曲
刀を突き付けた。

「キサマ、一体なにが目的なんだ」

「ただの暇潰し」

アクセルは眉を顰める。

「キサマの暇潰しのためだけに、オレたちは振り回されたと言つの
か」

「そうなるね」

少女はくすくす、と笑う。

「でもさ、本望でしょ？ それが元々のアンタたちの役目だつたんだし」

「なにを言つてゐる」

「分からぬなら、それでいいよ。それはそれでシアワセだらうからね。 でもさ、知りたくないんなら、この子から離れた方が良いよ。これは警告。ありがたく受け取れいっ！」

少女はアクセルに指を突きつける。アクセルはそれを鬱陶しそうに見ていた。

「……オマエと話していると、疲れる」

「えーっ！ なに酷い事言つちやつてんのよー。 ニーんな可憐らしい女の子引つ掛けで置いて、それはないよ！ ニーマーティセイをまを一体なんだと心得る！」

アクセルは湾曲刀を鞘に仕舞い、鬱陶しそうに手を振った。

「もうオマエ、さつさとどこかに行け……」

少女は不服そうに頬を膨らます。その姿が霧のように次第に薄れていく。

「アンタ、ぜええつた、もてないね。せめて同情してあげるよ。ご愁傷さま」

少女が消えた後、アクセルは長く大きな溜息を吐いた。

2 - 1 1 警告（後書き）

ここで第一章は終了です。次は幕間に入ります。

アクセルは足元にいるスノウを抱き上げる。スノウはその間も目を覚まさない。以前も似た様な事があつたな、とアクセルは思い出す。あの時はクラウドもいたが、彼はアクセルに押し付けたのだ。（まあ、別に構わないんだが）

アクセルはスノウを抱えたまま、元来た道へと戻っていく。

「んつもーう！ 信つじられない！」

マーティは憤然とした様子で円卓の席に座る。マーティが気まぐれな性格だと知っているため、誰も気にとめない。気にするだけ無駄なのだ。

ジルは席に着いた三人の顔を見回し、微笑む。

「……さて、全員揃いました所で始めましょう」

「ちょっと待つたー！ なんで、そいつがいるわけ？」

マーティは椅子を蹴倒し、ジルの隣にいる鎧騎士を指差した。鎧騎士はマーティを一瞥し、何事もなかつたかのように視線を戻す。ご説明いたしましょう、とジルは頷いた。

「カレを呼んだのは他でもありません。 マーティ。アナタ、鎧騎士の神殿警護の任を一時解きましたね」

「解いたよー。いけないの？」

マーティの言葉を受け、鎧騎士はくぐもった声を上げる。

「その事自体に問題はない。だが、神殿の中にいるアレが厄介な事になつてている」

「へ？ 厄介な事つて？」

リブランは大きく溜息を吐いた。猿は眠いのか、机に突つ伏して眠っている。

「マーティ、あなたは神殿がどのように出来てゐるかご存知ですか

？」

「そんなの決まつてんじゃん。マスターが作ったんでしょ」
リブランは軽く頭を押さえている。鎧騎士は無言を貫き、ジルは微笑みを浮かべていた。

「マーティ、あなたという人は、本当に仕様がありませんね。さすがです」

ジルの言葉にマーティは眉を顰める。

「なーんか今、すごい馬鹿にされた気がする」

「それは気の所為ではありませんよ」

リブランは呆れたようにマーティを見た。マーティはリブランを睨みつける。

「……分からぬ方が幸せですね」

マーティは怪訝そうな顔をしながらも、ジルの方へと向き直る。

「それで、アレがどうなつているつて？」

鎧騎士は顎をさすりながら答える。

「無差別に取り込もうとしておるのでですよ」

「無差別って……つまり、じゆこと？」

リブランはなかなか進まない話を進めるためにも、説明をする事にした。

「簡単に説明するなら、近付いた人々に強制的に問題を出すという事です。スノウのように参加している人なら問題はありませんが、水晶に触つて記憶を取り戻していない人に対しても問題を出すのは、非常にマズイ事ですよ」

「そつか、願い事叶い放題になっちゃうね。すんごい大盤振る舞い！」

「そんな簡単な事ではありません、とリブランは呟く。

「ん……なら、僕がどうにかする~？」

猿は机に突つ伏していた身体を起こし、間延びした声で四人に提案する。

「だあれも近寄れないようにしてしゃえば、問題は起こらないんだよ

ね～

それはそれで大問題が起るのだが、僕は気が付いていない。
「だったら、僕の能力での辺は沼地にしておくよ。そしたら、
だれも近付こうとしないよ～」

気の抜けるような話し方をしているが、話している内容は無茶苦
茶な事である。しかし、僕は一人で納得するように頷き、姿を消し
てしまう。残された四人は呆気にとられ、見送る事しか出来なかつ
た。

「…………マズイではないでしょうか」

氣まずい空気を破り、リブランはジルへと尋ねる。マーティもよ
うやく我に返った。

「マズイってもんじやないっしょ！ そんな事しちゃったら、本當
に誰も近寄れないじやん！ おーぼーだよ！ あたし、すぐに止め
てくれる！」

「あ、マーティ、待ちなさい」

「もし仮に僕の作業が終わってたら、リブランもそのデカブツも
手が出せないじやん。結局、あたしがやるっきやないでしょ」

リブランの制止を聞き入れる事なく、マーティは姿を消した。リ
ブランはジルの方へと目を向ける。ジルは特に焦つておらず、のん
びりとしていた。

「問題は「ございませんよ。それに、イザという時はワタシが出ます」
ジルは鎧騎士に視線を投げる。鎧騎士は頷き、姿を消した。リブ
ランに向かって、微笑みを浮かべる。

「そんなに焦らなくても、なにも問題はございません」

ジルも鎧騎士の後を追つように、姿を消した。リブランは一人、
空間に取り残される。その表情には不満がありありと浮かんでいた
が、結局口に出す事なく姿を消した。

幕間（後書き）

猿は寝ぼけていたため、思考が単純になっていたようです。
近付くと危険 近寄らなければいい 誰も近寄れない様にすれば
いい

最後の結論が大変な事に…… マーティ、がんばれ。

3・1 変化

目を覚ますと、スノウは何かに背負われていた。急いで顔を上げると、アクセルがスノウを振り返る。至近距離で目が合い、スノウは慌てて俯いた。

「目が覚めたか。歩けるなら下ろすぞ」

スノウは頷き、アクセルに下ろしてもらいう。

スノウは周囲を見回す。そこは見渡す限りの砂漠、足元にはどこかへと遠く続く線路があった。スノウは首をかしげる。

「水の都に戻らず、そのまま外に出たんだ。列車に乗れれば一番良かったんだが、そんな運良く通るはずもないしな。一体今、どこを走っているんだか」

アクセルは軽く息を吐いた。

「ごめんなさい。ありがとう。重かつたでしょ？ わたし」

唐突なスノウの言葉にアクセルは目を丸める。スノウはアクセルの視線を受け、焦ったように目を逸らす。アクセルは怪訝そうにしている。

「重いもなにも……スノウはワタ属だろ。ワタ属は軽い種族だし、普通はそんな事気にしないと思つぞ」

「それは、つまり……どういう意味？」

「自分より重い種族を持てば、鉄属の身体は歪む。だがワタ属みたいな軽い奴らなら、心配するだけ無駄だ。オレたちの方が重いし、力もずっと強いからな」

話は終わりだ、とばかりにアクセルは歩き出す。スノウはその背中をぼんやりと眺めていた。

（わたし……なにかが変……）

変なのは今に始まつた事ではない。しかし、アクセルに対して違和感を覚える。アクセルを見ていると、胸の奥が苦しくなるのだ。（なんなんだろ。病気かな）

この世界には病気は存在しない事を、スノウは知らなかつた。だから、スノウは自身が感じている違和感は風邪だと勝手に勘違いする。

（早く治つてくれないかな……）

スノウは先に進んでいるアクセルの元へと走つた。

「そういえば、列車ってどんなものなの？」

スノウはアクセルの隣に並び、アクセルを見上げる。アクセルは視線を前に向けたまま答えた。

「くすんだ赤色をしていて、中に椅子が並んでいる物だ」

「列車はどんな人？」

アクセルは首をかしげる。

「人、ではなかつたと思う。確かに口うるさいが、あいつは線路上しか走れない。念のために言つておぐが、列車が来た時は線路から離れるよ。あいつは線路上にいる奴らを容赦しないからな」

「線路の上にいなければ平氣なの？」

「ああ。線路の上しか走れないからな。あいつは割と楽しんでるみたいだけど、オレだつたらそんな扱いは『免だ』

ふうん、とスノウは相槌を打つた。

妙だな、とアクセルは思つ。

（スノウがまた変わつた）

何が変わつたのか、と聞かれても断言する事は出来ないが、確實に何かが変わつた事をアクセルは感じ取つていた。

（水晶を触つて目が覚めると、スノウの何かが変わる）

前回は言葉の種類が一気に増えていた。舌足らずだつた喋り方もしつかりし、意見を言う事も出来るようになつたのだ。今回は何が変わつたのだろう、とアクセルはスノウを見つめる。スノウは道を逸れない様に、足元の線路を見ながら歩いていた。

（さつきの反応……）

スノウが起きた時、スノウはアクセルの顔を見ると慌てたように

俯いた。至近距離に顔があつたから驚いただけだろうが、それだつたら水の都でも思いつきり抱き上げている。その時も割と近くに顔があつたが、特にいつもと変わらなかつた。

もつとも、アクセルの中では非常事態と日常は分かれていないため、状況の違いを理解する事は出来ないのだ。もちろん、その事に

アクセルは気付いていない。

(そういえば、重かつただの何だの言つていたな)

意味不明だ。理解出来ない。

無理に理解する必要もないだろうとアクセルは判断する。気にした所で何かが変わる訳もあるまい。

「列車が来れば楽できるんだが……」

スノウはアクセルを見上げ、首をかしげる。

「列車はいつ来るか分からないんだよね。ここで待つてたら、いつかは来るつて事？」

「そうだろうが、ここで暇を持て余すのも面倒だ」

「そうなの？」

「そういうものだからな」

スノウはふうん、と歩き続ける。アクセルも足を止める事なく歩いていた。

不意に、軽やかな鐘の音が響き渡る。スノウは思わず周囲を見回した。

「噂をしたからかもな。これで緑の村まで一気に楽が出来る」「スノウは首をかしげる。

「緑の村？」

「ああ、次の目的地だ。……あそこなら、クラウドの事がなにかかるかもしれん」

スノウはアクセルから顔を逸らす。アクセルはその事には気付かない。

「……緑の村って、どういう所？」

「ん？ ああ、まあ、森に囲まれている所だな。一番小さな土地だ。
この世界で一番星が綺麗に見える所だと聞いている」

「アクセルも行くのは初めて？」

「あなた、とアクセルは頷いた。

緑の村でクラウドの手掛けりが見つかなければ、もうあてがない。他にどうすればクラウドの存在した痕跡を示す事が出来るのだろう。アクセルには他の方法が全く思いつかなかつた。

アクセルは空を見上げる。多くの星が瞬いていた。

（なあ、クラウド。お前は確かにこの世界にいたんだよな）

答える声はもちろん、ない。

近付いてくる軽やかな鐘の音で、状況を思い出す。

「とりあえず、列車に乗るか。 クラウド、線路の近くにいるのも

危険だ。少し離れた位置から列車を待つんだ」

スノウは頷き、アクセルの元へと歩く。

（スノウ……せめて、お前が覚えていてくれたなら……）

スノウを見つめていると、視線に気付いたスノウはアクセルの方へ向いた。その状態で見つめていると、スノウは頬を染め、身体ごと後ろを向く。

（…………？）

スノウの変化は、誰もまだ気付いていない。

3・1 変化（後書き）

スノウの精神年齢が一気に上昇します。だいたい中学生くらいです。それでも引っ越し思案な所は変わりません。

3・2 列車

列車がようやく視界に入り、スノウは列車がどうじつものかを理解する。

(本当に人じゃないんだ)

そもそも、人の形をしていなかつた。箱のような物を繋ぎ合わせて作られているようだ。箱には窓が等間隔に付けられており、中を覗く事が出来そうだ。それ程早くもないでの、覗こうとすれば覗く事が出来そうだ。スノウは背伸びして中を覗こうとするが、なかなか見えない。スノウの様子を見て、アクセルが呆れたように声をかけた。

「おい。そんな事をしていると乗り遅れるぞ」

アクセルは箱の扉の横に付けられている取っ手に手をかけ、そのまま列車の中へと入っていく。スノウはしばらく呆然と眺めていたが、スノウ自身も乗らなければならない事を思い出す。スノウは丁度視界に入った取っ手を掴み、列車の中へとに入る。

列車の中では赤い座席が向かい合い、等間隔に並べられていた。通路を通りやすくするために、真ん中の部分に空間が開けられている。試しに座席に座つてみると、思っていたよりもずっと柔らかかつた。

「ふかふか……」

あまりの気持ち良さにスノウが横になつていると、頭上から呆れた様な声が降つてくる。

「寝るなよ。乗り過ごすから」

溜息交じりのアクセルの言葉に、スノウは微笑みを浮かべる。

「大丈夫だよ。そんなにうつかりしてないから」

「列車に見とれて、乗るのを忘れていたのは、どこの誰だったんだか……」

アクセルは溜息をつく。スノウは首をかしげた。

「誰か乗れなかつたの？」

「……いや、なんでもない」

アクセルはスノウの向かい側に座る。スノウは身体を起こし、窓の外を覗き込む。窓の外は一面、砂だった。

「……砂ばつか」

「砂漠だからな」

「……つまんない」

アクセルも窓の外を覗き込んだ。

「つまらないもなにも、仕方ないだろ？。スノウは一体、どういうのを想像していたんだ」

アクセルに問われ、スノウは考えるようになに唸つた。

「うーん……もつと色々な景色が見えるのかと思つてた」

「例えば？」

「縁、とか？」

アクセルは軽く息をつく。

「縁がある場所なんて、今から行く縁の村くらいだぞ。それ以外は滅多にないな」

「そうなの？」

「大体、なんで縁なんだ？ 他にもあるだろ？」

スノウは他の物を考えようと唸るが、思いつかなかつたらしい。浮かない顔をしていた。

「わかんない。浮かんだのが縁だつたの」

「そうか。……しかし、列車は楽だが暇だな。他に乗客でも乗つていれば面白いんだが」

「探してみる？」

スノウは立ち上がり、アクセルに尋ねる。アクセルは呆れたようにスノウを見ていた。

「基本的に土地の移動をする奴は珍しいんだ。自分が生まれた土地にそのまま居着く奴が多い。スノウのように外に出ようとする方が少ないんだ。だから探しても他に乗客なんていないと思うぞ」

「でも、暇つぶしにはならない？」

アクセルは好きにしろ、とスノウを見送る。スノウも行ってくる、とアクセルの元を離れた。

アクセルの元を離れたスノウは列車の後ろ方向に向かつて歩いていた。箱と箱のつなぎ目にある扉を開け、次の箱へと移動していく人がいるかどうか確認しているが、今の所、他の乗客には会わなかつた。

「やっぱり誰もいないのかな……」

スノウが扉を開けると、一面の砂漠が広がっている。どうやら一番後ろまで来てしまったようだ。外で風景を楽しむように、柵で場所を確保されている。スノウは柵に触れ、後ろへと流れしていく風景を眺めた。白い髪が風を受けてなびく。スノウは髪を押さえるが、やはり風に弄ばれてしまつ。スノウは列車の中へと戻つた。

「よつこいしょっと」

聞き覚えのある声が聞こえ、その方向へと目を向ける。そこには頭にバンダナを被った少女がいた。少女はスノウを見て一瞬、顔をしかめたが気にした風もなく席に座る。

「えつと……奇遇です、ね」

スノウが声をかけると、少女は外に向けていた顔をスノウに向けた。

「そうかもしれないけど……あんたさ、よくそんな普通に出来るね」「なんで？」

スノウは少女の向かい側に座る。すると少女は立ち上がり、反対の窓側にある座席に移つた。

「普通はさ、あんな事をされたら、そんな風に寄つてこないってスノウは立ち上がり、少女の向かいの座席に座る。

「そうなの？」

「そりなんだつて」

再び少女は立ち上がり、別の場所にある座席に座る。スノウもそ

れを追いかけ、向かい側の座席に座る。一人はしばらくそれを無言で繰り返す。しばらくして、音を上げたのは少女の方だった。

「だーっ！ ううとうしい！ ついてくんnya！」

「なんで？」

少女は立ち上がり、スノウに指を差す。対して、スノウは不思議そうに首をかしげていた。

「い、い、か、ら、ついてくんna！」

再び少女は別の座席に移ろうとする。しかしそスノウがその腕を掴み、少女を引き止めた。少女はスノウを睨みつける。

「……なに？」

「ついて来るなっていつたから」

「放してくんない？」

少女はスノウの掴んでいる腕を示しながら言つ。

「やだ」

スノウが即答すると、少女は目を細めた。

「なんで」

「暇だから」

少女はスノウの腕を振り切る。

「暇潰しにあたしで遊ぼうつたつて、百年早いんだから」
スノウは不思議そうに首をかしげた。

「百年……？」

少女は咄嗟に口を手で塞ぐ。田が泳いでいた。

「な、なんでもないよ…」

少女は列車の窓を開き、そこから飛び降りる。スノウも思わず窓から身を乗り出して覗きこむが、そこに少女はいなかつた。

3・3 車内と車外

スノウは誰もいない砂漠を見て、首をかしげる。

「……どこいったんだろ」

窓から顔を出したまま周囲を見回すが、目に入る範囲には誰もない。唐突に後ろから腕を引っ張られ、スノウの身体は車内に戻る。「窓から顔を出すな。身体」と出すのはもつと危険だ。やめろ

スノウが後ろを見ると、アクセルが立っていた。スノウは素直に頷く。

「わかった」

アクセルは近くの席に腰かける。スノウは顔を窓から出さない様に外を見回す。やはり、誰もいなかつた。

「何があつたのか」

スノウはアクセルに向き直り、座席に座る。

「ううん。別に」

「……そうか」

アクセルは何か言いたそうにしながらも、結局口には出さなかつた。スノウは再び視線を窓へと移す。心の中では疑問が渦巻いていた。

（なんである子の事、アクセルに言えなかつたんだろ）

アクセルの場合、少女の顔を見た瞬間に襲いかかる気がしたのだ。だから、反射的になにもないと答えてしまった。

そこまで考えて、スノウは妙に納得する。

（それは見えるかも……）

アクセルに目を向けると、一振りの湾曲刀に目がいった。そこでスノウは微かに違和感を覚えるが、具体的にどこが変なのかが掴めない。それに、すぐにその違和感は霧散してしまった。

（早く、早く行かない）

ささやき声が聞こえ、スノウは咄嗟に背後を見た。しかしそこに

は赤い背もたれがあるだけ。スノウは軽く息を吐きながら、正面に向き直った。

「うし、ふとした拍子に何かがスノウを強く追いたてるのだ。そして、それが何かはスノウには分からぬのである。正直、気味が悪かつた。

(一体、なにが目的なんだろ)

スノウを追いたて続ける声に考えを巡らせるが、スノウには分からなかつた。

列車の屋根の上でマーティはのんびりと寝そべつてゐる。不思議な事に、列車の上に乗つてゐるにも関わらず、風が一切なかつた。マーティはそれを特に不思議に思つ事なく、寝そべつてゐる。

「あー……まさか、いきなり会つなんて思わなかつた……」

スノウが水晶を集めているのであれば、緑の村で必ず会う事は分かつてゐた。なので鉢合わせにならないよう注意しようと思つていたのだ。その矢先に会つてしまつたのである。マーティは思わず頭を搔き鳶りたくなつたが、さすがに抑えた。

(しつかし、あれはあたしよりもずっと変だと思うな)

スノウの性格が変わつてゐるのに心当たりはあるが、それだけではないように思えた。

「元々の持ち主の影響を受けてゐるにしては警戒心がなさすぎると、影響を受けていないとしたら余計に変だよ。あー、関わりたくない。絶対に」

すでに関わつてしまつてゐるのだが、絶対にこれ以上は関わりたくない。ただでさえ、これから厄介事をどうにかしなければならないのだ。これ以上、面倒事に関わつてゐる暇はない。

「だけどなー、僕に会おうと思つたら絶対に関わるんだろ? なあ。これじゃあ、何のためにすぐに出たのか分からぬよ」

「おや、何のためだつたのですか」

「そりゃあ、あの変な白いのが来る前にひやひやーっと厄介事を取

り除いて……ってえ！ ジル、あんたなんでこんな所にいるわけ？

マーティは急いで立ち上がり、ジルを睨みつけた。ジルは微笑む。「もしもの際に備えて、ですよ。僕はあなたと同じ地位にいるのです。あなたが特殊な存在だとしても、地位が同じである限り、能力に優劣はないぞいません。なので、ワタシが参った次第にござります」

優雅に一礼するジルを、マーティは冷ややかに見つめた。

「要するに、あたしじゃ役不足ってわけ」

「滅相もございません。あくまで念のためでござりますよ」

マーティは舌打ちをする。

「あたしがあんたの事、嫌いって知ってるでしょ。あんたと一緒にいるくらいだったら、あの丘とのと一緒にいる方がずっとマシ」

「おや、お手伝いでもなさるので？」

「まさか。妨害こそすれ、誰が手伝うかつての」

マーティは軽やかに身体を翻す。視界からジルが消えて清々するのと同時に、着地した足に妙な感触が伝わった。足元に目を向けると、黒い毛むくじらの物体があつた。

「なに、これ。狼モドキ？」

マーティは黒い物体を踏みつけたまま、踏みつけている物の顔をのぞき見る。狼モドキは金色の目でマーティを睨みつけた。

「サッサとどけよ。ボクの綺麗な毛並みが汚れちゃうでしょ。それに、重いんだよ」

「…………ふうん」

マーティは狼モドキの頭を踏みつける。ぐづぐづ、と足を押し付けた。

「う、うわあーん、やめてよー。ボクが何をしたって言つんだよー。今、思いつきつてこの女の心を傷つけたけど」

「乙女…………なにそれ」

だから嫌いなんだよ、こここの奴ら。

マーティは舌打ちをして、狼モドキの上から退く。列車の連結部

分はあまり広くないため、必然的にマーティは狼モドキの頭の上を通過して、そのまま列車の中へに入る事になる。何事もなく通過したはずなのに、狼モドキは不服そうに声を上げた。

「ちょっととちょっと、人の身体踏んづけておいて謝罪の言葉もなしよ。そういう時は？ごめんなさい？って謝るんだよ」

マーティは胡乱な目付きで狼モドキを見下した。

「は？ なんであたしが、あんたみたいなのに、わざわざ謝らないといけないわけ？ むしろ、あんたが謝れ。黒もじや」

「なつ、黒もじやだつて？ ボクのこの毛の美しさが分からぬんて、終わってるね。まあ、君みたいに全身に毛がない様な生き物じゃあ、ボクの魅力は分からぬのかな」

マーティは眉を顰める。

「はあ？ 何言つてんの。あんた、頭大丈夫？ あたし、親切だから、あんたの脳天でもかち割つて、そのぶつ飛んだ頭でも治してあげよつか？」

狼モドキは顔をしかめる。

「それこそ何言つてんの。ボクの頭はとっても正常。その上とおり頭が良いんだから！」

「ふうん。とつても残念みたいだね。このマーティさまの親切にも氣付かないなんて、それこそ終わってるね」

「な、なにおー！」

「なに、やる気？」

列車の連結部で一触即発の雰囲気が流れた。

3・4 マーティ

その一触即発の雰囲気を壊したのは、一つの声だった。

「おーい、カルー。どこ行つたんだーい」

「あ、こんな所にいたんだ」

マーティが後ろを振り返ると、そこにはスノウがいた。カルーと呼ばれた黒い狼も背後を振り返り、尻尾を振つてどこかへと駆け出していく。

「ドリトルー！　ここだよー！」

その姿はまさしく犬だった。犬が通り過ぎた後、扉が閉まり、どうなったのかは把握できない。これ以上追いかけたとしても、意味がない事を知つてはいるマーティはそのまま放置した。

それよりも、もっぱらの問題はスノウである。マーティはスノウに向き直つた。

「なに、また追いかけてきたっての？」

マーティはスノウを睨みつけるが、スノウは堪えた様子もない。

「ううん。なんか騒がしいなつて思つたから来たの。偶然だね」

スノウは微笑む。マーティは軽く溜息を吐き、バンダナがずれなりように頭を搔く。

（なーんか、この子相手だと毒気が抜ける……）

マーティのせいで酷い目に遭つたにも関わらず、微笑みを浮かべるスノウ。得体が知れない、といえばそれまでだが、それ以前に物凄く鈍いようと思えた。実際、鈍い。

（気を張つてることちがバカみたい）

「それで、何の用？　まさか、また暇潰しとか言わないでしようねえ」

「違うよ。あなたも縁の村に向かつてるの」

特に否定する理由もないのに、マーティは素直に答える。

「そーだよ

スノウの顔に笑みが広がった。マークにはなぜ笑ったのかが分からぬ。

スノウはマークの手を取り、上下に振った。

「じゃあ、一緒に行こ?」

マークはスノウの言葉の意味が分からず、反射的にスノウを睨みつけていた。

「なんでそなんの」

「どうせ行くなら一緒に行つた方が楽しいよ」

「……あんたはともかく、あたしはあんたの連れに嫌われると思うけど」

スノウは微笑む。

「誤解を解くためにも一緒に行こうよ」

「…………はあ?」

マークにはスノウの思考回路が全く理解できなかつた。

しばらくして戻ってきたスノウを見て、アクセルは目を細めた。

「それはどうした」

「それ、じゃなくて、マークだよ」

少女　　マークは顔をしかめている。いかにも不本意、といった様子だ。

「捨ててこい」

「ちょっと待てい!」

マークはスノウを押しのけ、アクセルの目の前へと躍り出た。

「あたしをそこら辺の犬や猫と一緒にすんなつて! この突っ込みバカ!」

アクセルは眉を顰める。

「突っ込みバカ?」

「水の都の時、バカの一つ覚えみたいに突っ込んできたじゃん。それ何度も! あたしが何度バカだな、って思ったと思つてんの! 身体に自信あるからって、無謀すぎ! しかもこんなか弱い女の

子に向かつて、剣を投げるとかつ、ありえないし！ 女の子を傷物にした罪は重いんだから！」

アクセルは意味が分からぬ、といった風にマーティを冷ややかに見ていた。スノウは一人をおろおろと見守っている。

「……それで？」

「あんた、硬いのは身体だけにしどきなよ！ この子みみたいに柔らか過ぎるのは困るけど、もう少し柔軟になれ！」

「……なんでお前に説教されないといけない」

「あんたがバカ過ぎるからに決まつてんでしょう」

当然、とばかりにマーティは胸を張る。アクセルはそんなマーティに呆れた様な視線を向けていた。

「え、えっと……仲良くしよ？ ね？」

スノウは笑みを浮かべて二人の間に入る。アクセルは大きな溜息を吐いた。

「そもそも、オマエが原因なんだがな」
マーティも賛成するように頷いている。

「そうだよね。あたしたちの仲が悪い事は始めてから知つてんだから、もつと考えなさいよ」

「えつ……え？」

スノウは混乱しているのかアクセルとマーティの間で、視線を何度も行き来させる。

「え……えーっと……仲良く、なつた？」

「どうしてそうなる」

「あんた、目が悪いの？」

「あうう」

二人に睨まれ、スノウは小さくなるしかなかつた。

(妙な事になつたな)

マーティはちらり、と視線を彷徨わせる。

隣の座席には意氣消沈したスノウ。そして目の前には緑の龍を模

した人型のアクセルがいる。非常に氣まずい組み合せだった。

(まあ、どっちにしろ縁の村までだし、それまで我慢するか)

短気に見られがちなマーティであるが、実はかなりの氣分屋なのである。氣分によって態度の揺れが激しいため、扱いづらい人種であると本人も理解していた。もつとも、理解した所で治るものでもないし、治すつもりもない。元々、そういう性質を持つ生き物であったためだ。

その所為か、あちらの世界からやつて来たマーティにとって、この世界は非常に過ごし辛い世界である。

(あー……久々に日向ぼっこしたい……)

この世界の外に出るためには、位を上げなければならぬ。しかし、この世界で位を上げようとするのは、夢のまた夢の話だった。(まあ、あたしはマスターのためなら何でも良いんだけどね)

あの鶴の下ではなけれどね。

マーティは内心で頭を抱える。

ジルの地位もマーティの地位も、特例として採用されているのだ。だから、ジルもマーティも本来であれば位などない。この世界でその事を知っているのはジルだけだが、マーティはジルよりも立場が下だ。いざという時、強く出る事が出来ない。

(あーあ、どうしてマスターはジルの位をあたしより上にしたんだろ)

マーティはこの世界を見守つているであらう主人に思いを馳せた。

3・5 意外な伏兵

妙な事になつた。

アクセルは内心で溜息を吐く。田の前には敵対していたはずの少女、マー・ティ。マー・ティの隣には、彼女の目の敵にされていたはずのスノウ。

(なんでこうなつたんだ?)

そもそも、マー・ティをここまで連れてきたのはスノウ本人である。スノウはマー・ティにされた数々の事柄を覚えているのだろうか。覚えているのであれば、アクセルは正気を疑う。好き好んで厄介事を見の内に抱え込む必要もないだろう。

スノウに目を向けると、変わらず窓の外に田を向けていた。

「ちなみに縁の村に着いたら、あたしは勝手にどつか消えるから。だからそんなに心配しなくてもいいよ」

意外にもマー・ティがアクセルに声をかけてきた。

「違つた? 厄介事が勝手に自分から消えていくんだから、もつと嬉しそうな顔をしなさいよ」

「え? マー・ティどつか行つちゃうの?」

スノウは首をかしげてマー・ティを見る。マー・ティは顔を逸らした。「別にあたしがどこに行こうと関係ないじょーが。むしろ、いい方がそっちも楽でしょ」

「そうかな? みんなで一緒にいた方が楽しいよ」

「…………なに、こいつ」

マー・ティは顔をひきつらせ、スノウから離れようとする。しかし、同じ座席に座つてゐるため、離れる事は出来なかつた。席から立ち上がればいいのだが、なぜかマー・ティはしない。

「ちょっと、あんた。こいつの保護者なら、さつさとなんとかしさいよ! あたしづつと大変な目に遭つてんじやんか!」「罪滅ぼしに丁度良いんじゃないか」

今にも噛みつきそうなマークスに對し、アクセルは適当にあしらう。マークスはしばらく驚いたように目を丸めていた。

「なつ……なんで、あたしがこんなのに罪滅ぼししなきゃいけないわけ？ 無理、無理。ぜえつたい、無理！ むしろ、そんなの必要ないよ！」

「なら、好きにしろ」

「好きにするさー！」

マークスは立ち上がり、移動しようとする。しかしごく立ち止まつた。マークスの服の裾を、スノウが掴んでいるのだ。スノウに目を向けると、スノウは真っ直ぐにマークスを見ていた。

「ちょっと。手、放してくんない」

「やだ」

また始まった、とアクセルは思つ。

スノウが拒絶すると、それが受け入れられるまでスノウはこのままだ。始めの頃は分からなかつたが、スノウは可憐な見た目に反して我が強い。こうなつたスノウはアクセルの手にも負えないのだ。

「やだつて、あんた。子どもじゃないんだから……」

マークスは呆れたようにスノウを見ている。マークスはアクセルへと目を向けた。

「ちょっとあんた。見てないで手伝いなさいよ。このままじゃ、あんたたちと一緒にいないといけないじゃん」

「なんで一緒にいたら駄目なの？」

「そんなの決まってんじやん。観察役でもあるあたしが、参加者に加担する事はつ」

マークスはそこで咄嗟に自身の口元を押さえる。そして恐る恐る、二人を見た。軽く咳ばらいをし、何事もなかつたかのように仕切り直す。

「と……とりあえず、一緒にいてもあたしが得をしないの一・わかつた！？」

スノウは首をかしげた。その表情は純粹その物である。

「分からぬ」

マークは絶句し、諦めたように大きな溜息をついた。アクセルはマークに少なからず同情する。もともと、口には出せなかつたが。

「うつしてマークを交えた一行は順調に目的地へと向かつて行つた。少なくとも表面上は。」

奇しくも、問題の種は同じ列車の中に紛れ込んでいたのである。「ん……やっぱりドリトルは最っ高だね！ ボクがピンチの時に颯爽と駆けつけ、そして何事もなかつたかのように振る舞う！ ？ ふつ、俺はわざわざ自分のした事を自慢する様な男じやないぜ？ つてか？ くーつ、それでこそ男つてもんだよ！ サッサがドリトル！」

黒い狼は黒い目をきらきらと輝かせ、尻尾を勢よく振る事で大きな感動を表現している。狼の目の前にいる人物は、狼の言葉を受けて腕を組んでポーズを取つた。その姿は金属のように硬質な輝きを持つ機械族である。

「ふつ、そりだらうそりだらう、一体何が最高だつたかはさつぱり分からぬが、俺はこの世界で一番すごいのさ！」
「さつすがあ。良く分かんないけど、カッコいい！」
「だらう。もつとこの俺を褒め称えたまえ」

異様なテンションを維持し続けるこの二人。黒い狼の名はカルー。機械族の人物はドリトルという。スノウたちの乗る場所から遠く離れ、先頭近い所に陣取つていた。そのため、彼らがどれだけ騒ごうとも後列にいるスノウたちには届かない。

「それでドリトル。次は一体何をするの？」

黒い瞳に期待を滲ませ、カルーは忠犬の如く腰を下ろし、言葉を待つた。対するドリトルは焦らす様に答える。

「ふつ、そんなのは決まつてゐる」

「どんなのどんなの？」

「それは……」

「それは……？」

カルーは息を飲んだ。カルーはドリトルを真っ直ぐに見上げ、ドリトルもカルーを真っ直ぐに見据えている。そして、ドリトルは高らかに答えた。

「まだ考えていないつ！」

一瞬、沈黙が場を包んだ。

しかし、それも即座に打ち破られる。

「さつすがドリトル！ なんにも考えてなくとも胸を張つてそこまで言いきれる図々しさ！ カツコイー！ 痺れるう。いつかボクもドリトルみたいになれるかな」

カルーは無邪気な目を輝かせ、ドリトルを見上げる。ドリトルは鷹揚に頷いた。

「なれるさ、なれるさ。カルーにはその素質があるのだからな」

「ほんと？ やつたー！」

様々な思いを乗せ、列車は進む。その先に何があるのか、何が待ち受けているのか、誰も知らない。

3・6 森の中

スノウたちの乗る列車は決して止まらない。なので途中で降りる場合も列車から飛び降りる必要があった。緑の村の手前でスノウたちは列車を降りる。スノウは突然変わった風景に驚き、周囲を見回した。

来た方向を見れば砂漠。反対の方向を見れば、唐突に森がある。森の中はどことなく湿気が籠つており、あまり長居したい場所とは思えなかつた。

「ここが緑の村？」

スノウは森に指を差してアクセルに尋ねる。アクセルはいや、と否定した。

「ここは入口だ。緑の村は他の場所と違つて、人がかなり少ない。見ての通り、地味な上、湿気も多いんだ。好き好んでこの土地に留まる奴等は相当な変わり者しかいない」

「まあ村長が急け者つてのも関係してるんだけどね～」

マーティは森を見据えながら付け足す。アクセルは驚いたようにマーティを見た。

「知り合いなのか？」

「まあね。あたしも水の都の代表だし」

「代表……？」

スノウは首をかしげる。

「緑の村でいう、村長。煉瓦の町でいう、町長。みんな同じ立場だよ。まあ、あたしは別格だけね」

「確かに都中の人間でスノウを襲うような奴だからな」「んー、それはちょっと違うけどね」

マーティはアクセルの皮肉を適当に流す。

さて、とマーティは二人の前に立つた。

「それじゃ、あたしはここで！」

駆け出そうとしたマー・ティの袖口を、スノウは掴み損ねる。マー・ティはそのまま走り去ってしまった。

「バイバーイ」

スノウとアクセルは森に溶けていくマー・ティを見送る。スノウは寂しげに伸ばした手を握つたり、開いたりしていた。

「……また、会えるかな？」

「さあな。少なくともオレは会いたくない」

スノウは肩を落とす。

「アクセル……マー・ティと仲良くなつて欲しかつた……」

「無理な注文だ。それより、オレたちもせつと行くぞ」

二人は森に向かつて歩き出す。

森の中は木々が鬱蒼と茂り、隙間から空を見上げる事が出来ない。歩く土も、踏む度にどこか湿氣を帯びた感触を返す。泥とまではいかないが、足元は滑りやすくなつていて。その上、木の根の部分が露出しており、気を抜くと躊躇うようになる。そのため、足元を確認しつつ、一歩一歩を確實に踏む必要があるのだ。砂漠を歩くよりは遙かに足は楽だが、この森は精神的に疲れる。気分的にどちらも不快な事に変わりはなかつた。

「……なんで村で下りなかつたの？」

スノウは思わず言わずに居られなかつた。わざわざ森の入口で下りなくとも、緑の村で下りた方がずっと効率が良いだろう。スノウにはそれが不思議でならなかつた。

「そういうば、緑の村に行くのは初めてだつたな」

スノウは頷く。アクセルは時折、足を滑らせそうになるスノウを支えながら前へと進んだ。

「あそこは緑の村って言われているが、実際には周りが沼地で囲まれているんだ。列車はその沼地を避けて通る。確かに直前に下りれば、村からかなり近い位置に着けるが、沼が近い所為か足場が悪過ぎる。今、歩いているここよりもずっと酷い。だから余程の事がない限り、森の入口で下りるんだ」

納得したか、とアクセルは確認する。スノウは一応、と答えた。

「なんで沼が近くにあるの……」

「さあな。オレも緑の村はあまり来た事がないからな。詳しくは知らん」

「もう少しもともな所に村を作ればいいのに」

アクセルもスノウの言葉に同意する。

「全くだ。だが、この場所にあるんだから仕方ないだろ。ここから離れると、また砂漠だしな」

スノウはアクセルの説明を聞きながらウンザリしてきた。

思えば、この世界はとても暮らしにくい様に思える。

明かりがなければ暗闇に包まれる世界。空にはかろうじて星の明かりがあるだけ。大地の半分以上は砂漠で、人の暮らせる土地はごく僅か。その僅かな土地にしても、過ごしやすい土地とは言い難い。その上、型によって差別される。

(そういえば、この世界にはどれくらいの人人がいるんだろう)

スノウはそんな事をふと思つた。だがうつかり足を滑らせ、その考えも吹き飛ぶ。咄嗟にアクセルが支えたおかげで助かつたが、別の事を考えていると転んで悲惨な目に遭いそうである。

「おいおい、しつかりしろよ」

アクセルはスノウに呆れたような視線を投げた。スノウは居た堪れなくなり、俯いて足元を注意しながら歩く振りをする。実際、注意する必要があるので振りではないが、気分的には誤魔化している様に思えたのだ。

「平氣」

アクセルは軽く溜息をつく。アクセルはスノウの手を取り、歩き出した。スノウは驚いて顔を上げる。

「一人で歩ける」

「危なつかしいからダメだ」

真つ直ぐ見返され、スノウは思わず視線を逸らす。言いにくそうにスノウは言葉を重ねた。

「だつて、アクセルも一緒に転んじゃうよ

「オレはオマエのように抜けてない」

オマエのようにそう簡単には転ばない。そう言っている気がした。スノウはアクセルの言葉が不服であったが、実際に森の中で何度も転んでいるため、反論する事は出来なかつた。スノウは大人しくアクセルに手を引かれている。

「…………」

以前はこうして繋いでいても何も思わなかつたはずなのに、アクセルに手を引かれて一緒に歩く事が、今のスノウには不思議と嬉しかつた。このまますつと繋いでいたい、とスノウは漠然と思う。だけど、それが決して叶わない事も心のどこかで理解していた。

スノウは砂時計の入つている自身の腕を見る。そうしても砂時計の姿は見えないのだが、そうせずには居られなかつた。

（早く……急がないと……）

なぜ、自身がそこまで焦つてしているのか、全く分からなかつた。

3・7 望まぬ再会

泥に足をとられつつも、アクセルとスノウは緑の村までやつてきた。

緑の村の周囲は他の場所よりも遙かにぬかるんでおり、足が泥に沈む感触が伝わってくる。村の周囲は川と言つよりも泥沼に囲まれており、板で作られた橋を渡る事でようやく村の中に入る事が出来た。スノウは重くなつている自身の足を見る。

「……靴が泥だらけ」

「まだマシな方だ。酷い時は脛の部分まで沈むらしい」
脛まで沈んだら前に進めないのでないだろうか、と内心で考えつつ、スノウは泥を気にしない事にした。

「でも、村の中はそんなにぬかるんでないね」

「この辺りの地面は他の場所よりも熱を持つているらしい。原理は分からんが、とりあえず他の場所よりは足場の確保が出来るそうだ」「ふうん？」

スノウもあまり理解する事は出来なかつたが、そういうものなのだろう、と思う事にする。深く考へても、スノウに分かる事でもない。

「さて、ここに長に話を聞くとするか」

スノウは首をかしげる。

「なんの話？」

「……こちらの話だ。オマエの気にするような事ではない」
アクセルの言葉をスノウは不服に思いつつも、口には出さない。
それよりも、スノウは先程から何かに惹かれている気がしていた。
アクセルと分かれ、村の中を探索する。

村はそれほど大きくない。煉瓦の町や水の都と比べれば、その規模は四分の一ほどだ。建つてゐる建物も両手で足りてしまつほどである。それに比例して、人も少ない。水の都のように襲われる事は

ないようだが、村人からは遠巻きに見られているのをスノウは感じていた。その視線は決して友好的とは程遠いものである事にも気付いている。

村の中を一巡して、スノウは首をかしげた。

(ここには……ない……?)

村の外に目を向けるが、それだけで奥が見通せるはずもない。(外に出ても……いいのかな?)

スノウは周囲を見回して、アクセルを探した。しかし、アクセルの姿は見当たらない。村人に聞こうにも、これまでの経験から近寄りにくかった。

「どうしよう……」

スノウは途方に暮れる。その時、背後から聞き覚えのある声が聞こえた。

「ようやく着いたぜい、カルー。ここが縁の村さ！」

「おおっ！ ここが噂の縁の村かあ。こんな場所に住もうとするなんて、変わった人もいるんだねえ。色々な意味で尊敬しちゃうよ！」「だろうだろう？ そうだ。足に着けた板はもう外して良いぞ。今ではただ動きにくいただかな」

「ほんと？ これ、ずっと動きにくかったんだよね。でも、これのお陰でボクの毛並みが汚れなかつたんだけど。それにしても、こんな物を考え付くなんて……っ！ サッすがドリトル！ あつたまあいつ！」

妙に高いテンションで会話を続ける一人。スノウは意を決して背後を見る。

そこには黒い狼と機械型の人物がいた。黒い獣型の狼には見覚えがある。かつてスノウを攫つた人物だ。隣の人物に見覚えはないが、雰囲気から察して二人の仲は良い様である。

(……とりあえず、隠れよう)

黒い狼がスノウを攫つた人物であることは分かるが、二人の雰囲気は緊張感に欠けていた。つまり、ここにいる事は全くの偶然なの

だろう。

スノウは背を向け、不自然にならない程度に早めに歩く。本当は今すぐ駆け出したいが、そんな事をして注目を集める必要もない。

しかし、スノウは気付いていない。

スノウの存在はこの世界では異質であり、同時に目立つ存在である事に。スノウが例え、何もしていなくとも人々はスノウに視線を吸い寄せられる。そしてスノウの姿を見た途端、深い嫌悪を覚えるのだ。それも今では煉瓦の町にいた頃とは比較できないほどに、強烈なものとなっている。

この村の人々がスノウに何もしないのは、偏に？双剣のアクセル？の連れだからだ。名高い剣聖の連れに手を出そうとするような無謀な人はこの村にはいない。しかし、部外者である彼らは違う。そもそも、彼らはスノウが？双剣のアクセル？の連れである事を知らない。

黒い狼はスノウが視界の端に入ると、かつてとは比較できないほどの強烈な嫌悪感を覚えた。

「なに、アレ」

周囲の温度が下がるような聲音に、スノウは身体が固まる。黒い狼の言葉に気付いた機械型も、スノウに目を向けた。機械型は表情が表面に出ないので、顔を窺う事は出来ない。どちらにしろ、スノウは背を向けていたため、顔は見ていなかつた。それでも友好的でない雰囲気をスノウは察する。

「うん。見ての通り、人型だね。カルーはどうしたい？」

スノウは背を向けたまま駆け出した。

うーん、と苛立ちながら黒い狼は考える。まともらない感情を隣の男に吐露した。

「ボク、あれ、すごい嫌い。前見た時よりも、ずっと、嫌い。なんとか分かんないけど、嫌い。なんでなんだろ。分かる？ ドリトル」「さあな、分からないな。けれど、俺たちは商売人。ということは、カモがまた目の前に現れたと思えば良いんじゃないかな？」

機械型の言葉に黒い狼は大喜びではしゃぐ。先程までの緊迫した空気は完全に霧散していた。その代わり、異様に高いテンションが復活する。

「さつすが、ドリトル！　いつにも増して冴えてるぅー！」

「だろうだろう？　もつと俺を褒めてくれたまえ」

胸を張り、更に称賛を要求する機械型の男。それを正直に受けた

黒い狼が更に褒め称えた。

そうこうしている内に、スノウは彼らの視界から消えているのだが、二人は気付かない。もともと、二人はそういう獲物を追うのが得意である。罠を張り巡らせ、効率よく捕らえるのが得意なのだ。

「よし、そうと決まれば早速狩りと行きますか」

「行きますか！」

こつして追いかけっこは再開した。

3・8 逃走

スノウは村を出て、足場の悪い森の中をひたすら走った。ぬかるみに滑りながら、時折木の根に躊躇ながらも走り続ける。スノウは恐怖に包まれていた。

(怖い、怖い、怖い)

未だかつて無いほどの憎悪の視線を向けられ、スノウは恐慌状態に陥っている。本来であればアクセルを探そうとしただろうが、その事すら思い浮かばず、ただ闇雲に森の中を走っていた。

(早く、早く逃げないと)

肩越しに後ろを見るが、誰も追いかけていない。しかし相手の姿が見えていないとしても、スノウは安心できなかつた。むしろ見えない相手に恐怖を覚え、焦燥感が増していく。

頭上の木が揺れ、スノウは咄嗟に立ち止まる。木の上から黒い影が落下してくるのを視認し、即座に踵を返した。

「あーあ、逃げられちゃつた。ドリトル、そっち行つたよー」

黒い狼は緊張感の欠ける声を相方にかける。スノウのすぐ傍からあいよー、という気の抜けた声が聞こえた。スノウは方向を変え、泥に足を取られながらも止まる事なく走る。

「うーん……逃げ足が速いねえ」

「そーだねえ。でも、ボクの足の方がずっと速いよ」

感心するようにドリトルは咳き、カルーは胸を張つた。カルーは早速自慢の足を披露しようとするが、泥に足を取られて盛大に転んでしまう。

「うあっ」

「駄目だよ、カルー。ここでは足が速い事は必ずしも利点じゃないんだからさつ。それに、焦らなくても大丈夫だつて。なんてつたつて、こっちには秘中の作戦があるんだから」

ふつ、と恰好を着けてドリトルはカルーを諫める。カルーは泥か

ら立ち上がり、輝く目をドリトルに向かた。

「そーだねつ！ ボクたちには最つ高の作戦があるもんね。あんな
人型なんてイチコロだよ！」

「そうだとそうだとも。我々に勝とうなんて、甘い考えを持とう
とする方がおかしいのさつ」

「さつすがドリトル！ カツコいい！ それにとつても冴えてるう
！」

「だらうだらう？ もつと褒めたまえ」

緊張感の欠片すらない会話を背中で聞きながら、スノウは懸命に
走る。もう相手の姿は見えないにも関わらず、まだ近くにいるよう
な錯覚をしていた。

（どうしよう、逃げられない。……アクセル）

走りながら、スノウは心の中でアクセルを呼び続けた。

その頃、アクセルは村長を探して村人々に訪ねまわっていた。クラウドの事も尋ねるが、やはり色好い回答は得られない。

（なぜ、誰もクラウドの事を覚えていない）

クラウドは緑の村の出身である。本来ならば、見知っている人が
いなければおかしいのだ。

（なぜ。なぜクラウドの事を誰も知らない）

最後の頼りは、この村の長である摸だけだった。

村の人々から、村長は留守だと教えられている。どこに向かつた
かと聞けば、一様に首をかしげていた。

「あの人は唐突に動くからなあ」

苦笑い気味に村人たちは答える。

「そういえば、珍しく仕事するぞー、つて張り切ってんだか張り切
つてないんだが、よく分かんない事を口走ってたな。村長が張り切
る時は大抵、口クでもない時だから気をつけろよ」

どういった人物なのか面識はないが、それだけでも厄介な人物だ
と知れた。

アクセルは溜息をつき、村の中を見回す。しかし目的の人物は、見つけられなかつた。その辺りを散策しているのだろう、と特に気にも留めない。しかし村を一周してもスノウの姿が見えない事を怪訝に思う。

「スノウ？」

アクセルはなぜか、その事に強い不安を覚えた。

走つり回つていると唐突に視界が広がり、スノウは咄嗟に立ち止まりかける。しかし、立ち止まるのは危険だと思い留まり、そのまま走つた。

視界の先には沼があつた。もつとも、沼というには水が青く澄んでおり、どちらかというならば池のように思える。池の中央には台座があり、何かを捧げているようだが、何を捧げているかはスノウの位置からは分からなかつた。しかし、それを視界に入れた途端、スノウは本能的に立ち止まる。

「…………？」

初めて見るはずなのに、台座の上にある物を知つてゐる気がした。スノウは周囲を見回し、唯一台座に向かう事が出来る橋を見つける。スノウは追われていても関わらず、橋に向かつて駆け出す。

冷静に考えるならば、それは自殺行為といって差し支えなかつた。台座に向かうための橋は一ヶ所しかない。つまり、自ら退路を断つとの同義であつたのだ。

「…………やっぱり」

スノウは台座の目の前まで歩き、その上にある物体を見て納得する。

台座の上にはスノウが惹かれてやまない水晶があつたのだ。

スノウは水晶に手を伸ばすが、横から何かが衝突し、水晶は池の中へと落ちてしまう。

「！」

スノウは咄嗟に手を伸ばしたが、届かなかつた。

「ふははははっ。どうだ、俺の口ケットパンチは！」

スノウは声のする方に目を向け、台座に落ちている腕を発見する。それを手に持ち、思わず観察してしまった。

「…………」

なぜ腕がここにあるのだらう。

そんな事を考えていると、笑い声が響き渡った。

「どうだ、素晴らしいだらう。この俺の腕！ 完璧な機能美を備えた、とってもスッマートな腕だらう。分かつていて、分かつていて。無理に口にする必要はない。なんと言つても、口にする事すら控えてしまつような機能美を持っているのだらう！ 仕方ないだらう！」

「そうだ！ ドリトルの腕は最っ高にスッマートでカッコいいんだからな！」

スノウは妙なテンションを持つ一人に、どう反応するべきか、非常に困つた。

(とりあえず、この腕、どうしたらいいんだらう)

スノウは律儀にも腕を手に持つたまま、困惑していのだつた。

マーティは森の中を飛び回った。木の枝から木の枝へ移り、地に足を着ける事なく飛び続ける。その様は猫の様にしなやかで、身軽さを感じさせた。

しばらく飛び回り、一気に視界が開ける。森を抜けたのだ。それと同時に、視界一面の沼が広がる。

(遅かつたかあ……)

マーティは眉を顰め、周囲を見回し、ようやく目的の人物を発見する。その人物は巨大な沼の前で、うつらうつらと頭を揺らしていた。

「いた！ 猫、あんたねえ……」

マーティは猫に話しかけようとして、猫が寝ているのに気が付く。

マーティは顔を顰め、ポーチからナイフを取り出す。

「ひ、と、の、は、な、し、を、聞けーっ！」

マーティは木の上から猫に向け、ナイフを投げつけた。その瞬間に猫は目を覚まし、ふわふわとマーティの元へと近寄った。猫の足の部分はワタ菓子のような雲となつており、常に浮いているのだ。

「あー、マーティー。久しぶりー」

猫が動いたため、ナイフは大きく外れる結果となる。もつとも、マーティは始めから当てるつもりはなかつた。猫はふわふわと浮遊した状態で近寄り、マーティの目線と同じ高さまで浮き上がる。

「ちょっと、猫。あんた、自分が何したか分かつてんの？」

マーティは木の上で腕を組み、猫を睨みつけた。猫は眠そうに目を擦りながら首をかしげる。

「んー……？ 神殿に誰も近寄れないよつとしたよ。ちゃんとお仕事したんだよー。すごいでしょー」

「すごいとか、すごくないとか、そういうのじゃなくて。こんな事したら誰も神殿に入れないじゃしない！ 一体あんた、何考えてんの

？」

マークは言葉に驚いたように目を丸めた。もつとも、いつもより目が開いたという程度でしかない。

「えー？ いけないのー？ だつて、これで問題解決じゃないかなあ？」

「全つ然、解決してないつ！ むしろ、これじゃあ問題が増えただけじゃん！ これ、一体どうすりつもり？」

「んー？ そうなのー？」

マークは猿を睨みつけるが、猿は気付いていない様である。不思議そうに首をかしげていた。

「？んー？ そうなのー？？じやなくつて！ 言つたでしょ、参加者がいるつて。そいつが入れなくなるじやない。一体どうするつもり？」

「あー、参加者いたんだねー？」

話が通じない、とマークは肩を落とす。話自体は通じているのだが、会話の内容にかなりのズレがある。

「あのさ、人の話、聞いてた？ 集まりでその話、してたでしょ。確か、前回も前々回もその話、したはずだよね？ なんで覚えてないかな……」

「寝てたー」

猿は片手を上げて答える。マークは大きく息をついた。

「あんたって……」

マークが顔を上げると、猿は珍しく顔を顰めている。マークは木の幹にもたれかかりながら、猿に尋ねた。

「どうしたの？」

猿は浮かない顔をしたまま、呟くように答える。

「んー……侵入者？ 落ちた？ えー、あそこ、深いのにい。あー

……めんどくさいなあ。でも、やらないとダメなんだよねえ……」

猿はマークを見る事なく、飛び去ってしまう。マークは怪訝に思いつつも、猿の後ろをついて行こうとして足を止め、背後を振

り返る。そこには視界一面の沼が広がっていた。

「……この沼、さすがにあたしでもどうしようもないよ。ジルに任せ
せるしかない」

後で遠回しに嫌味を言われるであろう事を考え、マーティは大き
く息を吐いたのだった。

3・9 最後の水晶

アクセルはスノウの姿が見えない事に不安を抱き、村の外へと足を向けた。しばらく歩くと、つま先の部分が深く沈み込んだ足跡や、何かが滑った様な跡を発見する。その足跡は一つではなく、三種類あつた。アクセルは焦りを覚え、滑らないよう注意しながら足跡を追つて走る。

足跡を追つていくと、唐突に視界が開いた。目の前には大きな池があり、その中央には台座のようなものが捧げられている。台座の近くに見慣れた人影を見つけた。

「スノウ！」

「！ アクセル」

スノウはなぜか、途中で切れた腕を持つている。スノウからは困惑と、焦りを感じられた。

「スノウ、一体どうしたんだ」

スノウは困ったように切れた腕へと目を向け、顔を上げてある人物へと視線を送る。

そこには怪しい二人組がいた。機械型と、狼のような獣の姿をした人物である。獣型は珍しいため、アクセルは少し驚く。この世界では獣型は滅多にいない。余程の運がない限り、姿を見る事すらないのだ。

「なんだ、お前！」

アクセルの視線に気付いた狼が、歯を剥き出しにしてアクセルを威嚇した。隣の機械型の人物が、背を撫でて狼を宥める。

「カルー、やめるのだ。腰に差している一振りの湾曲刀。あれが本物であるのならば、あの竜人型の名前はおそらくアクセルだ。？双剣のアクセル？と言う名を聞いた事があるだろう、カルー。我らでは到底太刀打ち出来る相手ではない」

？双剣のアクセル？という言葉に、カルーは身体を震わした。

「あの？双剣のアクセル？……。たつた一人で百人の盗賊団を壊滅させたっていう、あのアクセル？」

「……あの時は一人だつたがな」

アクセルは眩き、片方の湾曲刀を抜く。そのまま切っ先を一人に向けた。

「何の用かは知らないが、去るがいい。それとも、やつ裂きにされるのがお望みか？」

「人は勢いよく首を振る。

「ま、まさか。そんなのご免だよ」

「おう！ だが、俺の腕は返してもらうからな！」

機械型の人物はスノウを肘から先の無い腕で指す。スノウは驚き、手元にある腕を眺めた。

「……返します」

スノウは橋を渡り、機械型の人物に近寄つて渡そうとする。アクセルはそれを片手で押し留め、スノウから腕を奪い取つた。それを二人に向かつて投げ渡す。足元に落ちた腕を拾い、それをそのまま腕へと装着する。

「これで用事は終わつたはずだ。さつさとどこかへ行くがいい」

二人は顔を見合わせ、そのまま走り去つて行つた。

アクセルは湾曲刀を鞘へと戻す。スノウに向き直り、アクセルは大きく溜息をついた。

「なぜ、こんな厄介な事に巻き込まれた」

「……好きで巻き込まれた訳じゃない」

スノウは顔を逸らし、項垂れる。

「オマエは珍しいんだ。もっと周りを警戒すべきだ。さつきみたいにホイホイ近付くのは感心しない

「……そんな間抜けじゃない」

「いや、抜けている」

スノウは眉を顰めるが、分が悪い事は理解しているため、それ以上は言わない。

スノウはふと、思い出したかのように池に近寄る。アクセルは咄嗟にその襟を掴んだ。一瞬首が絞まり、スノウは恨めしげにアクセルを見た。

「なに」

「あまり近寄るな。落ちる」

「落ちない」

スノウはアクセルの腕を襟から外し、再び池へと近寄る。その時、頭上を何かが通過した。そのまま田の前に現れ、スノウは思わず身を引く。

それは猿だった。獣型なのだろう。猿そのものの姿をしている。しかし、その足元には本来あるべき足が無く、代わりに雲で支えられていた。ふわふわと雲に乗りながら、眠そうに目を擦る姿を見て、アクセルは緊張を解く。

「んむうー？ あれを落としたのはキミなのかなあ？」

猿は宙に浮いたままスノウを見て、首をかしげる。

「何の事だ」

「んー、ちょっと待つて」

猿は大きく息を吸い、そのまま池の中へと潜つていいく。突然の事に、一人は呆気にとられた。

スノウはすぐに池に近寄り、そのまま中を覗き込む。いくら透明度が高いと言つても、奥まで覗き込む事は出来ない。

「……大丈夫なのかな」

「さあな」

不安そうに呟くスノウに対し、アクセルは冷めている。

「ちよつと、猿。待ちなさいって、言つてるでしょー！」

聞き覚えのある声に二人は背後を振り向く。そこには額に汗を浮かべたマーティがいた。

「あ、マーティ」

スノウの顔に笑顔が浮かぶ。マーティはスノウの表情を見て、顔を引きつらせた。

「なんであなたがここに……あ、そつか。ここがそうだっけ
マーティは周囲を見回し、目的の姿が見えなかつたのか、大きく
肩を落とす。

「ねえ、あんたら猿を見なかつた？ なんか雲の上に乗つかつてて、
寝むそうな顔してる奴なんだけど」

「それならその池の中だ」

アクセルの言葉に、マーティは眉を顰める。
「は？ 池の中？」

「うん。多分、何かを拾いに行つたんだと思つよ」
マーティはそういう事か、と軽く息をつく。

「……って事は、最後の一つ触つたわけ？」

「最後の一つ？」

スノウが首をかしげると、マーティは軽く舌打ちをした。

「まだなのね」

唐突に水飛沫が上がり、水晶を手に持つた猿が現れる。スノウたちにも盛大に水飛沫がかかつた。不思議と、猿の乗つている雲は一切濡れていない。

「もつとまともな現れ方は出来ない訳？」

「んー？ 何の事？」

猿は身震いをして身体の水氣を取り除く。その水が三人に派手にかかる。

「あんた、わざとやつてんの？」

「んー？ 何の事？ もつと分かりやすく説明してくれないと、分
かんないよお」

「あんたねえ……」

猿は眠そうに目を擦り、その拍子に手に持つていた水晶を落としま
てしまう。

「ちよつ、あんた。せつかく拾つてきたのに、何してんの！」

再び池の中に落ちようとする水晶に、スノウは咄嗟に手を伸ばす。
水晶を腕に抱えた途端、スノウの意識は盛大な水音と共に闇に落

ち
た。

「スノウ！」

アクセルは手を伸ばすが、スノウは激しい水音と共に池の中に消える。アクセルは反射的に飛び退いて、水飛沫を避けた。

「あちやー……もしかして、これでの子はおしまい？　いや、でもな……」

マーティは頭を抱え、恨めしげに猿を見る。

「ちょっと、猿。あれ、さっさと拾つてきなさいよ」

「むー……やだ」

猿は眠そうな目を、更に細めて拒絶の意思を表す。マーティはそれに呆れた様な視線を投げた。

「今回の件については、完全にこっちの過失でしょ？　だつたら、それは修正しないといけないじゃん。嫌がる権利はないんだよ」「違うよー。始めて落としたのは、あの白い子だよ。だからあのまでいいんだよー」

マーティは分かりにくい猿の言葉を咀嚼する。

「……つまり、落としたのは元々あいつだから、こっちは悪くないって事？　そんでもって、本人に拾わせるために、わざわざ落ちてた場所に戻したって訳？」

「そうだよー。軌道修正しただけー」

猿は気の抜けた笑みを浮かべる。

「……スノウはどうなる

アクセルの地を這う様な言葉に、二人の視線が集まつた。

猿は何でもないように答える。

「ダメならダメで、それも運命。這い上がつてくるなら這い上がつてくるで、それもまた運命。本当は、こっちから干渉できないんだよー」

マーティは軽く溜息をついた。

「猿、あんたの言い方分かりにくい。……とりあえず、あたしたちは手出しえきないって事。どれだけ助けたくとも、手を出す事は許されない。そんな事したら、あたしら一気にこれだつて」

マーティは自身の首を手で横に引く。

「だから、今の状況での子を救えるのはあんただけ。その判断は好きにすれば良い。　ああ、先に言つておくけど、浮かんでくるのを期待しない方が良いよ。あの水晶、重いから。

でも、あの子はワタ属だから、気にしなくても勝手に出てくるとは思つけどね。溺れる心配もないし」

マーティは水面を覗き込む。

「あたしらに出来るのは、見守る事だけ」

「以前はスノウを追いかけていたのにか？」

アクセルの言葉にマーティは身体を起こし、苦笑する。

「あれは上からの許可があつたからよかつただけ。普通はアウト」「焦らなくても結果は出てくるんだから、気長に待つていれば良いよー」

猿はどこからか湯呑を出し、のんびりと中身をすすつた。アクセルは眉を顰める。マーティは頷いて、猿に同意を示した。

「そゆこと。まあ、あたしたちもあんたに干渉出来ないし、あんたは好きにしたら」

「オマエたちはここでスノウを待つつもりなのか」

アクセルの言葉にマーティは笑みを浮かべる。

「いけないの？　でも、これで最後なんだから、最期まで見るつもりだけど」

「最後？」

猿が湯呑を口から離し、ほっと息をついて答えた。

「水晶は全部で三つ。あの子は一つ触ったから、これで最後。そして、ここから先に進むなら、あの子の役割は終わる。進まないなら、静かに暮らせる。だけど、それを決めるのは本人だよー」

「あたしの勘だと、あの子は進むね。例えそれが」

破滅への道だとしても。

アクセルはマーティを睨みつけた。

「どう言つ意味だ」

「言葉通りだよ。どっちにしても、あの子の時間は残されてないんじゃないかなあ」

マーティは猿へと視線を向ける。猿は首をかしげた。

「どうだろうねー。分かんない。でも、人型は普通よりも短めに設定されるから、可能性は大だねー」

「……先程から、何の話をしている」

猿はアクセルに視線を送る。猿は口の端を持ち上げた。

「知りたい？」

「なにを」

「この世界についてだよー。知りたくない？」

マーティは眉を顰めた。

「ちょっと、それはさすがに抵触するんじゃない？」

「いいじやーん。少しくらいなら平氣だつて分かってるし」

その言葉にマーティは目を見張る。

「まさか、あんた……」

「うん。たまに教えてる。だから、どこまで大丈夫かー、とか知つてるよー」

「あんた、死にたいの？」

マーティの言葉に、猿は首をかしげた。

「どーして？ 最初から生きていいないのに、死ぬ事は無いよー。マーティとジルは別だけど、こっちはただの人形に戻るだけー。問題ないしー」

マーティは顔を歪め、一人に背を向ける。

「…………話が終わつたら、呼んで。あと、あの子が出てきても呼んで」

「りょーかい。また後でね、マーティ」

マーティは背を向けたまま駆け出し、どこかへと去つていいく。ア

クセルはマーティの背を見送った。

猿は首をかしげ、アクセルを見る。

「なら、話をしようか。なにが聞きたい？　どこから知りたい

？」

「……オマエは、一体なにを知っている」

猿は湯呑をすすつた。

「ゼーんぶ、とまではいかないけど、大体は知ってるかなあ。消耗

品だけど、それなりに大切にされてるからー」

「……オマエたちは、何者なんだ」

猿は細い目を更に細め、微笑んだ。

「何者か、知りたい？　そうなると、自然と君自身の事にも関わってくるけど、知りたい？」

「遠回しな言い方はやめる。斬るぞ」

アクセルは湾曲刀を抜いて、猿の首元に突きつける。猿は暢気に欠伸をもらした。

「短気だなー」

なら始めよっか、と猿は語り始めた。

4・1 獣の説明

「この世界は元々、神様の気まぐれで造られたんだ。ん？ 神様って何かって？ そこから始めるの？ すごい長くなるよ。……あ、やっぱりいい？」なら続けるよ。

それで、ここにいる住人たちには始めから制約が科せられるんだ。具体的には以前の記憶がないとか、この世界から消える時は世界から存在していた事を抹消されるとか。代表的な例はそんなの。他にももっとたくさんあるけど、あまり関係ないし、今回は全部飛ばすね。

「という事は、クラウドの事を誰も覚えていないのは、それが理由なのか？」

そうなるね。ああ、でも例外があつて、その人物の遺品を持つてると忘れないんだよー。君の場合、その武器だね。でも、違和感たっぷりの物を持たせる訳にもいかないから、最適化されるんだよ。君の場合は湾曲刀といった具合に。

納得したー？

「もう一つ。クラウドがいた時といなくなつてからの通り名が変わつているんだ。その理由はなんだ？」

それは当然だよー。世界にいなかつた人の通り名があるなんて、おかしいでしょ。だから、それも都合が良い様に変わるんだよ。つまり、一人をあらわしていく通り名なら、一人分になるね。君の通り名がどう変わったかなんて、どうでもいいけどー。

「……スノウに時間が残されていないというのは」

言葉通りの意味ー。人の形に近ければ近いほど、寿命は短い。だから人型は少ないんだよ。それに加えて、人の形に近いという事は、持ち主に愛されていたって事。だからー、他の人たちからは嫌われるよねー。だって、まるで自分たちが愛されなかつたみたいに思えるんだもん。

「持ち主？」

「そー、持ち主ー。けど、ここはそれ以上言えないね。

「なら質問を変えよう。あの水晶は一体何だ。役割を果たすとは、どういう意味だ」

うん。じゃあ、まず水晶からね。

水晶つてのは、記憶の断片を思い出すための物だよー。あれを全部触る事で、記憶をほとんど全部取り戻せるんだ。

「記憶？」

そー、以前の記憶。この世界に来る前の記憶ー。それがないと先に進めないんだよー。

「先？」

それは水晶を全部触つて、資格を持った人にしか教えられないな。だから、教えなーい。

それで、役割を果たすってのは、君たちがこの世界にいる存在理由みたいなものー。これも教えられないね。まあ、水晶を全部触れば自然と分かるんだけど。

「その先に破滅があるという事か？」

破滅と取るか、幸福と取るかは本人次第。だつて、それが君たちの本来の存在意義だもん。だけど、これに関しては果たす人は滅多にいないよねー。仕方ないけど。

「どういう意味だ」

言葉通りだよ。この世界にいるほとんどの人は存在意義を果たさない。別にそれが悪いとは言わないよ。だつて、誰かのために命を投げ出すなんて無理だよ。

「命を投げ出す？」

そ、命と引き換えに願いを果たす。それが君たちの本来の役割。

「役割……」

そーそ。役割ー。本来、この世界はそのために造られたんだよ。ある小さな命すら持たない、小さな意志の願いが始まり。気まぐれに聞きいれた神様が、彼らのために世界を造った。その時も役割を

果たす人は少なかつたらしいけどね。

「……到底、信じる事が出来ない話だな」

猿はふわふわと浮かびながら眠そうに目を擦つた。

「そうだね。信じられないよねー。役割とか命とか、正直なにそれつて感じだよねー」

「……お前たちは何者なんだ」

猿は気の抜けるような笑みを浮かべる。

「ぼくたちは、この世界の監視者。神様から役割を『えられ、それを見守る者。たまに調整もするんだよー。今回の事とかそうだよね。あの子は、普通の人よりも前の記憶を覚えてるからー、少し妨害しちんだー。……まあ、記憶があるのは急ぎだったからってのもあるけど」

「監視者、か。それにしても疑問は尽きないが、それよりも急ぎとはどういう意味だ」

猿は目を細める。

「むふふ。普通の人とは違つて、重要度が高いんだよね。だからあの子は自力で、強引に捻じ込んできたんだよ。だから、記憶の調整が出来てないんだ」

「答えになつていない」

「詳しくは言えないよー。それは本人に聞くんだね。一こちらからは何も言えない」

アクセルは猿を睨みつけるが、猿は気にした風もない。

「……さて、あの子は今、どんな夢を見てるんだろうね」

*

「いつまでも人形を持つているなんて子供っぽいと思わない？」

友人の言葉に少女は首をかしげる。

以前よりも少女は成長しており、どこか雰囲気も変わっていた。

髪が伸びた、という事もあるのかも知れない。少女は部屋に友人を招き、お菓子をつまみながらお喋りをしていた。

「そうかなー」

「そうだよ。だつて、もうすぐで中学生なんだよ。いつまでもそんなので遊んでたら馬鹿にされないかな」

少女は考え、棚の上にいるこちらに目を向けた。しばらく向き合いい、視線を逸らす。

「別に良いんじゃないの？」

「えー、ヤダよ！ 中学生だよ？ もう、小学生じゃないんだから！」

うーん、と少女は考える。

「確かに中学生にはなるけど……それって、あまり関係ないんじゃない？」

「えー！ 全然違つよっ！」

少女は友人の言葉にふうん、と相槌を打つた。反論するのが面倒になつたのだろう。少女は先程とは違い、友人をどこか一步引いた場所から眺めているように感じる。

「別に好きな物は好きな物のままで良いと思うけど……」

少女の呴きを、友人が聞き入れる事はなかつた。

4・1 猿の説明（後書き）

中途半端ですみません。クライマックスに突入しています。

世界の説明についてですが、作者が失念して書き忘れている事が
あります。なので、もし変だったら教えてください。

4・2 あの日の記憶（1）

友人を見送った後、少女は部屋を片付け始める。お菓子の食べ力が落ちていいのを見つけると、どこからか掃除機を運んできた。少女が電源を入れると、掃除機は唸り声を上げながら勢いよく食べカスを回収していく。

以前、私はあれに吸われた事がある。計り知れない力を感じた。吸いつかれている時は全身の毛が抜けるかと思った。出来れば、もう一度と吸われたくは無い。始めこそは少女も面白がっていたが、すぐに飽きたようでかなり安堵した記憶がある。

「あー、暇」

少女は片付けを終えると、ベッドに倒れ込んだ。そのまま私を掴み、いつものように私を投げて遊ぶ。

本来の使い方とは少し違うのだが、少女が良いならばそれで良いと思う。もつとも、暇は潰せていないようだ。その証拠に今も暇だ暇だ、と咳き続けている。

いくら身体が大きくなろうとも、中身はあまり変わらないようだ。
「早く誰か帰つてこないかな」

少女が投げる向きを変えると、私は壁と仲良しになつた。そのまま力なく床に落ち、私は少女を眺める。少女もこちらを見つめ、しばらくして私を拾い上げた。

そのまま再び、お手玉のように投げ始める。少女の顔はつまらなれそうで、いかにも暇潰しとして利用しているといった具合だ。
(私が本物であれば、違つたのだろうか)

「……むー、暇」

不意に少女は投げる手を止め、少女は私を受け止める。そのまま立ち上がり、伸びをした。

「そうだ。散歩でもしてこよっかな」

視界に入る時計はすでに七時を回っていた。季節は冬で、日が昇

つている時間は短い。外はすでに闇に包まれているはずだ。おまけにこの地域の街路灯は古いようで、点いていてもあまり明るくない。そのためか、車との出会い頭の事故が多く、子どもが一人で出歩くには危険だった。

しかし家の中には少女を諫める者は誰もいない。それも当然である。家には少女しかいのだから。そして当然、喋る事の出来ない私が引き止められるはずもない。

「よし、行つてこよ」

少女は私を窓の傍に置くと、壁にかけてある上着を羽織り、マフラーを首に巻きつける。手袋に手を入れると、外に出る準備はあつという間に整う。暇を潰せるという事もあり、少女は先程よりも気持ちが明るくなっているようである。

「それじゃ、留守番よろしく」

背を向ける少女を私は見送る事しか出来ない。

少女が部屋の扉を開けて出て行くと、しばらくして玄関の閉まる音が響いた。

少女が出て行つて、どのくらいの時間が経つただろう。私はなぜか胸騒ぎを覚えていた。

（早く、帰つてこないかな）

胸騒ぎの原因を確認する事は出来ない。なぜなら、私は自分では動く事が出来ないのだから。私はその事を受け入れてているつもりだったが、今はその事を歯痒く思つ。

いくら心配事があつても、受け入れる事しか出来ないのだから。時計の秒針が、暗い部屋の中に響き渡る。普段は気にした事もなはずなのに、その音がいやに耳についた。

（早く、早く帰つてきて）

サイレンの音が、どこからか聞こえてくる。その事に更に焦燥感を覚えた。

玄関の鍵が開く音がして、扉が開く音が続く。

「ただいま。遅くなつてごめんね。すぐにご飯作るから」

帰つて来たのは少女の母親の様である。廊下に足音を響かせ、部屋の扉を開いた。しかし当然の事ながら、部屋には誰もいない。

「あれ、……？ 寝てるの？」

少女の名前を呼び、母親は部屋の電気を入れる。母親は部屋の中を見回し、少女がいない事に気付くと踵を返す。

少女を呼ぶ声が響く。

しかしいくら探しても少女は見つからない。

当然だ。家の中にはいないのだから。

母親もその事に気付いたのだろう。知り合いで電話をかけているのか、話し声が聞こえてくる。心当たりを探しているのだろう。

「本当にどこに行つたのかしら」

母親は廊下を歩きながらコートを羽織る。外を探しに行くのだろう。その時、電話のホール音が響いた。母親は急いで電話を取り行走る。

「はい」

『とつ……すみま……ん。』『ち……院です。……さんの……者の方ですか……』

途切れ途切れに声が漏れ聞こえてくる。母親が相槌を打つと、絶句した。

「……車に、轢かれた……？ ……それは……本當ですか？」

ようやく聞こえてきた声は震え、いつもよりも遙かに弱弱しく聞こえた。そこから、私は胸騒ぎが当たつたのだと理解する。
(車に轢かれた?)

以前、少女と一緒に見たテレビで見た映像を思い出す。
車に轢かれた人の姿。

力なく横たわるその姿に、少女がブレて重なつた。

(嫌だ!)

私は必死に身体を動かそうとした。けれど、身体は私の意志に反して動こうとはしない。

(動け！ 動いて！ 動いてよ……！)

そういう物でない事は理解していても、決して動く事は出来ない。なぜなら私は本来、あるはずのない意志なのだから。

どれほどもがいたのかは分からぬ。私はなぜか暗闇に立つていた。

「ここは……？」

周囲を見回すが、一面の暗闇に覆われている。いや、ぼんやりと少女の部屋が透けて見えた。そして、私は自分が動ける事に気が付く。

考える前に身体が動いていた。

(早く！ 早く！ もっと早く！)

私はひたすら走る。道を走り、家中を突っ切り、少女の元へと一直線に駆けた。

4・3 あの日の記憶（2）

少女は白い部屋の中にいた。白衣を着た人々が少女の周囲を駆け回り、懸命に処置を施している。私はそれを遠くから眺める事しか出来ない。医師たちに踏まれそうになりながら、ベッドに近付く。私はベッドをよじ登り、ようやく少女を見る事が出来た。

呼吸器を取り付けられた、血の氣の無い顔。弱弱しい呼吸が、今にも止まりそうだった。腕には管が通され、点滴がうたれています。

私は少女の枕元へと移動し、少女に恐る恐る手を伸ばす。

しかし、触れる事は出来なかつた。何度触れようとしても、実体がないかのようにすり抜けた。自身の顔が歪むのがわかつた。

「なんで……なんで、触れないの……」

いつも少女が私を触るように、私も少女に触れたかつた。

こんな状況にも関わらず、少女に触れて慰める事が出来ないのが悲しかつた。

「もし、私が本物だつたら……」

人形ではなく、本物の生き物であれば少女を止める事が出来ただろつか。

ふと顔を上げると、正面にある黒いモニターには自身の姿が映つていた。

短い毛に覆われた、白く細長い胴。小さな手足。白く長い尻尾の先は、僅かに黒い。

オゴジヨ、と呼ばれる生き物である。

ただし、紛い物であつた。

それを示すかのように、青い目は透き通り過ぎている。ガラス玉なのだ。

『空っぽの目』

少女は昔、私の事をそつ評していた。

感情の無い、無機質な目。決して生きているモノではない目。そ

れは仕方のない事だ、と常に自身に言い聞かせてきた。だが、もう限界だった。

「私の所為だ……私があの時、止められたらこんな事にはならなかつたのに……」

悔しかつた。

そして、それ以上に憎かつた。

何も出来ない自分が憎くて憎くてたまらなかつた。

「あ……あ、あああああああああああああ！」

私は壁に自らの頭を打ち付けた。何度も何度も繰り返し、打ち付ける。

痛みは無い。当然だ。私は痛みを感じる生き物ではない　いや、生き物ですらない！

「なんで……なんでなんで！　なんで私は人形なんだ！　なんで、なんで助けられないんだ！」

そもそも、なぜ自分はこのよつた意志を持っているのか。生き物ですらないのに、このよつた意志は必要ないはずだ。なぜ、なぜ自分は意志を持つていて！

（私なんか、壊れてしまえばいいんだ！）

流れるはずのない涙が流れる。しかし、それが頬を濡らす事は無い。

（私が、あの子の代わりに壊れればよかつたんだ……！）

それから私はありとあらゆる自傷行為に走つた。

だけど、どれだけ身体を搔き築つても、強く噛みついても、勢いよく引っ搔いても、身体を打ちつけても、決して痛みは感じない。情けなかつた。

これでは少女の代わりになる事など出来ない。

「いつまでそうしているつもりだ」

唐突に響いた声に、私は顔を上げる。しかし、そこには何もない。

「…………？」

「君に、一回だけチャンスをあげよう

何かが割れる音が響き渡ると、景色が一変した。辺り一面が暗闇に包まれたのである。部屋の中を駆け回る医師たちも、看護師も、部屋も、少女すらも消え失せた。私は焦り、少女を探す。手探りで探しても、一向にも見つからない。

「慌てなくて良い。その必要もない」

「だれ、あの子をどこにやつたの？」

私の目の前に、白い人が現れた。

「……………私？」

姿が全く違うにも関わらず、それは自分であると瞬時に理解する。その事に、もう一人のわたしは微笑んだ。

「そう。わたしはあなた。あなたは私」

わたしは私を抱き上げる。姿は違えど、わたしは私とよく似ていた。

「よく聞きなさい。あなたにチャンスを与えるから」

私に言い聞かせるように、わたしはゆっくりと喋り出す。

「あれは、まだ起きていない。でも、これから先、近い未来に起こる出来事。だから、あの子はまだ無事よ」

「本当？」

「ええ、本当よ。だけど、あれは必ず起ころる未来」

わたしはそこで言葉を切り、真っ直ぐに私を見つめた。

「あの子を、救いたいとは思わない？」

私は即座に頷く。腕の中で立ち上がり、わたしを真っ直ぐに見る。「当然。絶対、助ける。私はどうなっても構わない。絶対、助ける」「そう」

わたしは腕から私を下ろす。私はわたしを見上げた。

「あの子を助ける事が出来るかもしないし、出来ないかも知れない。それが出来るかはあなた次第。あなたに与えられた時間は、かなり限られている。成功しても、失敗しても、あなたはそれでおし

まい。

もし「こりで留まる」と囁つなら、引き留めはしない。それも一つの選択。留まるのであれば、あなたはこのまま何事もなく日常を過ごす事が出来る。

「ここまで聞いた上で、あなたに問います」

生きますか？ それとも行きますか？

私はわたしを見上げた。わたしも私を見つめている。

「そんなの決まってる。行くよ。私は、あの子を助けるんだ」

その手が不意に、持ち上がった。

「なら、行きなさい。手遅れにならない内に、あなたがあの子の事を忘れない内に」

私は即座に駆け出した。振り返る事なく真っ直ぐに駆けて行く。その背をわたしがどこか寂しげに見送っていた事にも気付かず。

「さよなら、わたし」

その声が、私に届く事はなかった。

スノウが田を開けると泥で濁つた水が田に映つた。周囲を見回しても、水ばかりしか見えない。頭上を見上げるが、暗闇に沈んでいるため見通す事は出来なかつた。そのため、どれ程の深さなのか全く見当もつかない。

(溺れる心配は無いけど、ずいぶん水吸っちゃつてゐるな)

腕を持ち上げると、纏わりつくような重さを感じる。軽く溜息が出てしまつた。

とりあえず足場となるような場所を探そうと思い立つ。水を吸つた重い足を進めると、何が足に当たつた。しゃがんでそれを拾い上げると、それは丸い拳大ほどの水晶だつた。とりあえず、持つていく事にする。

歩く度に足元の砂は、砂漠の砂と同じように纏わりつく。ただ歩く速さは、砂漠を歩く時よりも遙かに遅かつた。水中であるため転ぶ事は無いが、なかなか思つよつに進まない足に苛立ちを覚える。

(こんな事をしている場合ぢやないのに………)

スノウが地面を勢い良く蹴ると、前に飛び上がつた。そのままふわり、と前へ着地する。その距離は、一步にしては長かつた。

「…………」

普通に歩くより、飛びながら進んだ方が早いようである。そのまま跳躍しながら前へと進む。しばらく進んで、ようやく端へと辿り着いた。問題はここからである。

(どうやって登るか………)

それは絶壁、といつて差し支えがなかつた。試しに数歩登つてみると、傾斜が全くない。かねつじてあるテロボンの部分を足場にするしかないようだ。

(登れるかな?)

助走をつけて登るとこう方法を思いついたが、思つよつて動かない

水中の中ではあまり意味がない事に気付く。結局、飛びながら登る事にした。

片手で出っ張った部分を掴み、身体を縮めて壁を蹴りあげる。しかし、なかなか上手くいかない。時折、滑つて落ちてしまう。

(せめて身体を乾かせたら)

ワタ属は文字通り、身体の中にワタが詰められているのだ。そのため身体は軽く、本来であれば水に浮く。しかし長時間、水に浸かっていると水を吸ってしまい、身体が重くなつて沈むのだ。そうなると浮かぶ事は難しい。

そんな事を考えていると、上から何かが勢いよく落下してきた。着地する時に激しい砂埃が立つた。スノウは首をかしげてそれを見る。

それは唐突にスノウの腰を掴み上げ、そのまま勢いよく地面を蹴りあげた。しかし、相手も相当重いらしく、すぐに落下が始まってしまう。しかし相手は即座に何かを壁に突き刺し、それを足場にして強く蹴りあげる。腕を上げ、再び足場にした物を手にすると、同じように壁に突き刺す。先程と同様、それを足場にして上に跳ぶ。それを何度も繰り返し、ようやく地上に出る事が出来た。

(お、重い……)

スノウはあまりの身体の重さに、池から出る事が出来なかつた。相当、水を吸つていたらしい。水の中の方がまだ動ける。

なんとか上半身を池から出して横たわつていると、身体を持ち上げられた。そのまま池から引き上げられ、なんとか地面に座る事も出来ずに、そのまま地面に倒れ込む。

「うわー、ずいぶん吸つてるねえ。身体が変形してないのが不思議。踏もうか？ 足ないけど」

重い頭を持ち上げると、そこには雲に乗つた猿がいた。

「平気。しばらくしたら抜けると思うから」

スノウが答えると、呆れた様にマーティは溜息をついた。

「そんなに吸つてたら、当分動けないじゃん。特別に、裏技でとつ

てあげるよ

「裏技？」

マーティは手をかざすと、スノウは一気に身体が軽くなるのを感じた。驚いて身体を起こすと、マーティの腕に水が渦巻いていた。

「……ほんと、よくここまで登つてこれたね」

マーティは苦笑いを浮かべながら空いている手を池につける。マーティの身体を伝つて水が池へと戻つて行つた。

「すごい……」

「まあね」

マーティは上機嫌に答える。

あつという間にスノウの身体は軽くなつていった。もう普通に動く事が出来る。

「ま、多少残るのは大目に見てよ」

「うん。だいぶ軽くなつたよ。マーティ、ありがとう」

スノウがお礼を言うと、マーティは顔を逸らした。

「別に、大した事じゃないし」

「職務違反だけどねー」

マーティは喉を鳴らす。

「これくらいは許容範囲！ それに、この水晶落としたのはこの子じゃないし。ちゃんと確認しなよ。余計な手間をかけさせちゃったじゃん」

「大丈夫大丈夫。若い内は苦労を買つてもしろつて言うし……」

「全然関係ないから、それ。第一、ここに年齢なんか無いし」

そうだね、と貌は納得した。マーティは呆れたように貌を見る。

「スノウ」

アクセルの声にスノウは振り返つた。

「あ、アクセル。さつきは」

スノウはアクセルの表情を見て、言葉を止める。

スノウは困惑していた。なぜかアクセルは泣きそうな顔をしていたのである。

「もう、勝手な真似はするな」

いつものように淡々とした言葉だったが、アクセルの切実な思いをスノウは感じていた。

ふと、スノウはアクセルの身体がまだ濡れているのに気が付く。

「アクセル、身体拭かないと錆びちゃうよ」

スノウは口に出し、そこでようやくアクセルのした暴挙を認識した。

本来、鉄属にとって水は天敵だ。錆を発生させて身体を腐食し、最終的には破壊する。鉄属にとって水の中に入るなど言語道断。なのにも関わらず、アクセルは水の中に飛び込んだのである。傍から見れば、自殺行為であった。

(私を、助けるため……?)

スノウは呆然と、アクセルを見つめる。

(でも、なんで?)

スノウの中には疑問が渦巻いていた。

4・5 変化(2)

アクセルは困惑しているスノウを見つめていた。

(スノウが……死ぬ?)

役割を果たさなくとも、寿命が短いと漠は言っていた。
しかし、スノウの身体にどこも異常は見られない。なのになぜ近
い内に死ぬと分かるのだ。意味が分からない。

それともクラウドと同じように、いきなり光りとなつて消えてし
まうのだろうか。

「スノウ、もう動けるのか?」

アクセルが声をかけると、スノウは驚いたように肩を震わせる。

「うん……もう平気」

スノウはアクセルに向かつて微笑みを浮かべた。その事に、アク
セルは微かな違和感を覚える。

(……まだ……また、変わった……)

スノウの浮かべる笑みは今までのものと少し違う。以前のものは
無邪気さを感じさせる、純粋な笑みだった。しかし今、浮かべてい
る笑みは穏やかで柔らかな印象を受ける。

(なぜなんだ? ……まさか、これが記憶の影響とでも言つのか?)
スノウは水晶に触れる度に変わって来た。つたな拙かつたはずの言葉が
一気に淀みなく喋れるようになり、以前は大人しく従順だったが、
今では自分の意思を主張するようになつていて。

これも、以前の記憶の影響なのだろうか。

そこまで考えて、アクセルは寒気を覚えた。

(なんだ、それ)

記憶一つでこれほど影響を受ける事に、アクセルは言いようの
ない恐怖を覚えたのだ。

(もしかして、全く別人のようになつていた可能性もあるのか?)
目に見える範囲でこれほどあるのだ。内面がどれほど変わつてい

るのか、考えたくない。本当に猿の言つたように、スノウが今までしていたのは以前の記憶をかき集めるための作業だったのだろうか。アクセルには、とてもそんな生易しいものだと思えなかつた。

「……スノウ……どこにも行かないよな？」

思わずそんな言葉が口に出ていた。アクセルは自身の声が震えている事に気付く。しかしそノウは気付かなかつたようだ。いつものように不思議そうに首をかしげている。

いつもと同じ仕草のはずなのに、アクセルはその仕草に違和感を覚えた。

「どうして？」

スノウの言葉を聞き、ようやくその違和感に気付く。今までと同じような仕草にも関わらず、受けた印象が全然違うのだ。今は疑問を口にしている、といづれもはぐらかすために思えた。

「…………」

アクセルは答える事が出来ない。言つてしまつたら、スノウの中で何かが大きく変わつてしまふ気がしたのだ。

「あ、腕が破れてるよ。大丈夫？」

マーティがスノウの腕が解れている事に気付く。よく見ると、その腕は何かで縫われていた。スノウは怪我をした事は無いはずだ。マーティも怪訝に思つたのか、その糸を引き抜いた。

「あつ…………」

スノウの腕から小さな砂時計が転がり落ちる。

アクセルはその砂時計を拾い上げた。マーティは砂時計を見て、目を細める。

「なるほどね」「

どこか納得したようにマーティは呟いた。その知つたような言葉に、アクセルは苛立ちを覚える。気が着いた時には、アクセルはマーティを睨みつけていた。

「何がなるほどなんだ」

「知らない方が、シアワセってやつだよ

手に持った砂時計は、呪きかけていた。

「いつまで油を売つてらつしゃるのですか」

マー・ティは全身の毛を逆立て、勢いよく背後を振り返る。

「ジル！ なんであなたがここに居んのよ！」

紳士服に身を包んだ男は大仰に肩をすくめた。その動作にマー・ティは更に苛立つ。

「あんたこそ、なんでこんな所で油売つてんのよ！ やつさと仕事をしなさい！」

「やれやれ、それはこちらの台詞ですよ。マー・ティ、あの沼を放置しましたね。ワタクシが元に戻したから良いものの、ワタクシが来なかつた場合の事は考へていなかつたのですか？」

マー・ティは舌打ちを打つた。

「知るか。あたしの力では無理つて知つてたんでしょう？ そんな白々しく言われてもムカつくだけだから」

マー・ティの言葉を無視し、ジルはスノウに目を向ける。アクセルの手にある砂時計を取り、それを眺めた。

「なるほど、これはこれは……難儀な事ですね」

ジルはスノウに砂時計を手渡す。スノウはそれを受け取り、とりあえず腕に戻すが、重みの関係で腕を動かすと少しズレる事に気付く。腕に戻す事を諦めたスノウは砂時計を手に持つことにした。

「あなたは、どうするのですか？」

ジルの言葉は漠然としていて、通常ならば理解出来ないだろう。しかし、今のスノウにはそれが何を意味しているかが分かつた。

「私は変わらないよ」

ジルは目を細める。頭の帽子に手をかけた。

「そうですか。 では、ワタクシたちは一足先に向かう事にいたしましょう」

マー・ティは顔をしかめる。

「それって、あたしも入つてんの？」

「当然です」

「ぼくはー？」

「あなたもですよ、猿

はーい、と猿は手を上げる。

「ちょっと待つてよ。あんた、なんでわざわざ出てきた訳？ 意味が分かんないんだけど」

マーティはジルを睨みつけた。本来であるなりば、ジルは姿を現す事は禁じられている。

アクセルはスノウの腕を引き、ジルを警戒していた。マーティと親しくしているのが余計に怪しげに拍車をかけているのだろう。

「あの方が気まぐれを起こしてね」

「……なんで」

「ワタクシにあの方の深遠なる思考を理解する事など出来ません」「知らない訳ね」

マーティはジルに背を向ける。ジルは意外そつこマーティに声をかけた。

「珍しい。あなたともあうお方が、命に背くのですか？」

「まさか。あたしを馬鹿にしてんの？」

マーティは鼻で笑つて一蹴する。そこでマーティは思いついたように戸ジルに向かつて呟いた。

「……まさか、知つててワザと喋つた？」

「そうと言つたらどういたしますか？」

マーティは大きく溜息をついた。不服そうにジルを見る。

「それがあの方の意志なら、あたしは何も言わないよ

ジルは微笑んだ。

「では、ワタクシたちは一足先に参ります。お待ちしていますよ、

白いお嬢さん」

「早めに行きます」

スノウが答えると、三人は一気に姿を消した。それと同時に、森から二つの影が現れる。

「……どこに行くつもりか、後で聞かせてもらうからな」

アクセルは湾曲刀の柄に手を添えた。スノウは頷く。

「うん」

4・6 聞入者

「話は聞かせてもらつたぜい！」

「ぜい！」

機械型の人物の後に続き、狼が語尾を復唱した。

「それで、何の用だ」

アクセルは湾曲刀の切つ先を機械型の人物 ドリトルに向ける。ドリトルはやれやれ、と手を上げて首を振つた。

「だーめだなあ、そんな短気じやあ。この俺様みたいな魅力は手に入らないぜ！」

「入らないぜっ！」

先程と同じように狼 カルーは復唱する。アクセルは眉を顰めた。

「そんな妙な魅力など、欲しくもない
「私も、そんなアクセル見たくない」

アクセルの言葉にスノウも同意する。その事にドリトルとカルーは驚愕の表情を浮かべた。カルーは二人に向かつて吠えたてる。
「お、お前ら馬鹿じやないの？ ドリトルの魅力が分かんないなんて、終わってるね。ドリトルはこの世界で一番、イカすナイスガイなんだぜ！ 一度、目を交換してもらつた方が良いんじゃないの！」
「そうだそうだ。この俺様の魅力を分からぬなんて、なんて可哀想な奴らなんだ。思わず同情しちまうぜっ」

ドリトルは腕で目に浮かんだ涙を拭う。アクセルは白けたような視線を二人に投げた。

「そんなもの、別に分かりたくない。それと、用がないならさつさと消えるがいい」

スノウもアクセルの言葉に強く頷いた。

「な、なんだとー！」

カルーは毛を逆立てて抗議する。そんなカルーを落ち着けるよう

に、ドリトルは口を開いた。

「落ち着けって、カルー。そんな怒りっぽかつたら……俺のような
ナイスガイになれないぜっ！」

「はっ、そうだった。平常心平常心……」

田の前のゴントのようなやり取りを眺めながら、スノウの中には焦りが募つていつた。

（こんな事、している場合じゃないのに……）

手に持つ砂時計を見ると、何故かその焦燥感は更に増す。時間が
ない、と主張しているように思えるのだ。そう思えば、もつ立ち止まつてはいられなかつた。

「私たちは遊んでる暇なんかないの。用がないなら邪魔しないで！」
スノウが声を荒立てるど、アクセルは驚いたように田を丸める。
しかし、すぐに田の前の障害物に目を向けた。

「そういう事だ。とりあえず、どつか行け。さもなくば、斬る」
アクセルは腰を落とし、いつでも相手に斬りかかるるような体勢
をとる。それを見て、ドリトルとカルーは慌てた。

「いや、違う違う。俺たちはお前たちを攻撃しようとか思っちゃい
ない」

「信用できん

ドリトルの言葉をアクセルは一蹴する。

「ほ、本当だよ。ボクたちは心を入れ替えたんだ」

「…………なにが目的なの」

スノウの問いかけに、ドリトルとカルーは顔を見合わせる。ドリ
トルはおもむろに口を開いた。

「その人型について行けば、普通なら行けない場所まで行けるんだ
る」

スノウは首をかしげ、アクセルは田を細めた。カルーは頷いて、
ドリトルの言葉に同意している。

「どういう事？」

「仮にそうだとして、オレたちに何の利点がある

アクセルの言葉に、ドリトルは大きく胸を張った。

「大有りさ！俺たちの盗賊テクで、罠とか隠し扉とか見つけんのよ」

「……それで？」

「隠された財宝を見つけて、俺たちはお金持ち街道一直線さ！」

空の彼方を指差し、ドリトルは大きく宣言する。カルーはその言葉を聞いてはしゃいだ。

「さつすがドリトル、冴えてるう！ カッコいいよ！」

「だろうだろう。もっと褒めたまえ」

カルーがドリトルを囁き立て、二人は勝手に盛り上がりしていく。一人の周囲には、常人ではとても理解出来ない空間が存在していた。スノウはアクセルの袖を引っ張る。

「行こ、アクセル」

アクセルは目の前の二人を警戒しながらスノウに尋ねる。

「道は分かるのか？」

「ん、なんとなく」

それならば大丈夫だろう、とアクセルも頷いた。

「そうか。なら、行くとするか」

アクセルは湾曲刀を鞘に収め、スノウの後を走る。スノウとアクセルは勝手に盛り上がっている一人を置いて、目的地まで一直線に進んで行った。

ドリトルとカルーはスノウとアクセルがいなくなつた事に気付かず、二人の世界を持続し続けていた。

「やつぱりドリトルってば最っ高ー！ ぼく、ドリトルと一緒に入
れて良かつたよ」

「だろうだろう。もつと俺を見習いたまえ。そうすればいづれ俺の
様なナイスガイになれるだろう」

「うつはーつ！ ドリトル、カッコいい！」

「というわけで、お前たちもこの俺様を見習、う……がいい……？」

そのため、ドリトルたちが目を向けた時には誰もいなかつた。

「…………」

「…………」

先程までの馬鹿騒ぎが鳴りを轟め、寂しい風が一人を包んだ。

ドリトルは身体を震わせる。

「お、お……」

「お?」

「俺たちを置いて行くなーっ!」

「行くなーっ!」

その声は森の奥へと木霊していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4773w/>

星屑たちの祈り

2011年11月23日17時52分発行